高松市埋蔵文化財調査報告　第109集

史跡高松城跡整備報告書 第２冊

石垣基礎調査報告書

第１分冊

２００８年2月

高　　松　　市
高松市教育委員会

史跡高松城跡整備報告書　第2冊

石垣基礎調査報告書

第1分冊

2008年2月

高　　松　　市
高松市教育委員会

野面石乱積み（天守台）

割石布積み（桜ノ馬場南面）

切石乱積み（太鼓門桝形）

石垣継ぎ足し痕跡（渡櫓台）

刻印石（矩櫓台）

高松空襲による被熱痕（桜御門）

例　言

1．本報告書は，高松市が平成16～18年度に実施した史跡高松城跡（しせきたかまつじょうあと）の石垣基礎調査の報告書である。

2．調査期間は次のとおりである。
基礎調査：平成16年4月1日～平成19年3月30日

3．調査は平成16年度に高松市都市開発部公園緑地課笹野尚子及び高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員大嶋和則の監督のもと，㈱空間文化開発機構に委託して行い，平成17・18年度において大嶋及び文化振興課非常勤嘱託中西克也が補足調査を行った。

4．本報告書は大嶋が執筆・編集を行った。

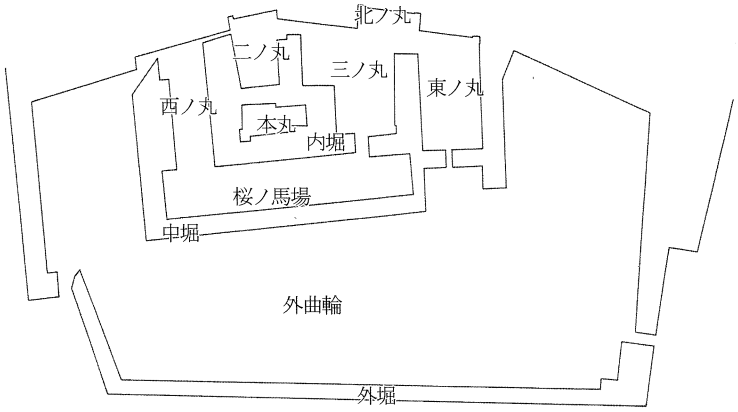
5．発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順，敬称略）
香川県教育委員会，香川県歴史博物館，鎌田共済会郷土博物館，㈶松平公益会，瀬戸内海歴史民俗資料館，阿河鋭二，東信男，胡光，松田朝由，松本和彦

6．挿図として，国土地理院発行1／25,000地形図「高松北部」を一部改変して使用した。

7．本報告の高度値は海抜高を表し，方位は国土座標第Ⅳ系（日本測地系）の北を示す。

8．調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管・活用している。

9．高松城内の曲輪の名称については，城内の縄張りの変化，各曲輪の使用方法の変化，新規建物の築造により，時期的に変化しており，一定していない。本報告書では，事実誤認を避けることから，一部古文書引用部分を除き，下記の用語で統一した。建物の名称については，『高松御城全図』（香川県歴史博物館蔵）に記載された名称を基本とする。



高松城略図

10．石垣構築技術等に使用される用語は，文献史料や石工により引き継がれてきたものなどがあり，各地方で様々

な言葉が用いられている。このため，混乱が生じることも予想されることから，本報告書では以下の用語を用いた。

石垣部分名称

用語	読み	解　説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分。
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分。外側に折れるものを出隅，内側に折れるものを入隅と呼ぶ。
天端	てんば	石垣の上面。
天端石	てんばいし	石垣の最上部の石材。
裾	すそ	石垣が地面と接する部分。
根石	ねいし	石垣の最下段の石。
築石	つきいし	石垣を構築する石材。平石とも言う。
間詰め	まづめ	築石の隙間に詰める小振りの石。
角石	かどいし	隅角部に使用する石材。
目地	めじ	石材同士の隙間。
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる。

石垣使用石材名称

用語	読み	解　説
野面石	のづらいし	加工していない石。自然石・転石とも言う。
割石	わりいし	割ることによって，大きさを整えたり，面を作ったもの。
切石	きりいし	矢等を用いて割ることにより，形を整形したもの。

積み方名称

用語	読み	解　説
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方。横方向に目地が通る。
乱積み	らんづみ	横目地が通らず，不規則に積む積み方。
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方。
落とし積み	おとしづみ	石材の間に落とし込んだような積み方。
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する２面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方。
鏡石	かがみいし	面を大きく見せる石材。

石材部分名称

用語	読み	解　説
面	つら	石垣の表面。
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち控が大きい面。
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち控が小さい面。
控	ひかえ	石材の奥行き。
尻	しり	表面から見て裏面部分。
胴	どう	石材の面と尻以外の部分。上面は背，下面は腹，左右は脇と細分する。
合端	あいば	石垣を構成する石同士の接点。
矢穴	やあな	石材を割る時にできる歯形のような跡。

石垣内部名称

用語	読み	解　説
栗石	ぐりいし	築石の尻側にある小振りの石材。
押石	おさえいし	築石のハラミやズレの防止のために石尻の後ろに置く石材。
介石	かいいし	築石の位置調整や位置固定のために置く石。介盤とも言う。
盛土	もりど	石垣の内部に盛られた土。
版築	はんちく	砂と粘土を交互に盛土し，タタキ固めること。
地山	じやま	築城以前の層。高松城では石垣内部はすべて盛土であり，基盤層のことを言う。

目　次

巻頭図版

例　言

目　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の体制…… 2
　第３節　調査の経過…… 3

第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境…… 4
　第２節　高松城築城以前の歴史的環境…… 4
　第３節　高松城の歴史的環境…… 6
　第４節　廃城後の歴史的環境…… 7

第３章　調査の目的及び方法
　第１節　調査の目的…… 11
　第２節　調査の方法…… 11

第４章　考察
　第１節　文献史料・絵図等から見る石垣改修…… 15
　第２節　破損石垣の検討…… 29
　第３節　石垣の危険度…… 35

調査票…… 43

報告書録

挿　図　目　次

第1図　高松城跡位置図…… 1
第2図　史跡高松城跡整備事業組織図…… 2
第3図　高松平野地形分類図(高橋1992より抜粋)…… 5
第4図　高松城跡および周辺部発掘調査箇所位置図…… 10
第5図　石垣分布図…… 13
第6図　生駒家時代讃岐高松城屋敷割図(高松市歴史資料館蔵) 26
第7図　高松城下図屏風(香川県歴史博物館蔵)…… 26
第8図　旧高松御城全図(香川県歴史博物館蔵)…… 27
第９図　明治15年12月30日撮影高松城天守写真
　　(ケンブリッジ大学図書館蔵)…… 27
第10図　二ノ丸・三ノ丸・北ノ丸北面を撮影した古写真… 28
第11図　艮櫓台・鹿櫓台を撮影した古写真…… 28
第12図　石垣現況図1(石垣破損状態の区分)…… 37
第13図　石垣現況図2(崩落と利用上の危険性の区分)…… 39
第14図　石垣崩落等危険箇所図…… 41

挿　表　目　次

表１　史跡高松城跡整備検討委員会名簿…… 2
表２　史跡高松城跡石垣検討委員会名簿…… 2
表３　史跡高松城跡建造物検討委員会名簿…… 2
表４　調査工程表…… 3
表５　高松城略年表…… 8
表６　高松城跡周辺発掘調査履歴（～2007.12.28）…… 9
表７　地区別石垣数と石垣番号…… 11
表８　石垣崩落の危険性分類表…… 12
表９　石垣利用上の危険性分類表…… 12
表10　石垣危険度分類表…… 12
表11　高松城改修履歴一覧…… 16
表12　破損程度a1の石垣の破損種類…… 30
表13　破損程度a2の石垣の破損種類…… 31
表14　構造的要因による破損石垣及び破損種類と破損位置… 33
表15　樹木の影響による破損石垣及び破損種類と破損位置… 34
表16　水位変動の影響による破損石垣及び破損種類と破損位置… 34
表17　その他の要因による破損石垣及び破損種類と破損位置… 34
表18　その他軽微な人工的改変による破損石垣及び破損種類と破損位置… 35
表19　地区別危険度別石垣面数…… 35

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

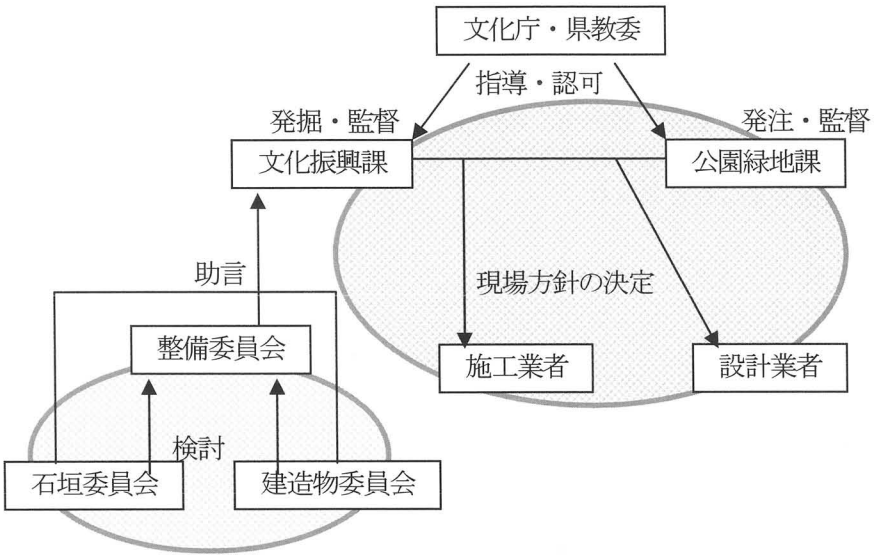
高松城跡は築城から約420年が経過しており，各所の石垣にハラミ・ズレ・ヌケといった現象が見られている。高松市教育委員会では，平成元年度に崩壊の危険性があると認識していた天守台・地久櫓台・二ノ丸東面・簾櫓台・三ノ丸東面・旧大手桝形の６箇所で石垣石材の移動量調査を実施しており，特に危険性が高いと判断した地久櫓台について平成10年度から解体修理を実施中であった。

しかしながら，平成15年10月25日に鉄門の北側石垣西面の石材が脱落し，裏込めの栗石が流出した。風の強い日であり，石垣上部に植栽された松が強風で揺れたことが毀損原因と考えられた。同石垣は，危険性の認識はあったものの，平成元年度の調査地には含まれていなかった。また，地震や台風による自然災害による毀損ではなく，日常的管理の中での毀損であり，史跡内の石垣の傷みが崩壊寸前まで迫っている箇所が他にも存在する可能性が考えられた。このため，高松市が実施する史跡高松城跡整備事業に際し，現存する石垣の分布，保存状況，編年，積み方，補修箇所及び崩落等危険箇所等を調査するとともに，今後の石垣の保存整備に向けての基礎的判断の拠りどころとなるべき整備指針を作成する必要があり，平成16年度に石垣の悉皆調査を実施することとなった。

第１図　高松城跡位置図

第２節　調査の体制

高松市では，史跡高松城跡の整備を行うにあたり，都市整備部（平成18年度までは都市開発部）公園緑地課が工事の発注，施工時の土木監督を担当し，教育委員会文化部文化振興課が発掘調査，施工時の文化財監督を担当している。なお，平成16年12月に史跡高松城跡整備検討委員会（以下整備委員会）を設置し，整備の検討を行っている。さらにその下部組織として石垣に関することについては史跡高松城跡石垣検討委員会（以下石垣委員会），建造物に関することについては史跡高松城跡建造物検討委員会（以下建造物委員会）を設置し，検討を行っている。これら委員会の助言を元に，公園緑地課，文化振興課，設計業者，施工業者による打合せ会議を行い，現場の方針を決定している。今回の調査については，石垣委員会の助言のもと，公園緑地課，文化振興課，調査委託会社が協力して調査にあたった。



第２図　史跡高松城跡整備事業組織図

表１　史跡高松城跡整備検討委員会名簿

	氏　名	所　　属	専門分野	備　考
委員長	渡邉 定夫	東京大学名誉教授	都市計画	
副委員長	吉田 重幸	元香川大学農学部教授	緑地環境学	
委員	尼﨑 博正	京都造形芸術大学教授	日本庭園史	H20.1.9～
委員	牛川 喜幸	長岡造形大学名誉教授	日本庭園史	～H20.1.8
委員	木原 溥幸	徳島文理大学文学部教授	日本史学	
委員	五味 盛重	㈶文化財建造物保存技術協会参与	古建築	
委員	西 和夫	神奈川大学工学部教授	建造史，意匠	

表２　史跡高松城跡石垣検討委員会名簿

	氏　名	所　　属	専門分野
委員長	五味 盛重	㈶文化財建造物保存技術協会参与	古建築
委員	内田 九州男	愛媛大学法文学部教授	近世文化史
委員	西田 一彦	関西大学名誉教授	地盤工学

表３　史跡高松城跡建造物検討委員会名簿

	氏　名	所　　属	専門分野
委員長	西 和夫	神奈川大学工学部教授	建築史，意匠
副委員長	谷 直樹	大阪市立大学大学院教授	建築史
委員	波多野 純	日本工業大学工学部教授	都市史，建築設計
委員	小沢 朝江	東海大学工学部教授	建築史
委員	三浦 要一	高知女子大学生活科学部准教授	建築史

第3節 調査の経過

高松市都市開発部公園緑地課は平成16年7月20日に，㈱空間文化開発機構と委託契約を締結し，調査を実施することとした。現地調査にあたっては，高松市都市開発部公園緑地課監督員及び高松市教育委員会文化財専門員の立会・監督のもとで行い，そのデータの取りまとめについても，文化財専門員の指導のもと実施した。調査期間は平成16年7月20日から平成17年3月25日である。

一方，史跡高松城跡整備事業の実施にあたり，史跡高松城跡整備検討委員会が設置されており，その委員会の下部組織として史跡高松城跡石垣検討委員会を設置するよう要望があり，平成17年1月28日に開催した第1回委員会において，石垣の悉皆調査は単年度の業者委託のみに頼らず，市の担当者が確認する必要があるとの指導を受けた。平成16年度の調査にあたっては，文化財専門員の立会を行ってはいたが，引き続き平成17・18年度においても監督員及び文化財専門員により補足調査を実施することとした。新たに判明した事実等を追加・修正し，平成18年度末で調査を完了した。また，この間に資料調査も行った。平成19年度は調査成果を取りまとめるとともに，報告書の執筆・編集を実施した。

表4　調査工程表

	平成16年度				平成17年度				平成18年度				平成19年度			
写真撮影・計測																
石垣観測																
データ入力																
補足調査																
報告書執筆・編集																

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松城跡は，香川県の瀬戸内海側を占める讃岐平野の東側に在って，東を屋島・立石山・雲附山，南を日山・上佐山，西を五色台山塊に遮られた東西９km，南北８kmの扇状地性の海岸平野である高松平野の北端部に位置する。当地域を構成する地質は，基盤としての領家花崗岩類（深度－100～－200 m）と，その上位に層厚100 m以上で分布する三豊層群および層厚約10 mの段丘堆積物からなり，最上部の層厚10～20 mが沖積層である。また，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食解析から取り残されて形成された台地状あるいは円錐状の小山塊が群立している。前者の台地群はメサと呼ばれ，後者の円錐状の小さい単体の山々はビュートと呼ばれ，讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。両者は共に瀬戸内火山岩類に属し，今から約1,400～1,100万年前（中期中新世）の火山活動の産物である。

現在の高松城周辺の地形環境は，近世城下町や周辺の干拓によって整えられたが，より本源的には高松平野を流れる諸河川と，潮流による海浜部地形の形成を出発点としている。その大部分が讃岐山脈に源をもつ香東川が運ぶ土砂の堆積によって形成されたと考えられており，これまでの発掘調査や微地形分析により分ヶ池，下池，長池，大池を結ぶ流路等，数本の主流路が確認されている（高橋1992）。これら主流路のうち東方の流路は弥生時代後期から古代にかけて次第に河川としての機能を喪失したのに対し，石清尾山塊の東側の流路は近世初頭（寛永期）まで主要な流路群として存在した（佐藤2003）。現在，高松平野中央部に所在する石清尾山塊の西側を流れる香東川であるが，この流路は近世初頭に流路を一本化したものである。なお，石清尾山塊東側の旧流路は石清尾山麓を巡って西浜に至る流路群（現在の摺鉢谷川に平行）と石清尾山南麓から上福岡に至る流路群（現在の御坊川に平行）に細別できる。高松城跡は，この２本の流路群に挟まれた地域に所在する。

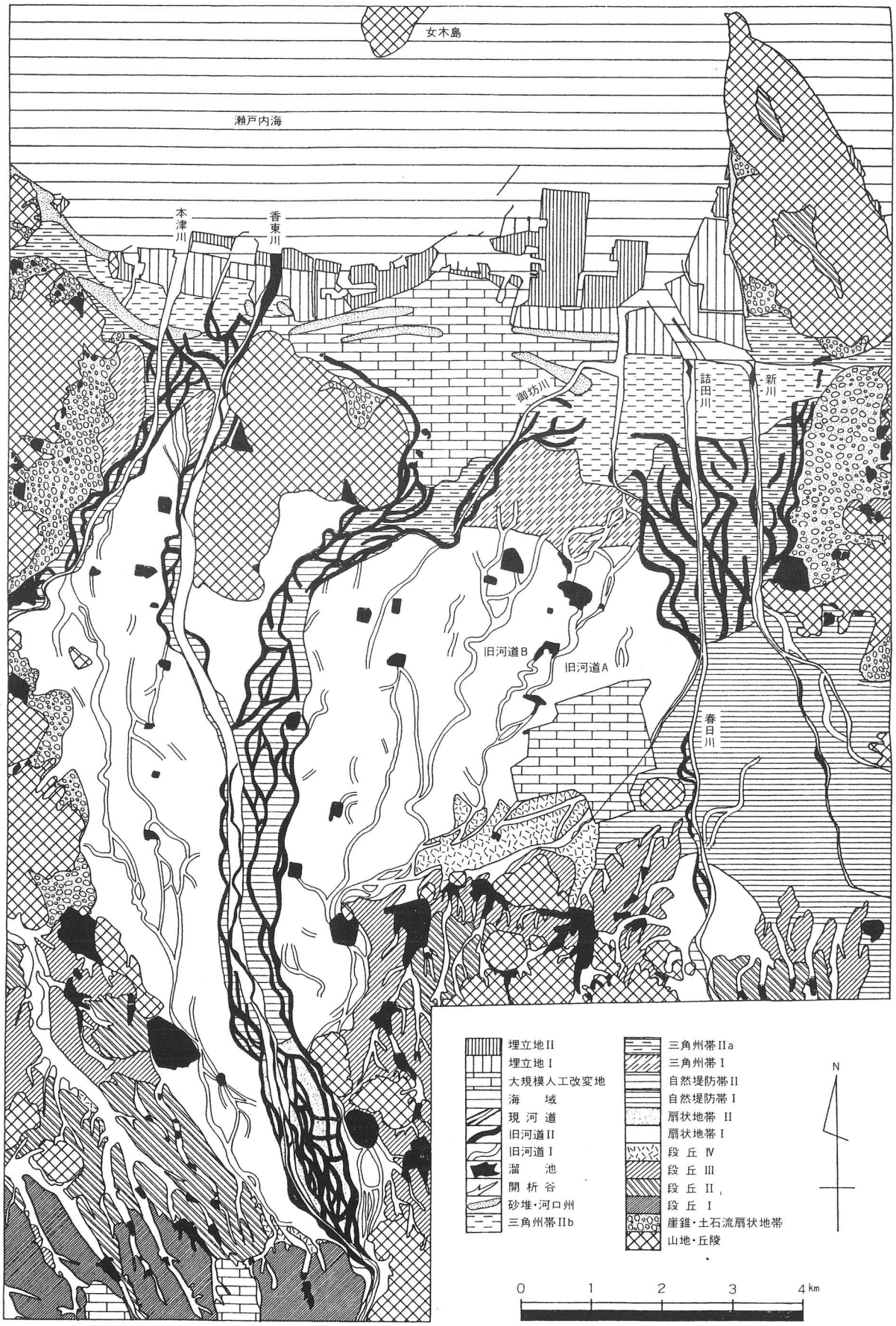
高松城跡周辺は高松城及び城下の建設に始まる市街化により旧状を復元することは困難であるが，近世城下の大手筋とほぼ一致する旧河道分岐点から高松城本丸にかけては周辺より高いことから，微高地状を呈した比較的安定した土地の可能性が考えられる。これまでの高松城跡周辺の調査では11世紀後半以降の遺構・遺物が検出されており，既に中世前半には安定した地盤が面的に形成されていたことがうかがえる（佐藤2003）。なお，松平大膳家上屋敷跡において弥生時代終末期と考えられるピット群，８世紀末～９世紀と考えられる溝が検出されており（小川ほか2004），標高の高い大手筋では，微高地の形成がさらに遡る可能性がある。

この微高地の海浜部には，現在のJR軌道とほぼ同位置・同方向の砂堆がある（高橋1992）。高松城跡東ノ丸（渡部ほか1987）や浜ノ町遺跡（乗松2004）の発掘調査成果を考慮すると，この砂堆は現在のJR高松駅付近で最も海側に突出するとみられ，やや南に湾曲して東ノ丸北半へと連続するようで，中世を通じて堆積が進んだことをうかがわせるデータが得られている。

第２節　高松城築城以前の歴史的環境

先述したように，高松城跡周辺では，古代に遡る遺構はほとんど見られず，松平大膳家上屋敷跡において弥生時代終末期と８世紀末～９世紀と考えられる遺構がわずかに検出されているのみである。ただし，高松城跡周辺での発掘調査において弥生土器や須恵器等の出土量は決して少なくなく，大手筋付近に遺跡が所在する可能性は否定できない。なお，古代では平安期の『和名抄』に見られる香川郡12郷の１つである笑原郷に属していたと考えられる。

中世の状況については，文献史料から読み取れる。築城直前の高松については，『南海通記』巻廿の記述が有名である。西側と東側に海が湾入しており，その間の砂州（陸地）が海に向かって突き出す様子が，あたかも一筋の矢のようであり，そのため「篦原」郷と称され，郷内には，「西浜」「東浜」という漁村があったと記載されている。これらから，「篦原」郷が後の高松城下に相当することがうかがえるが，「篦原」という郷名は『和名抄』や中世文書にもみえず，『南海通記』も他の巻では「野原」郷と呼称している。したがって，地域の呼称としては「野原」郷が一般的であったと考えられる。野原郷では，応徳３年（1086），白河天皇の退位に伴い，郷内の勅旨田が立券されて野原庄が成立し，後に妙法院門跡領となっている。その庄域は康治２年（1143）の太政官牒案（『安楽寿院古文書』）によると，東西南北ともに条里坪付けで記されており，東・西・北は野原郷内で，南は坂田郷に及ぶことが分かる。なお，『昭慶門院御領目録案』（嘉元４年：1306）には，野原郷が知行地としてみえるため，郷内全体が立庄されたのではないことが分かる。



第3図　高松平野地形分類図（高橋 1992 より抜粋）

野原郷・野原庄の状況についても，文献史料及び発掘調査から判明しつつある。まず，応永19年（1412）に虚空蔵院（與田寺）の僧増範が願主となって勧進書写した『北野天満宮一切経』の奥書に野原の寺院として無量壽院・極楽寺・福成寺が見られることから，野原に寺院が多く所在していたことがうかがえる。これらの寺院のうち，無量壽院が発掘調査によって検出されている。「野原濱村无量壽院 天文（以下欠損）九月（以下欠損）」と刻まれた瓦が高松城西ノ丸の下層から出土している（中西ほか2005）。同寺は『無量壽院随願寺記』等によると，天平11年（739）に坂田郷室山の麓に建立された寺で，天文年間（1532～1555）に兵火にかかり野原郷八輪島に移転しており，高松城築城に際して再度移転している。「天文」と刻まれた瓦や同地の出土遺物が16世紀後半を主体とすることは寺記の記載と一致する。なお，応永19年当時は寺記の記述からすると坂田郷内に所在しており，『安楽寿院古文書』に記載された坂田郷にまで及ぶ野原庄を裏付けるものである。

また，文安2年（1445）の『兵庫北関入舩納帳』に「野原」を船籍地としたものがみられる。港の位置については，文献史料から読み取るのは難しいが，高松城跡（西の丸町地区）では，中世前半の港湾関連施設と木製碇が検出されている（佐藤2003・松本2003b）。搬入された土器も高比率で出土しており，他地域との交易が活発であったことがうかがえる。

港湾施設以外にも，これまでの周辺の発掘調査において11世紀後半以降の遺構が検出されている。浜ノ町遺跡では白磁四耳壺を埋納していた13世紀末～15世紀末の集落が検出され（乗松2004），東ノ丸地区では16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている（渡部ほか1987）。特に片原町遺跡（小川2002）においては屋敷地（居館）を囲む15～16世紀のL字形の大溝が検出されている。野原に基盤を置いた中世の領主層については，同時代の史料がほとんど存在しないが，『南海通記』に列記されている。永正5年（1508）の香西氏圍山田郡三谷城記では，「土居構ノ小城持」として真部・楠川・雑賀，「塹セヲ構ヘタル者」として唐人弾正・片山玄蕃・仲備中・岡本（岡田の誤りか？）・藤井が挙げられている。また元亀2年（1571）の香西宗心備州兒嶋陣記では，「城持ノ旗下」として藤井・雑賀・岡田丹後・真部，「其村持タル者」として楠川太郎左衛門，「香西城下名アル村主」として唐人弾正・片山志摩・藤井太郎左衛門尉・仲飛驒守が挙げられる。

以上から，中世の高松城跡周辺は多くの寺院や小領主を抱えることができるだけの経済的基盤を有した港町「野原」と考えられ，地域の中心機能を果たしていた可能性が高い。

第3節　高松城の歴史的環境

高松城は，天正15年（1587）に讃岐1国17万3千石の領主に封ぜられた生駒親正によって天正16年（1588）に築かれた近世城郭である。築城に関する故事はほとんど伝えられておらず，わずかの史書が天正18年（1590）の築城完成記事を載せるのみで，詳細は不明である。なお，築城に際してそれまでの「野原」の地名を廃し，山田郡高松郷の名前をとり「高松」と称し，それまでの高松を「古高松」と称するようになった。築城当初の縄張りについても諸説があり，『南海通記』によると藤堂高虎と黒田孝高が見分を行い，黒田孝高の助言により親正が城地として定めたとされている。一方『讃羽綴遺録』によると細川忠興または黒田孝高によるとされている。本丸を中心に右回りに二ノ丸・三ノ丸・桜ノ馬場・西ノ丸の4つの曲輪を配し，さらにその外側に外曲輪が巡る，いわゆる「連郭式＋梯郭式」の曲輪配置である。本丸と二ノ丸を囲む内堀，三ノ丸と桜の馬場・西ノ丸を囲む中堀，その外側で武家屋敷の建ち並ぶ外曲輪全体を囲む外堀の三重の堀が見られる。やや時代が下るが，17世紀中葉に描かれたとされる『高松城下図屏風』によると，城下の南端として表現された寺町の外側（南側）に東西方向の堀状の水路が描かれている。これは，ほぼ同時期成立とみられる『讃岐高松・丸亀両城図 讃州高松』でも描写されており，19世紀前半の絵図でも確認でき，城下東辺を画する仙場川に繋がっている。『高松城下図屏風』を仔細に観察すると，堀状の水路は北半が埋め立てられて馬場（古馬場）となっており，17世紀中葉には既に本来の形態から改変された状況であったことがうかがえる。つまり，本来の水路幅は外堀に匹敵する規模であったことが推測でき，しかも水路北側（城からみて内側）に寺町が展開すること，また大手筋の町名が水路より北側で「丸亀町」，南側で「南新町」となることが指摘できることから，この「水路」は城下を囲繞した総構えの名残である可能性が高いと考えられる。さらに，南西に所在する石清尾山塊を防御に利用し，城下の西側郊外を流れる香東川には橋を架けないなどあらゆる配慮がなされていた。

生駒期の城郭の変遷は不明な点が多いが，寛永4年（1627）の『讃岐伊豫土佐阿波探索書』によると，城郭の破損状況や修復が行われていない様子が記述されており，『生駒家文書』によると寛永13年（1636）に石垣や船入を元のように修築することが許可されている他は改修の記録は無い。このことから生駒期を通じて大幅な改変はなされていないと考えられる。

生駒親正は豊臣政権下では，中村一氏・堀尾可晴とともに「三中老」として五大老・五奉行の間を調整し

たとされるが，職制としての「三中老」の存在は疑問視されている（谷口 2000）。その後，関ヶ原の戦いで親正が西軍に属したが，子の一正が東軍に属したことから，讃岐１国は一正に与えられることとなった。生駒氏の治世は正俊，高俊と４代続くが，家臣同士の争いから生じたお家騒動（生駒騒動）により，寛永 17 年（1640）に出羽国矢島１万石に転封された。

生駒家の後，一時的に讃岐１国は伊予３藩により分治され，高松城は大洲藩加藤泰興に預けられるが，寛永 19 年（1642），徳川御三家の水戸藩主徳川頼房の長子松平頼重が東讃岐 12 万石の領主となった。水戸家を継いだ徳川光圀は頼重の子を水戸家の後継とし，実子頼常を高松藩の２代藩主としている。その後も高松藩と水戸藩の間では養子縁組が行われている。他の御三家の分家は３万石余が最高であることや，江戸城における高松藩主の詰所が溜間となるよう格式が設定されたことから，高松藩が重要視されていたことがうかがえる。このことは頼重が讃岐入部の際に，幕府より中・四国の監察の密命を受けたとされる『増補高松藩記』の記述に通じるものがある。

頼重は，正保３年（1646）以降，石垣の修築を順次行い，寛文 10 年（1670）にはそれまでの３重であった天守を３重５階（３重４階＋地下１階）に改築した。『小神野夜話』等によると，姫路城天守を模倣しようとしたが断念し，小倉城天守を模倣したとしており，現存する天守の写真や絵図から，南蛮造り（唐造り）であることがうかがえる。また，天守１階平面が天守台から張り出していることも特徴の一つである。さらに頼重と２代藩主頼常は寛文 11 年（1671）から延宝５年（1677）に北ノ丸・東ノ丸の造営を行い，月見櫓や艮櫓を建築した。北ノ丸は，三ノ丸北東部を拡張し，石垣で三ノ丸と分離させることで造営された。また東ノ丸は，旧「いほのたな町」（魚棚町）東辺に堀を掘削して造営された。これに伴い，それまでの大手門の木橋が撤去され，新たに「桜ノ馬場」東面に造営された太鼓門が大手門としての機能を担うようになった。そして北ノ丸・東ノ丸造営後，三ノ丸に御殿（披雲閣）が造営された。披雲閣の造営により，それまでの御殿（本丸→本丸・二ノ丸）と対面所（「桜ノ馬場」）に分掌されていた政庁機能が一本化された。同時に，それまで西ノ丸には，生駒期に生駒隼人，松平期には肥田和泉といった大身の家臣ないし身内の屋敷があったが，これら屋敷地も外曲輪へ移動し，内曲輪と外曲輪との機能分化が明確化し，縄張りにも藩主権力の確立過程が示されていると言える。

その後，宝永及び安政の南海地震や，落雷，火事，そして海城ゆえの高潮被害等の災害記録が見え，また，石垣や堀浚え等の許可の記録は見られるが，大幅な縄張りの改変もなく，松平氏の治世は明治維新まで続くことになる。

また近年，外曲輪において多くの発掘調査が行われ，絵図や文献との整合が確認されている。内曲輪の旧大手前面に所在した藩主連枝松平大膳家屋敷では『高松市街古図』に描かれた位置で門を検出した他，同家の家紋をあしらった理兵衛焼や瓦が出土している（大嶋 2002・小川 2004）。同様の事例は，西の丸町地区の発掘調査において，『高松城下図屏風』に描かれた鍵型の道路が検出され，生駒期には上坂勘解由，松平期には大久保家の屋敷地であり，そのことを示す木簡や家紋瓦が出土している（佐藤 2003）。また，外曲輪南辺では『高松城下町屋敷割図』に「井戸址」という標記が見え，同位置で生駒家の家紋が刻印された石材を使用した大型井戸が検出されている（小川 2006b）。

一方，城下については，『高松城下図屏風』によると，早くも 17 世紀中葉には総構えラインを超えて城下が拡大している様子が描かれている。18 世紀代には，南に延伸された大手筋と，西浜村方面の丸亀街道沿いを中心に町屋が広がり，南端は石清尾八幡門前（旅籠町・馬場町），西端は擂鉢谷川（西浜町）にまで達するようになる。また，これらの町家に挟まれるように，城下南西側に武家屋敷が広がるようになる。さらに拡大した城下の南辺に，新たな寺町が形成されている。その結果，一部に田畑は含むものの，東は仙場川，南は旅籠町から仙場川に架る高橋に延びる水路，西は摺鉢谷川より内側が新たな城下の範囲となった。また，慶安・明暦期には，多くの町触が出されており，この時期に町方支配のための都市法が整備されたものとみられる。城下では紺屋町遺跡において発掘調査が行われているのみで，詳細は不明である。紺屋町遺跡は絵図によると江戸時代には紺屋町と鍛冶屋町があった場所に比定され，鍛冶屋町に相当する場所からふいご羽口や鉄滓が出土している（末光 2003）。なお，城下町の支配機能としては，町奉行（当初１名で後２名）と町与力が置かれていた。奉行所は絵図では高松城の南東隅に位置し，発掘調査でも奉行所の堀跡と考えられる遺構が検出されている（小川 2005）。

第４節　廃城後の歴史的環境

慶応４年（1868），朝廷は高松藩を朝敵として征討することを命じた。これに対し，高松藩は小夫兵庫正容と小河又右衛門久成を切腹させ，城下に陣を構えた土佐藩を中心とした官軍に開城した。維新後も内曲輪の

管理は高松藩が行っていたが，『公文録』等によると，明治３年（1870）に建物の老朽化および修繕管理費用が多額に及ぶことを理由に政府（弁官）に廃城願を出し，許可されている。明治４年（1871），藩は領民に城内の見物をさせ，藩庁を内町の松平操邸に移して廃城の準備を行っていたが，城内に大阪鎮台第２分営が置かれ，兵部省（のち陸軍省）の管理となった。その後，鎮台の配置を改め，明治６年（1873）に丸亀に広島鎮台の営所が置かれることとなり，明治７年（1874）丸亀営所の新築により，高松営所が閉じられることとなった。その後も陸軍省の管理下にあり，城郭建物は老朽化を理由にそのほとんどが取り壊され，明治17年（1884）には天守も取り壊しとなった。その後，内曲輪は明治23年（1890）に松平家に払下げとなった。『建物拂下登記願』によると太鼓門・桜御門（及び多聞）・烏櫓（及び多聞）・武櫓（及び鉄門・黒櫓）・廉櫓・文櫓・多聞・月見櫓（及び多聞）・鹿櫓（及び多聞）・艮櫓が残存していたが，明治35年（1902）の第８回関西府県聯合共進会の会場となった際の高松城の絵図『共進会場平面図』では，建物のほとんどが無くなっていることがうかがえる。一方で，明治34・35年（1901・1902）には天守台に藩祖頼重を祀る玉藻廟が建築され，大正３～６年（1914～1917）にかけて三ノ丸に松平家の別邸として披雲閣が建築され，内苑が整備された。

外曲輪の変貌はさらに激しく，外堀が早くから埋められ城下と一体となった。さらに，明治19年（1886）に尋常小学校，明治23年（1890）に裁判所，明治24年（1891）に郵便局，明治28年（1895）に県庁等公共施設が建築された。明治30～33年（1897～1900）には外堀の北西端の堀川港を埋め，高松築港工事が行われ，明治34～37年（1901～1904）及び大正10～昭和３年（1922～1928）には拡張工事が行われ，城の北側海域が埋め立てられ，海城としての景観が失われることとなった。明治末～昭和初期にかけては，西ノ丸および内堀の一部が市に譲渡され，その一部に皇太子殿下（昭和天皇）御成婚記念道路（現在の中央道路）が建設された。

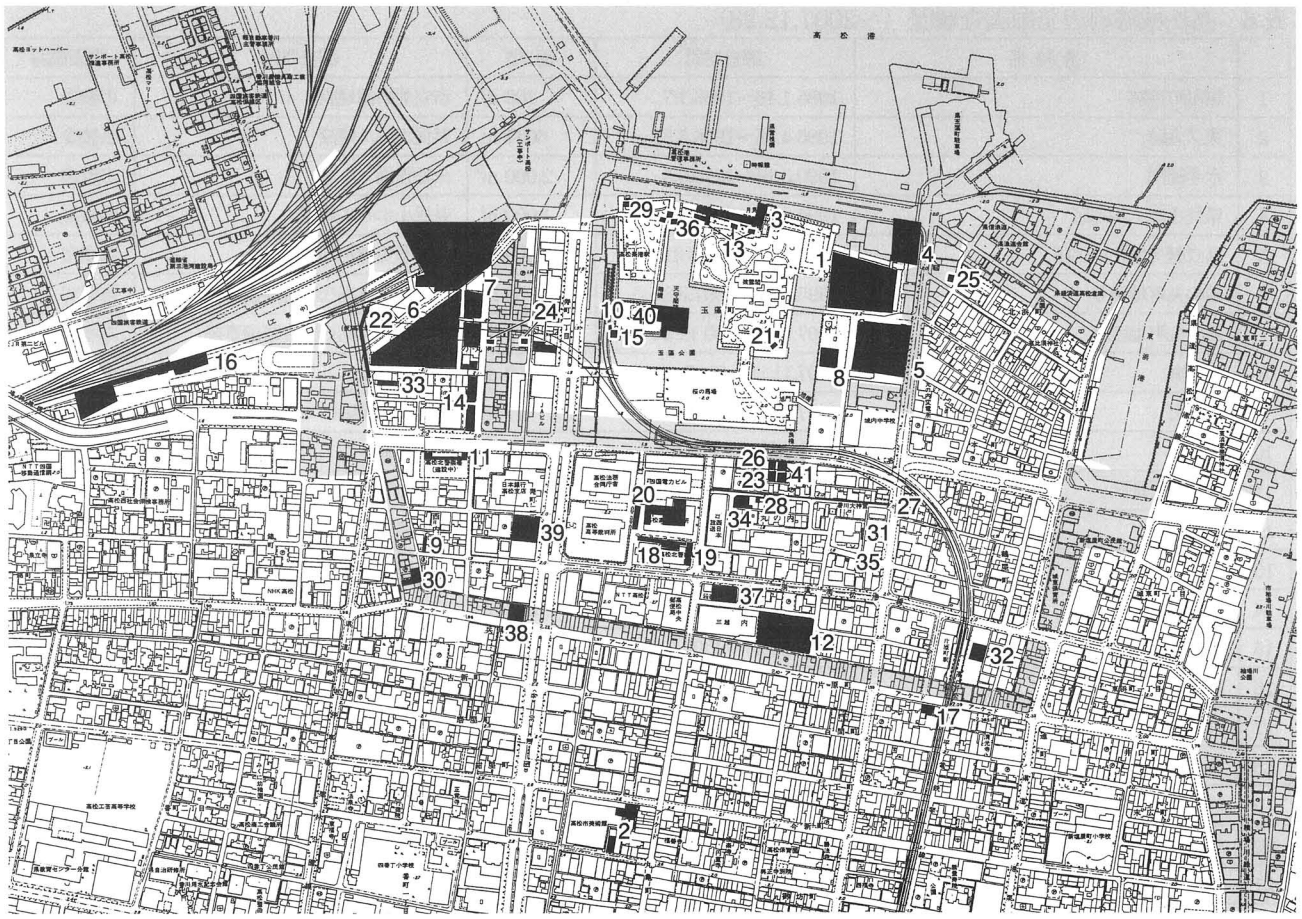
昭和20年（1945）の高松空襲では，桜御門が焼失し，市街地の大部分が空襲に遭い，松平家の文庫や藩政期の文書・記録を引継ぎ保管していた香川県庁も焼失した。明治期の破却や空襲による焼失をまぬがれた月見櫓（含続櫓）・水手御門・渡櫓・艮櫓は昭和22年（1947）に国宝（現在の重要文化財）の指定を受けた。この後，東ノ丸は運輸省や裁判所の所有地となったが，昭和29年（1954）に本丸・二ノ丸・三ノ丸・北ノ丸・桜の馬場及び残存する堀が高松市の所有となり，昭和30年に国史跡に指定された。昭和32年（1957）には月見櫓・水手御門・渡櫓の修理が行われた。しかし，艮櫓が所在する東ノ丸北部は日本国有鉄道の所有地で，史跡指定地外となっており，その修理及び修理後の管理が出来ないことから，昭和42年（1967）に史跡指定地内の太鼓櫓台に移築復元された。その後，東ノ丸が県有地になり，昭和59年（1984）には艮櫓台を含む東ノ丸北辺の石垣が史跡の追加指定を受け，現在に至っている。なお，外曲輪や城下については，戦後の復興で大きく変貌したが，現在も地割りや町名に名残が見られる。

表５　高松城略年表

西暦	和暦	主な出来事
1588	天正16	生駒親正が野原の海浜で高松城築城に着手
1627	寛永４	幕府隠密が讃岐を探索し高松城の様子について報告
1636	寛永13	石垣の修築を許される
1640	寛永17	生駒藩騒動の処分として，生駒高俊を出羽国矢島１万石に転封
1642	寛永19	松平頼重，常陸下館から讃岐高松12万石へ転封を命じられる
1646	正保３	二ノ丸（＝西ノ丸・桜の馬場）・三ノ丸の石垣修築を許される
1662	寛文２	落雷で高松城本丸（＝二ノ丸）北西隅の矢倉焼失，多門56間類焼，黒金門東北隅の矢倉のそばで鎮火する
1670	寛文10	天守修築完成
1676	延宝４	北ノ丸矢倉（＝月見櫓）の上棟をする
1677	延宝５	艮矢倉が完成
1707	宝永４	宝永南海地震で天守・多聞の屋根壁破損，石垣・塀崩壊，櫓崩壊 石垣の修築許される
1729	享保14	乾櫓（＝簾櫓？）に落雷
1854	安政１	安政南海地震で天守屋根壁破損，本丸一重櫓破損，石垣・塀破損，城内建物大破
1868	慶応４	官軍に開城
1884	明治17	高松城天守解体
1917	大正６	披雲閣が完成
1954	昭和29	高松市の所有となる
1955	昭和30	史跡指定を受け，高松市立玉藻公園として開放

表6　高松城跡周辺発掘調査履歴（～2007.12.28）

	遺 跡 名	調査期間	面 積	調査原因	調査機関
1	紺屋町遺跡	1985.1.16～1986.1.7	200 ㎡	市立美術館建設	市教委
2	東ノ丸跡	1985.4.15～1986.5.31	6047 ㎡	県民ホール建設	県教委
3	水手御門	1990.5.14～1990.6.5	2,000 ㎡	公園整備	市教委
4	県民小ホール地区	1995.2.7～1995.3.31	1,000 ㎡	県民小ホール建設	県教委
5	県立歴史博物館地区	1995.4.1～1996.3.31	5,000 ㎡	県立歴史博物館建設	県埋文
6	西の丸町地区Ⅱ	1995.12.1～1997.3.31	4,539 ㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
7	西の丸町地区Ⅲ	1997.6.1～2000.12.31	10,052 ㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
8	作事丸	1997.11.20～1997.12.25	300 ㎡	事務所建設	市教委
9	西内町	1997.7.10	47 ㎡	PTA 会館建設	市教委
10	地久櫓	1997.12.3	4 ㎡	史跡整備	市教委
11	高松北署地区	1998.3.1～1998.6.30	1,000 ㎡	高松北警察署建設	県埋文
12	内町	1998.4.16	65 ㎡	店舗建設	市教委
13	三の丸	1998.7.8～1998.8.11	14 ㎡	史跡整備	市教委
14	西の丸町地区Ⅰ	1999.4.1～2000.12.22	390 ㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
15	地久櫓台	1999.10.25～2004.3.23	170 ㎡	史跡整備	市教委
16	浜ノ町遺跡	2000.2.15～2002.3.31	4,992 ㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
17	片原町遺跡	2000.6.15～2005.6.22	120 ㎡	ビル建設	市教委
18	丸の内地区	2001.4.1～2001.9.30	488 ㎡	家庭裁判所建設	県埋文
19	松平大膳家中屋敷跡	2002.2.1～2002.3.25	99 ㎡	弁護士会館建設	市教委
20	松平大膳家上屋敷跡	2002.4.15～2002.9.1	970 ㎡	ビル建設	市教委
21	三の丸，竜櫓台北側	2002.10.7～2002.10.10	8 ㎡	公園整備	市教委
22	西の丸町D地区	2002.10.10～2002.10.30	131 ㎡	サンポート高松総合整備事業	県教委
23	丸の内	2002.11.28～2002.11.29	10 ㎡	ビル建設	市教委
24	無量壽院跡	2002.11.28～2003.3.14	490 ㎡	都市計画道路高松駅南線建設	市教委
25	中掘，北浜町	2003.5.13	14 ㎡	共同住宅建設	市教委
26	丸の内，都市計画道路高松海岸線街路事業	2003.6.11	23 ㎡	都市計画道路高松海岸線建設	市教委
27	丸の内，再生水管布設工事	2003.8.18～2003.9.22	296 ㎡	再生水管布設	市教委
28	丸の内，個人住宅建設	2003.8.25～2003.8.26	22 ㎡	個人住宅建設	市教委
29	二の丸，玉藻公園西門料金所整備工事	2003.8.26～2003.9.4	10 ㎡	公園整備	市教委
30	外堀，西内町，共同住宅建設	2003.10.8～2003.10.9	30 ㎡	共同住宅建設	市教委
31	丸の内，共同住宅	2003.11.12～2003.11.19	50 ㎡	共同住宅建設	市教委
32	東町奉行所跡	2003.12.8～2004.3.15	511 ㎡	共同住宅建設	市教委
33	西の丸町	2004.7.13～2004.7.19	6 ㎡	ビル建設	市教委
34	丸の内	2004.7.21	19 ㎡	ビル建設	市教委
35	丸の内	2004.11.9	48 ㎡	個人住宅建設	市教委
36	鉄門	2005.1.24～2005.8.19	62 ㎡	史跡整備	市教委
37	厩跡	2005.2.21～2005.5.12	511 ㎡	立体駐車場建設	市教委
38	外堀，兵庫町	2005.5.11～2005.5.12	320 ㎡	ビル建設	市教委
39	寿町二丁目	2006.1.12～2006.3.28	550 ㎡	ビル建設	市教委
40	天守台	2006.11.1～調査中	1,450 ㎡	史跡整備	市教委
41	江戸長屋跡	2007.6.18～2007.7.31	84 ㎡	都市計画道路高松海岸線建設	市教委



第４図　高松城跡および周辺部発掘調査箇所位置図

第３章 調査の目的及び方法

第１節　調査の目的

史跡高松城跡内に現存する石垣の分布，保存状況，積み方，補修箇所及び崩落等危険箇所等を調査することにより，石垣の現状を把握し，今後の石垣保存整備に向けての基礎的判断の拠りどころとする。また，城内の石垣構築技法の特徴やその変遷についても検討することを目的とする。

第２節　調査の方法

調査対象は史跡指定地内の現存石垣とし，庭園等の縁石・列石，廃城以降の堀埋め立てに伴う堀石垣は含めていない。なお，発掘調査等で明らかになった石垣については追加対象とした。

地　区	石垣番号	石垣数
本　　丸	1006～1049	49
二 ノ 丸	2001～2040	40
三 ノ 丸	3001～3103	103
北 ノ 丸	4001～4043	43
桜ノ馬場	5001～5061	61
そ の 他	6001～6011	11
計		307

調査では，まず地区区分と石垣番号を付す作業を行った。地区区分については，現在史跡に指定されている地域を本丸，二ノ丸，三ノ丸，北ノ丸，桜ノ馬場，その他地区（主に東ノ丸）に区分した。石垣番号については，石垣の折れから折れを一面として捉え，石段については全体で１面とし，踏み面と側面には区分せず番号を付した。なお，三ノ丸において現状で99面の石垣が所在しており，今後の発掘調査において埋没石垣の増加が予想されることから，４桁の石垣番号を付すこととした。本丸は1001から，二ノ丸は2001から，三ノ丸は3001から，北ノ丸は4001から，桜ノ馬場は5001から，その他地区は6001から番号を付した。石垣総数は平成19年11月30日時点で307面である。

調査は，現地調査と資料調査からなる。現地では，石垣一面ごとの規模や勾配を実測するとともに，目視により石材や石積み技法，各種痕跡，石垣の破損状況の観察も行った。また，デジタルカメラにより石垣各面の全景及び石垣の特徴的箇所や変異部の撮影を行った。一方，資料調査では文献や絵図から石垣の築造時期や改修時期，上部構造物の推定等を行った。これらの調査成果から，各面の石垣調査票を作成した。各石垣の調査票の項目は以下のとおりである。

位置については，地区，部位，方位を把握した。

上部構造物については，江戸時代において上部に所在した建造物の形態や名称を絵図や文献史料から読み取った。

石垣様式については，石材加工を野面，割石，切石に分類し，石積み工法を布積み，乱積み，谷積みに分類し，使用石材についても記録した。隅角部については，出隅・入隅の区別，算木積みの有無，石材の加工状況を記録した。また，転用石や刻印の有無について記載した。

破損状況については，欠損，ズレ，ハラミ，ワレ，剥離，陥没，崩落，間詰め石のヌケ，焼損，改変といった破損の種類について調査を行った。また，その破損をもたらしたと考えられる主な破損要因について構造的な要因（s），樹木による影響（t），水位変動の影響（w），その他の要因（n），その他の人工的改変（r）の５つに分類し，破損位置についても上部（1），中部（2），下部（3），隅角部（4），及び石垣面全体（5）の５分類としてアルファベットと数字により表記した。また，破損状況の写真を掲載した。

石垣の危険度については，石垣自体が崩落する危険性と，石垣の利用上の危険性の２つの危険性から構成するものとする。石垣の危険性については，石垣がズレ，ヌケ，ワレ，ハラミ等の変形により崩落しそうな状態の程度を目視により判断するものであり，危険性，変形の程度や組み合わせなどの石垣の状態に応じて，表８のようにa1～a3の３段階に区分した。一方，石垣の崩落等によって、予想される人災や施設の損傷の程度を利用状態によって想定し、危険性を利用度によって表９のようにb1～b3の３段階に区分した。危険度の区分は，a1～a3とb1～b3の組み合わせにより表10のようにＡ～Ｄの４段階に区分した。なお，危険度Ｂについては，B1～B3の３段階に細分した。

石垣規模については，天端長，基底部長，左右端の高さ，中央の高さ，左右端及び左右角の勾配角度，中央の勾配角度について計測した。なお，計測は現状で地表面上に現れている部分のみを対象とした。

築造時期や改修時期については，絵図や文献史料から判断したが，改修については絵図や文献において記載が少なく，石垣の目地から改修を推定し，その有無を確認した。

基底部の状況については，発掘調査等により基底部の状況が判明している部分について胴木等の有無や，

根石の状況を記した。

過去に発掘調査や石垣修理等が行われた場合は，その報告書を記載した。また，当該石垣のことを記した文献や石垣の変遷がわかる絵図や写真等がある場合は，その名称を記載した。

調査成果は調査票のとおりである。

表８　石垣崩落の危険性分類表

a1	ズレやヌケ，ワレ，ハラミ等の単独または複数の要素が組み合わさって変形が著しく，石垣の崩落に大きな影響を及ぼすとみられる場合
a2	現状ではズレやヌケ，ワレ，ハラミ等の変形量がそれほど大きくないが，樹木（樹木の生長による樹根の石垣への影響，風圧等）や地盤状況（支持基盤の沈下，洗掘等），水位の変動による築石の移動等によっては将来的に石垣の崩落が危惧される場合
a3	ズレやヌケ，ワレ，ハラミ等の変形量がほとんどない場合

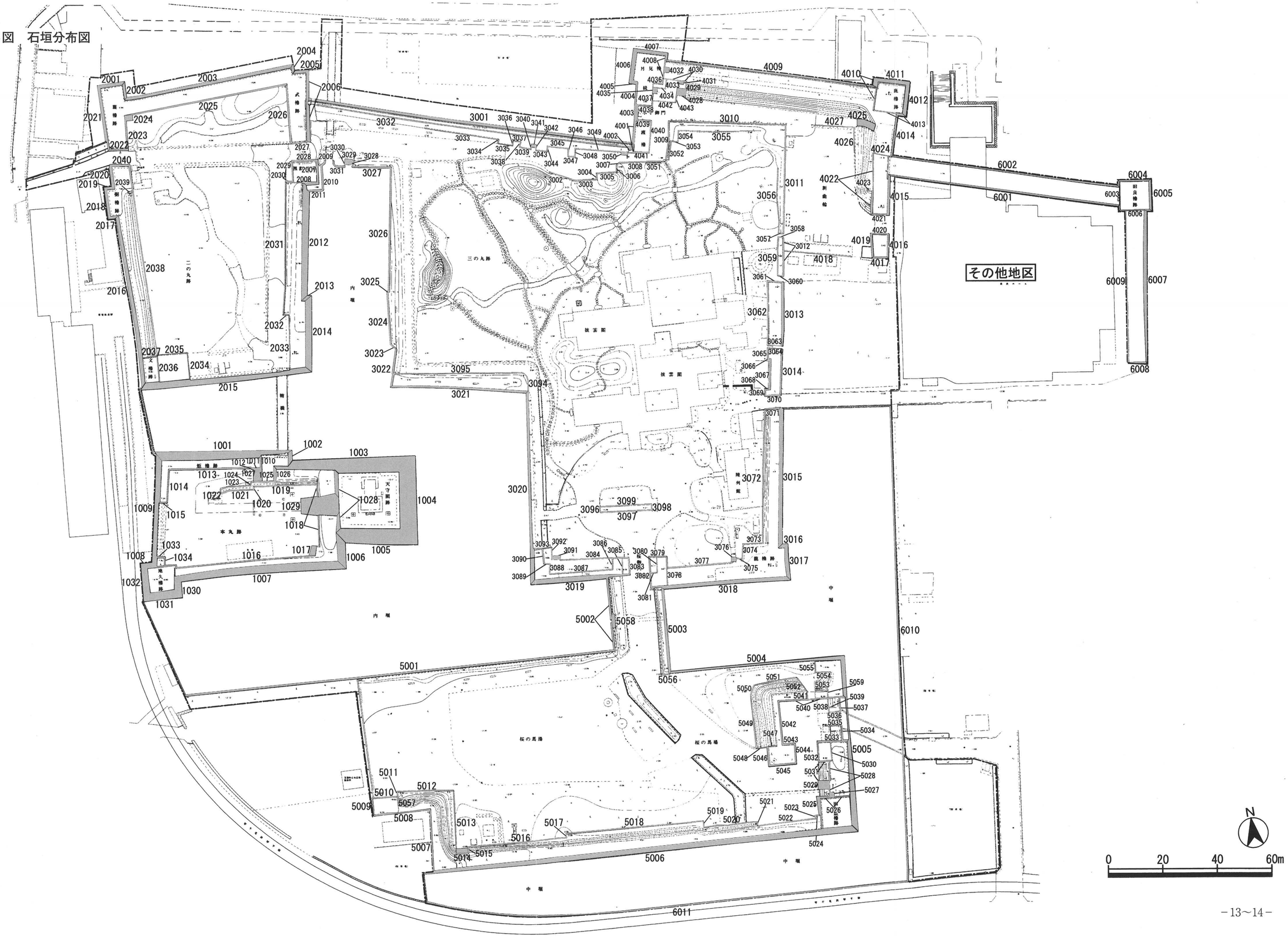
表９　石垣利用上の危険性分類表

b1	現在あるいは将来，石垣の崩落による直接的な施設の損傷や人災の発生，景観上の阻害が甚大であると考えられる場合
b2	現在あるいは将来，石垣の崩落による施設の損傷や人災の発生，景観の阻害が発生すると考えられる場合
b3	現在及び将来にわたって，石垣の崩落によって施設の損傷や人災，景観阻害がほとんどないと考えられる場合

表10　石垣危険度分類表

<table>
<tr><th></th><th>a 1</th><th>a 2</th><th>a 3</th></tr>
<tr><td>b1</td><td>危険度 A
現状で崩落の危険性があり，利用上の危険性も高い場合</td><td>危険度 B2
将来的に崩落が危惧され，利用上の危険性が高い場合</td><td rowspan="3">危険度 D
利用状態にかかわらず崩落の危険性が低い場合</td></tr>
<tr><td>b2</td><td>危険度 B1
現状で崩落の危険性があるが，利用上の危険性は低い場合</td><td>危険度 B3
将来的に崩落が危惧されるが，利用上の危険性は低い場合</td></tr>
<tr><td>b3</td><td colspan="2">危険度 C
崩落の危険性や危惧があるものの，
利用上の危険性がほとんどない場合</td></tr>
</table>

第5図　石垣分布図



第4章　考　　察

第1節　文献史料・絵図等から見る石垣改修

高松城は『讃羽綴遺禄』等によると，天正16年(1588)に生駒親正によって築城が開始されており，天正期に高松城の大部分が築城されたことは明らかである。寛永4年（1627）の『讃岐伊豫阿波土佐探索書』には城郭の破損状況や修復が行われていない様子が記載されている。『生駒家文書』によると寛永13年（1636）に石垣や船入を元のように修築することが許可されている他は改修の記録は無いことから，生駒期を通じて大幅な改変はなされていないことが予想される。

寛永19年（1642）に入部した松平頼重は，『英公日歴』によると，寛永21年（1644）から高松城の修築に取りかかっている。なお，承応元年（1652）になっても未着手部分があることから広範囲の修理が予想される。『小神野夜話』等の記録によると，正保3年（1646）には二ノ丸と三ノ丸（桜ノ馬場＋西ノ丸と三ノ丸に該当すると考えられる）の石垣修築が許可されており，翌正保4年（1647）には多聞・天守・櫓の修復を開始したとされる。その後も度重なる修復の許可があり，寛文10（1670）には天守が完成している。以上から，高松城の縄張りは基本的には生駒氏の築城期のものを引き継いでいるものの，現存する石垣はその大半が松平初期に新たに積み直されたものと推定される。

一方，天守完成の翌年の寛文11年（1671）から新たに城の修築を行なっているが，延宝5年（1677）に艮櫓の完成に至るまで北ノ丸・東ノ丸の新郭造築を行なっており，これに伴い大手を移動させるなど大規模な改変が行なわれてことがうかがえる。その後の城の修築についてはわずかであり，新郭造築期から幕末までは大きな変化はないと考えられる。

絵図からはより細部の変遷がうかがえる。生駒期の『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（推定1638～1639年）と松平初期の『高松城下図屏風』（推定1640年代）を比べると，西ノ丸中央に入口を設けた程度で，縄張はほぼ同じである。細部を見ると，『高松城下図屏風』では二ノ丸では弼櫓が新たに見えることから，松平初期に弼櫓が付け加えられた可能性が考えられる。なお，『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では本丸と天守台の北面が一連の石垣として描かれているが，『高松城下図屏風』では折れを設けて別々の石垣として表現されている。また桜御門南側の土橋の幅が北側を広くし，大手付近に折れを設けるといった，新しい要素が見受けられるが，弼櫓も含めて，『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では細かい描写を省略した可能性も考えられる。

また，時期不明の絵図ではあるが，『旧高松御城全図』と『高松城下図屏風』を比較してみると，東ノ丸・北ノ丸が完成しており，新郭造築期以降の絵図であることがうかがえる。二ノ丸北東隅を入隅にし，三ノ丸西側に折れを設けるといった文献に記載の無い改変が読み取れる。

さらに，『旧高松御城全図』と現在の状況を比較してみると，本丸入口にあたる中櫓の南半がなくなっており，南向きの入口を西向きに変えられている。また，本丸には多聞櫓が巡っていたが，櫓が建つほどの広さはなくなっており，内石垣を積み直している可能性が考えられる。二ノ丸では文櫓東側に新たな石垣が築造され，三ノ丸では鉄門及び黒櫓西側に桝形状の施設がなくなり水門が設置されている。さらに，三ノ丸東側の中堀の北半が埋め立てられ，三ノ丸東辺の4箇所が開口されている。その他，『旧高松御城全図』に多数描かれた雁木がほとんどなくなっている点も注目できる。これら『旧高松御城全図』以後の改変部は石垣の積み方が谷積みとなっている部分が多く，明治期以降に積み直しが行われたことが予想できる。

その他の石垣変遷がわかる史料としては，古写真がある。明治15年撮影の天守を撮影した写真には三ノ丸の南東隅が写っており，現状の石垣と異なることから，明治15年以降に積み直しがあったことがうかがえる。また，三ノ丸や北ノ丸を海側から写した写真も現存しており，これらの石垣が明治以降にほとんど改変されていないこともうかがえる。

表 11　高松城改修履歴一覧

西暦	和暦	月日	主な改修履歴
1588	天正 16		生駒親正，香東郡野原庄の海浜で高松城築城に着手する(讃羽綴遺録)
1627	寛永 4	8/19 ～ 28	幕府隠密が讃岐を探索し高松城の様子について報告する(讃岐伊豫阿波土佐探索書) 「城まわりつくろい，少しもこれ無くと見え申し候，はしはしくずれ候へ共，少しもいろい申すとハ見へ申さず候」
1636	寛永 13	5/28	高松城石垣の修築を幕府より許可される(生駒家宝簡集)
1644	寛永 21	6/23	高松城の普請が許される（英公日歴 四）
1644	正保 1		高松城修復に着手し，二ノ丸を整備し藩主居館を建てる(小神野夜話)
1646	正保 3	6/23	二ノ丸・三ノ丸の石垣修築を許される(英公実録)
1647	正保 4		多門・天守・矢倉の修復を開始(小神野夜話)
1649	慶安 2	12/-	城中の倉庫・石垣が完成する(英公実録)
1651	慶安 4	12/11	高松城の修築を許される(英公実録)
1652	承応 1	9/17	10 日の風雨により城の乾から艮まで所々石垣・櫓台破損を届け，修築が許される。寛永 21 年に許可された普請でまだ取り掛かっていない部分がある。(英公日歴 四)
1662	寛文 2	4/12	高松城石垣の修繕を許される(英公実録)
		8/3	落雷で本丸北西隅の矢倉焼失，多門 56 間類焼，黒金門東北隅の矢倉のそばで鎮火する(英公外記)
		10/17	落雷で焼失した本丸多門櫓の修繕を許される(英公実録)
1664	寛文 4	10/25	高松城の城塁の修復を許される(英公実録)
1667	寛文 7	閏 2/13	高松城の城塁の修築を許される(英公実録)
1669	寛文 9	5/10	天守の上棟式が行なわれる(小神野夜話)
1670	寛文 10	8/6	天守完成(小神野夜話)
1671	寛文 11	8/8	壕浚えが許される(英公実録)
		9/-	高松城の普請開始。翌年 5 月完成（英公外記）
		12/11	高松城の修築を許される(英公実録)
1672	寛文 12	2/9	高松城の修築を許される(英公実録)
		閏 6/18	高松城の修築を許される(英公実録)
1676	延宝 4	2/22	高松城北ノ丸矢倉(月見櫓)の上棟をする(小神野夜話)
1677	延宝 5	5/6	高松城艮矢倉が完成し，白鳥宮猪熊千倉落成の祓いを行う(小神野夜話)
1707	宝永 4	10/4	昼ごろ，大地震が起り，12 月まで続く(恵公外記)＝宝永南海地震 「天守屋根瓦落壁損，多門 2 ヶ所転懸，其外多門少々ひツミ屋根瓦落壁大破，城内石垣并惣塀所々崩，城内潰家 19 軒，二三之丸惣塀所々崩，城内櫓 1 ヶ所崩」
		11/晦	石垣の修築許される(恵公外記)
1721	享保 6	11/12	三ノ丸の石壁の修築許される(恵公実録)
1729	享保 14	6/21	乾櫓に落雷(恵公外記)
1743	寛保 3	9/26	外壕を浚える(穆公外記)
1823	文政 6	1/-	東ノ丸東面の石垣長さ 20 間，高さ 1 間半を修築(讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚)
1854	安政 1	11/4 ～ 5	大地震起こり，天守の屋根瓦・石垣崩れる(靖公実録)＝安政南海地震 「天守櫓屋根瓦落壁損，本丸之内一重櫓 1 ヶ所転懸，多門 1 ヶ所転懸，其外余程少々ひツミ屋根壁大破，三之丸大西南角櫓下石垣崩，城内并南大手石垣懸塀とも所々崩，城内潰家 12 軒此外二三之丸建家大破」

＊英公実録・英公外記については『香川県史 3』より抜粋

文献史料

「讃羽綴遺集　上」（矢島町教育委員会蔵）

天正十六年

同十六年野原乃庄尓新城を築く高松と名く或説
ニ細川越中守忠興又黒田如水
縄張とも云いつれ可未詳也

（※東大史料編纂所蔵は「天保四年二月写」）

「讃岐伊豫土佐阿波探索書」（東大史料編纂所蔵　影写本）

寛永四年八月

高松之城八月廿三日より同廿七日迄
（高松城・城下の略図あり、省略）
一本丸南ノ方百五十足、間ニ〆四十三間、石垣高さ天守
ノ台七間計、残る分ハ五間程
東の方二百足、間ニ〆五十七間、内本丸廿四五間、二ノ丸と間の堀七八間と見へ申
候、二ノ丸廿五間計、
此丸居城と見え申候
堀のは〻西之方ハ卅間、南ハ廿間、南ノ方も天守之と
おりハ卅間、北ノ方ハ廿間程
四方多門、二重ノ矢倉、西南の角ニ壱つ、北西之角ニ
壱つ、北東ノ角ニ壱つ、以上門矢倉共ニ四つ
二ノ丸ハ皆くい、北海の方両角ニ矢倉弐つ有、海ノ方
ハ見不被申候
三ノ丸西之方三百廿五足、間九十三間、町ニ〆壱町四
反、内西之丸の分卅間程くい有、北の角屋敷、南の角
ニ矢倉弐つ有、残る分くいなし
石垣高さ五間計、堀のは〻十三間、此方の石垣六七間
之間くずれ申候
南ノ方六百廿足、間ニ〆百七十七間、町ニ〆三町三三
間たらず
石垣右同前、堀も同前、此方ニ大手門矢倉有、橋なり
門より東へくい御座候へ共、土おち下地はかりなり、以
上ニ此口壱つなり、海手へ口壱つ有
東ノ方西ノ間同し、対面所の北ニ門有、間ニ堀有、門
より内ノ丸、東南ノ角ニ二重の矢倉有、付て多門卅間計
有、海ノ方ニも矢倉有、残る分ハくいなり、皆くすれ
かゝり申候、石垣堀右同前

一侍町之とかわ、西之方六百八十足、間二〆百九十四
間、町三町十四間、土手二間計、堀の口十三間、此方
二口かぶき門、土はしなり
南ノ方千弐百足、間二〆三百四十三間、町五町四十三
間、土手堀右同前、此方二口門なし、橋あり
東の方西之間同前、町家のうら石垣高さ二間計、堀右
同前、此方二口門なし、土はしなり

（※『香川県史　近世史料Ⅰ』より抜粋）

「生駒家文書」（生駒道敬氏蔵）

寛永十三年五月廿八日

（折紙）
以上

高松之城石垣
并外郭崩候所
築直候事、船入
両所うまり候付、被
遣候事絵図之
通、得其意候、如
元普請可被申付候、
恐々謹言
寛永十三子　　酒井讃岐守
五月廿八日　忠勝（花押）
堀田加賀守
正成（花押）
阿部豊後守
忠秋（花押）
松平伊豆守
信綱（花押）
土井大炊頭
利勝（花押）
生駒壱岐守殿

「生駒家宝簡集　乾」（東大史料編纂所蔵）

寛永十三年五月廿八日

高松之城石垣并外郭崩候
所、築直候事、船入両所う

まり候付、被塹候事絵図之
通、得其意候、如元普請可被
申付候、恐々謹言

酒井讃岐守　忠勝　書判
堀田加賀守　正成　書判
阿部豊後守　忠秋　書判
松平伊豆守　信綱　書判
土井大炊頭　利勝　書判

寛永十三子
五月廿八日

生駒壱岐守殿

「英公日暦　四」（鎌田共済会郷土博物館蔵）

承応元年

一　九月十七日、高松御城御破損普請之義ニ付、松平伊豆守へ彦坂識部被召寄被仰渡候、
其上御奉書到来
高松城従乾艮迄之間、去十日風雨之節所々石垣櫓台破損ニ付而、修覆有之
度儀も、絵図之通得其意候ハ、如元可有普請候、猶又雖戴寛永廿一年六月廿三日
之奉書ハいつれも可被致普請之旨付而、未被取掛候所有之由承り届候、是又被守
最前奉書之趣普請可被申付候、恐々謹言
右之通之御奉書到来

「元文頃以降　高松藩中出来事届」（鎌田共済会郷土博物館蔵）

寛文二年

一御本丸戌亥ノ角之御矢倉へ雷落鉄御門之際迄御長屋
在候焼失いたし武具弥焼失候寛文二八月三日

「小神野夜話　巻一」（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵『松浦文庫』）

延宝期

一、御城一件、御天守三重にて御座候処、崩取候て、古材木に安原山の松を伐、表向三重腰を取、
内五重に御建被遊候、大工頭喜田彦兵衛被仰付、播州姫路之天守を写罷越、夫より豊前の小倉
の天守を、写取帰り申候、姫路は中々大そふなる事故、小倉之形を以、御天守御出来に御座候、
則喜田彦兵衛建申候、上の重に、諸神諸菩薩勧請有、三千体の厨子、四神之旗被仰付候、正五

九月三度宛大般若執行被仰付候、白峯寺五智院代る代る相勤申候、猪熊千倉神拝に罷出候、御天守下の重大広間にて大般若執行有之、御留主頭・奉行・横目・寺社奉行・月番年寄中罷出、買物役之者罷出候て、一切御台所之物を不遣、御買上に成、御料理共被下候、其後は御天守にて神拝計に相成、大般若は二の丸上段にて執行致候様被仰付、当時は二の丸にて執行有之候、此人割別書、大般若は水戸家御仕来に付、此方様も被仰付事に候、

一、御本丸は古来之通り相更き無之候、西の丸さかいの御多門矢倉戸口を御付られ、刎橋口と申候、

一、二の丸先代は中の門に橋有て、太鼓矢倉中門東く少寄て有之、東の角は折にて有之、角に先代之屋形有之、御玄関西向に成、桜御門は北面に成、桜の馬場西南の角に家老之小屋四軒有之候所、東御門新に明き中の御門橋を引、中の矢倉、東の矢倉、東の角に今の太鼓の櫓に引、家老之小家は武具蔵になり、屋形の跡は今腰掛建申候、西御門は北の角櫓之下に有之候処、只今の所へ引申候、

一、三の丸は平地にて、桜御門は北表故、御門前に北へより中堀有之、海手へ出る門有之、右海門之外、駒寄片浜にて、先代船召場にて、今の作事丸・米倉丸共に片浜にて、東勝手の者ともは、桜御門南向に出入致候、西勝手の者は、南門より出入致候処、二の丸へ御屋形引、海手へ出候門は、只今の中御門に相成、北新曲輪、今之水御門、月見櫓・鹿乃矢倉・黒門・多門作事・丸魚の棚の入川、北浜等、新規に被仰付候、西御門外に家老屋敷二軒有之候処、引候て、壱軒之跡は下場北御かこひに成申候、一軒の跡は、十本松有之候場所に相成申候、外堀之際にも内馬場之通並松有之候処、不残御伐らせ被遊候、

一、御入部三年目に御普請初り、先二の丸より斧初め、次に御玄関落間一番に建申候、惣奉行朝比奈彦三郎相務申候、

一、御多門・御天守・御矢倉御普請は、御入部六年目に斧初め有、惣奉行朝比奈彦三郎にて御座候、御普請相済候て、勘定可仕と彦三郎申上候処、算用無用被仰出、御銀積り無之候、御普請之帳面と申物無御座候、御天守其外櫓等之足木沢山に有之候処、彦三郎申上、不残致拝領、売払過分之代銀有之候処、御普請にかゝり候小役人並に人足等に割被下候由、小役人も彦三郎へ御礼申候由、　御上にも御機嫌に被為有之由、宝暦十二年午迄、二の丸は百廿七年、御天守は百弐拾四年に相成候由、栗田寛規物語候、栗田氏にも親父可休入道に古星野宮内左衛門直物語を次之間にて承候由、物語にて候、一説、右御普請相済、御勘定被仰付候処、彦三郎申上候は、此度御普請御物入如何程と申事相知、後世相聞へても不宜奉存候間、御勘定は御無用にと可然奉存候旨、申上候は、　御上にも尤に被思召、御勘定御無用被仰出候由古老物語に候、右御天守雛形は小倉之天守之写

一、御天守三重にて有之候処、喜田彦兵衛雛形仕入、御覧思召に相叶ひ、其通と被仰付候、

一、あり腰壱重取、五重作り替申候、雛形木図、西の御丸蔵之内に捨有之、次第に朽捨申候由、此説疑敷御座候得共記置申候、西の御丸家之内に立申候を、栗田寛規壮年之時、御番にて登城致し候節、度々見申候由、物かたりにて御座候、当午年右寛規八十四才に成申候、

一、御台所大黒柱朽損し候に付、明和子正月十一日に斧初建修覆出来、九間梁弐十三間本の如へ御出来に御座候、奉行中条伝八、作事奉行七条金太夫にて御座候、

一、御天守鯱は、英公被仰付焼ものにて有之候を、数十年後、当殿様宝暦七丑年八月唐金之鋳物相成、鋳掛師新八と申者被仰付候、作事奉行は瀬尾孫太夫掛りにて御座候、

一、米倉は今江川舎人、西尾縫殿屋敷に御座候之処、今之米倉引候て、跡は大屋鋪と成、御連枝一学様へ被下、其後享保三戌年出火之節、一学殿屋鋪焼失に付、一学殿御差上、跡二屋敷に成、白井惣兵衛、高畑要人被下候て、宝暦十二年の比は江川、西尾に被下候、

一、船蔵大久保主計屋敷に有之候処、今之御船蔵引申候、今之御船蔵之場所には真行寺・無量寿院有之候処、無量寿院は先代今之処へ引候跡開地と相成居申候、真行寺は御舟蔵西之角に有之候処、今之所へ引、跡御舟蔵に相成、只今之通りに御座候、船倉之跡屋敷に被仰付、八左衛門奉行にて大屋鋪と成、大久保主計に被下候、大概右之趣、役所之留并に林孫左衛門物語取合実説

記置申候、

（※『新編香川叢書　史料編（一）』より抜粋）

「小神野葦帖　仁」（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵『松浦文庫』）

延宝期

一御天守先代三重にて御座候所崩取候而古材木ニ安
原山の松を伐表向三重有腰を取内五重ニ御建被遊候
大工頭喜田彦兵衛被仰付播州姫路の城天守を写に
参夫より豊前小倉の城を写罷帰り候姫路ハ中々
大荘成事故小倉の形を以て当御天守彦兵衛仕候間
間数等ハ別書に委敷有上の重ニ諸神を三千体神
金の厨子四神旗等被仰付候正五九月三度ツゝ大般若
執行被仰付候白峯寺五智院代ル代ル相勤申候猪熊千倉
神拝ニ罷出候御天守下の重大広間にて大般若執行
有之奉行御留守居番頭横目寺社奉行月番年寄
罷出買物使之者罷出候而一切御台所之物を不遣御買上ニ
成御料理とも被下候其後御天守にて神拝計大般
若ハ二丸上段にて仕候様ニと被仰付当時ハ二の丸にて
御坐候此入割別書大般若分ニ委敷記置尤此大般
若御執行と申事ハ水戸家御仕来ニ付此方様ニも被
仰付候
一御本丸ハ古来之通相更義無之候西ノ丸堺の御多門に
戸倉口ヲ御付被遊刎橋口と申候
一二丸先代ハ中の門に橋有之太鼓矢倉中門の東少寄て
有之東の角ハ折にて有之角ニ先代の屋形有之玄関は
西向になり桜御門ハ北表ニ成桜の馬場西南の角に家
老の小屋四軒有之候所東御門新ニ明中之御門の橋ヲ
引中の矢倉を東の角今の太鼓の矢倉ニ引家老の小
屋ハ武具蔵ニなる屋形の跡ハ今腰掛立申と西御門ハ
北の角矢倉の下ニ有之候所只今の所江引申候
一三の丸ハ平地にて桜御門ハ北表故御門跡前ニ北へより
中堤有之候海手江出る門有之右海門の外駒寄片
浜にて先代船差場にて今の作事米蔵ともに片浜にて
東勝手の者ともハ桜の御門江南向ニ出入仕候西勝手之者
ハ只今の中御門ニ相成北曲輪今の水御門月見并
鹿の矢倉黒門多門作事の丸魚の棚の入川北浜等
新規ニ被仰付候西御門外ニ家老屋しき二軒有之所
引候而一軒の跡ハ今の下馬北御囲ニ成候壱軒の跡ハ十
本松有之候場ニ相成候外堀の際にも内馬場之通
並松有之候所不残御切被遊候
一延宝五巳年五月六日丑寅角矢倉初神拝

猪熊千倉勤申候
一同四辰二月廿二日北の丸矢倉棟上
一元禄十三辰六月十八日二ノ丸御新宿出来
一頼常公御代享保四卯九月九日洪水シャチホコ
西手吹折
一御入部三年目慶安三寅年御普請初先二ノ丸より
斧初御玄間鶴の間一番ニ建惣奉行朝比奈彦三郎
水戸より下館二百五十石小姓高松三百石より四百石迄
年寄役相勤候御天守御多門矢倉
御普請ハ御入部六年目ニ斧初有惣奉行同人なり
御普請済候而勘定可仕上彦三郎申上候所算用なしと
被仰付御銀積なし夫故　御城普請と申帳面
なし御天守其外矢倉多門の足木沢山ニ有之候処
彦三郎申上不残致拝領売払過分之代銀有之所
御普請ニ掛り候小役人人足等ニ代割被下候由上ニも御機
嫌之由宝暦十二午年迄二ノ丸百廿七年御天守ハ百
廿四年ニ相成候由
一御天守三ノ重にて有之候所喜田彦兵衛拵ニ而入御覧
思召ニ叶其通ニ被仰付候
一阿り腰一重取五重ニ作り更申候右雛形木図二ノ丸の御
薮の内ニ捨置之次第次第にくさり倒レ捨り申候近頃
惜敷事ニ候御台所大黒柱朽損ニ付明和五子正月
十一日斧初にて建修復出来九間梁十三間也本の如く出来
奉行中中条伝八作事奉行七条金大夫也
一御天守鰤宝暦七丑年七月廿六日洪水有同年九月
五日ニ又洪水阿り此時鰤吹落シ木ヲくミ手にて包ミし物
也是をくミ手鋳物ニなり則金師新八と申者鋳立上
多ク作事奉行瀬尾孫大夫なり
一両御書院鬼板も桧にて有之を此午年瓦の焼ものに
なる笠井次郎右衛門といふ奉行の拭にて作事なり
（　中　略　）
棟上寛文九酉年五月十日
一天守五重間数高拾七間半
内石垣四間
天守台石垣上東西拾二間南北拾間半
シャチホコ高六尺五寸貞享四卯九月供（洪）水ニシテ
丸三尺三寸　シャチホコ西手吹折
諸神之間　東西七間　南北六間　此畳八拾帖
二之間　同　五間　同　六間　此畳六拾帖
三之間　同　九間　同　八間　此畳百四拾四帖
四之間　同拾二間半　同拾一間半　此畳百八拾七帖
同　下　同　六間　同　五間　此畳六拾帖
桜御門
一麻幕地白桜之紋紺ニテ付之
右ハ御在国年頭五節句并御使者之節打也

一同地紺桜ノ紋処白ニテ付
右ハ朔日十五日廿八日御帰城年打也
一平日ハ木綿地紺蛇ノ目紋処付幕打可申候
明り番所三間
一麻幕地白梶ノ葉紋処紺也
右御規式立明ノ間番人指置候節打也
御城東御門
一麻幕地白角違ノ紋紺ニテ付
右御在国年頭五節句并御使者之節打也
一同　紋地紺
右御在国年頭五節句并御使者之節打也
一平日木綿地紺蛇ノ目紋付打也
御城西御門
一幕麻にて地白三ツ柏紋にて付
右ハ御在国年頭五節句并御使者之節打也
一同地紺三ツ柏紋付
右御在国年頭五節句并御使者之節打也
一平日木綿紺蛇ノ目紋付打可申候
一麻幕紺地常ハ番所ニ預置御留守計朔日十五日ハ打
可申候
右之書付享保二酉五月廿九日岡田平馬相渡申候ニ付
則典膳殿江申達中条七郎兵衛方より夫々江申渡御
道具奉行江も申通候
一正保四亥七月晦日丸亀町出口橋掛ル
宝永五九月九日常磐橋と改
一本丸廊下橋長拾六間尺　高漸迄六尺三寸
作事ノ内南北三十間東西四拾間
米蔵ノ内南北三十二間東西四拾八間
一御堀幅太鼓御橋通東西拾一間古太鼓通拾壱間
西新御門通同断右御橋与里北にてハ弐拾壱間
（※図あり）

米
作

西　二百三十九間　此角ヨリ東角迄四百三十二間　東
一英公御代西下馬裏ニ諸役所三筋計有米蔵ハ今の西
丸に阿里
一英公御代鶴屋町ニ神妙寺一向宗有表拾間弐尺
裏同断東西
一此時南御門往来有只今の東御門なし大工
小屋なり申候

「消暑漫筆　壹」（鎌田共済会郷土博物館蔵）

延宝期

五　一御天守先代ハ三重にて候所表向三重内五重に御建更被遊候大工頭喜田

彦兵衛ニ被仰付播州姫路乃天守を写ニ参又豊前小倉乃天守を
写ニ罷帰申候姫路ハ大造成事故小倉之天守の形を以当御天守喜
田彦兵衛仕候上之重ニ諸神有と云々
○十竹曰御天守御普請の節ハ喜田彦兵衛いまだ大工にて在候時なる可し
大工頭になりたるハ余程後乃事也喜田ニ書ハ誤なるくし朝比奈彦三郎ハ
奉行職乃時ならん今の基和家之元親也○御天守魚虎焼物にて
阿り候議宝暦七丑の八月　思召議以て青銅に仰付られ鋳物師新八
鋳立の由けふ存せり御天守の間数之事に実に記す寺屋石垣水の
上面より七間半土台より御天守上の瓦まで十二間半御天守下の重東西
十三間弐尺南北十弐間弐尺なりと写し此ケ條御城御普請の事を
委しく記し阿れとも少々違たる事もあるまし本書を兄ハ人其心
得有へし

「随観録　一」（松平公益会蔵）

宝永四年

○宝永四年丁亥十月四日八時分高松大地震ニ付公儀へ
御差出之書付
一天守櫓屋根瓦落壁損申候
一多門二ヶ所転懸申候其外之多門少々ひツミ屋根瓦落壁大
破仕候
一城内石垣并惣塀所々崩れ申候
一城内潰家十九軒此外二三之丸惣塀大破仕候
一城内櫓一ヶ所崩れ申候
一潰家九百弐拾九軒　内四十五軒家中　六百四拾九軒町
弐百三十五軒郷中
一家中町屋建屋数百軒大破
一土蔵十八ヶ所　川口番所三ヶ所崩れ申候
一死人弐拾九人　内九人男　廿人女
一怪我人三人　内二人男　一人女
以上
（※『新収日本地震史料第3巻別巻』より抜粋）

「靖公実録」（松平公益会蔵）

安政元年

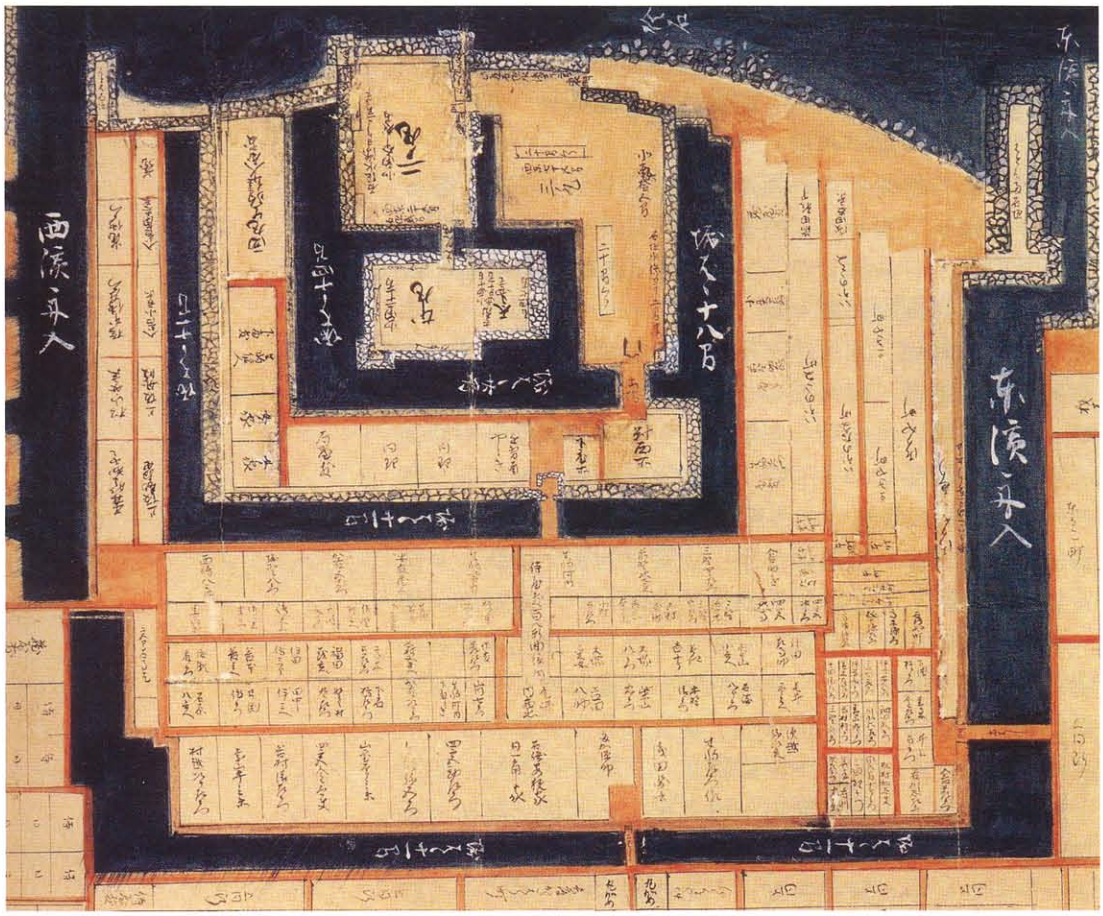
十一月四日　朝五ツ時過地震夜九ツ時過又震
両度とも覚くす庭上ニかけ出て蹲踞せし程なり
五日夕七ツ時最大震西南ニあたりて大砲を連発するか如きす
さましき声あり
此声何れ之地方ニても同し方角ニ聞ゆと云〻　此時家屋崩れ海

近き地ハ大地折て沙水涌出死人怪我人有之、市中所々出火有之候得共無程鎮火、夜九ッ時分又大震尤夜中小震度数不知、依之今夕より士民とも庭上或ハ街衢田園ニ露宿す、此月十一二日頃より追々宅ニ帰り入る

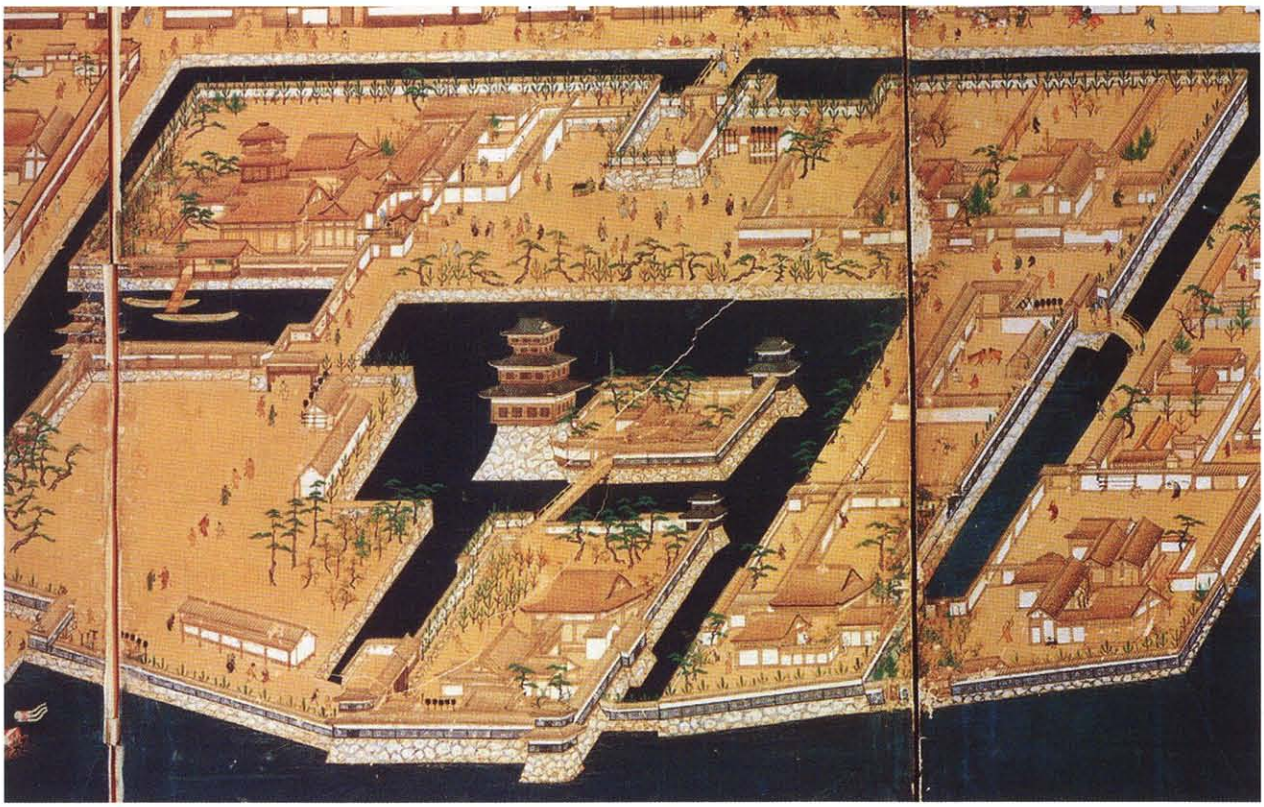
四日以後朝汐之度常ならす昼夜とも屡急ニさし引す、明年ニ至て常ニ覆す、又七日八日頃急ニ高汐来るへしと云訛言有之婦女子なと大ニ怖たり、○六日暁以後昼夜とも度々震七日朝大震、其後昼夜度々震、十六日・十七日稀なる烈風其中ニも小震数度、其後昼夜中小震、廿五日風雨、暁より大地鳴動数次雷鳴二度其後も日夜中小震、十二月十日・十四日・晦日大震、其後追々度数減したれとも翌卯年より辰年ニ至り度々震然れとも大震ハ無之辰年秋林ニ至て全く常ニ復す、○此度之地震ニ付破損所等　公儀へ御届左之通

一高松城天守櫓屋根瓦落壁損申候　一本丸之内一重櫓一ヶ所転懸申候　一多門一ヶ所転懸申候其外余程ひツミ屋根壁大破仕候　一三之丸大手西南角櫓下石垣崩申候　一城内并南大手石垣懸塀とも所々崩申候　一城内潰家十二軒此外ニ三之丸建家大破仕候　一潰家二千九百六十一軒内百六十九軒家中・千四百九十七軒町・千二百九十五軒郷中　一家中大破家二百三軒　一焼失家四軒　一潰士蔵五十五ヶ所　一大破士蔵百ヶ所一川口番所三ヶ所大破仕候　一塩溜坪五百十二崩申候　一塩浜石垣三千七百六十九間崩申候　一汐除堤七千二百二十六間大破仕候　一川除堤六千四百五十六間崩申候　一樞四百九十一ヶ所崩申候　一池堤崩七ヶ所田畑損申候　一池堤二百六十四ヶ所大破仕候　一橋八ヶ所落申候　一道橋百四十八ヶ所大破仕候　一死人五人内男三人・女二人一怪我人十九人内男九人・女十人　一怪我牛馬三匹内牛二匹・馬一匹以上○御家中居宅破損之面々并町郷中潰家之者共へ御救米銀被下猶又御家中へハ居宅修理之為別ニ御貸銀も被成下候○四日朝之地震ハ東西とも諸国大抵同様、五日夕以後之大震ハ上方筋南海道甚しく海辺所々津浪有之就中土佐・阿波の両国ハ震後大津波ニて死人無算なりしと云

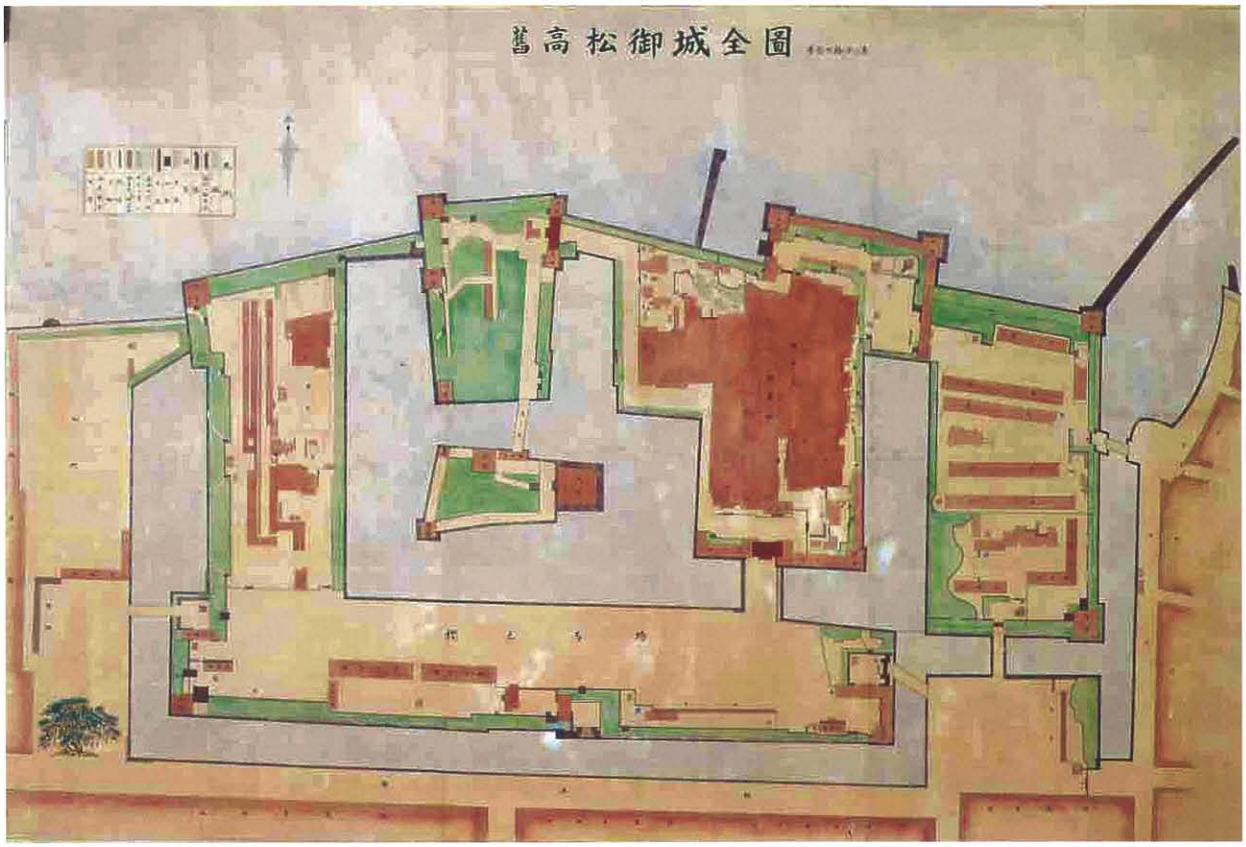
（※『新収日本地震史料第五巻別巻五－二』より抜粋）



第６図　生駒家時代讃岐高松城屋敷割図（高松市歴史資料館蔵）

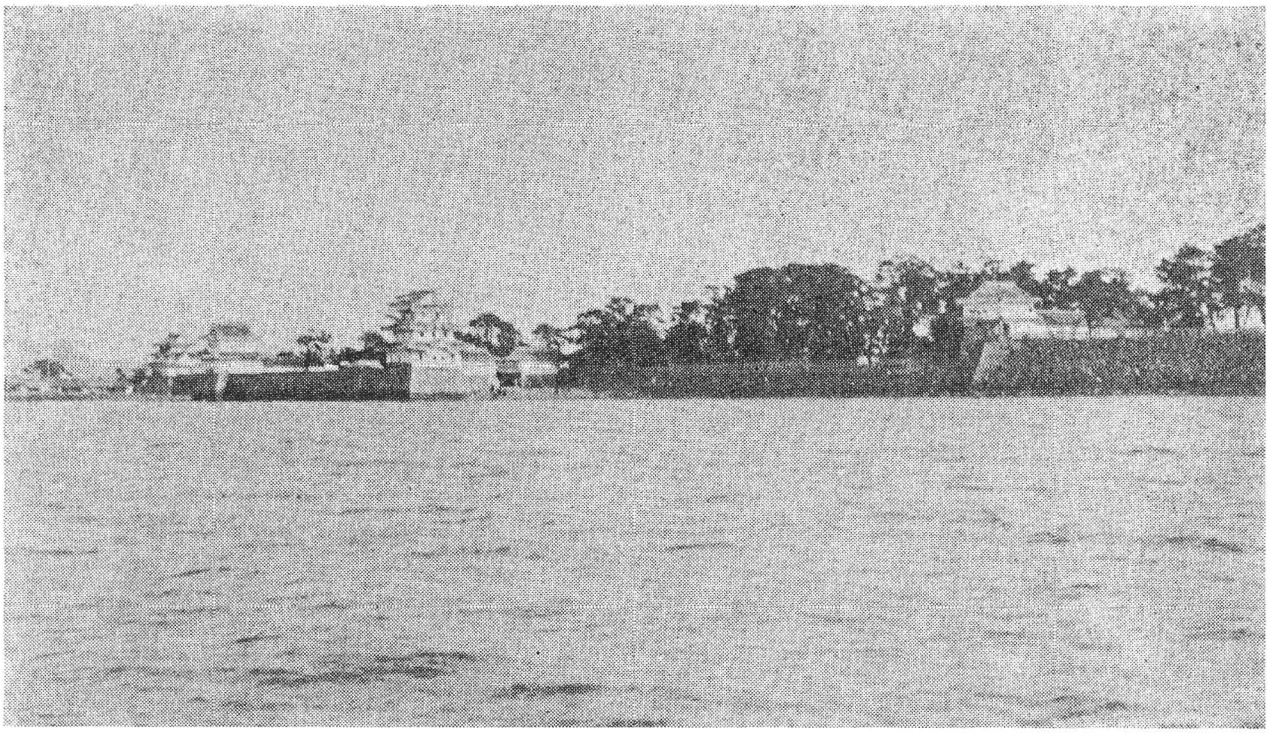


第７図　高松城下図屏風（香川県歴史博物館蔵）

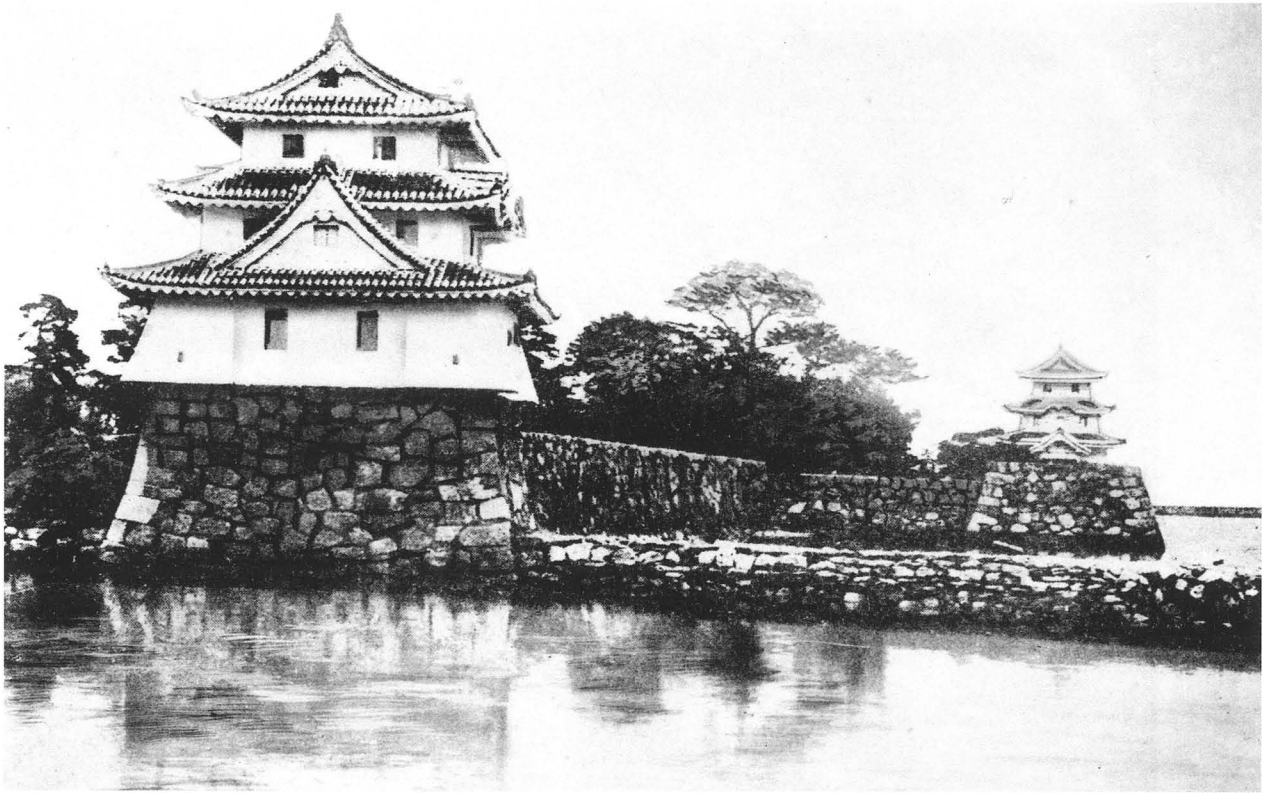


第８図　旧高松御城全図（香川県歴史博物館蔵）

第９図　明治 15 年 12 月 30 日撮影高松城天守写真（ケンブリッジ大学図書館蔵）



第10図　二ノ丸・三ノ丸・北ノ丸北面を撮影した古写真



第11図　艮櫓台・鹿櫓台を撮影した古写真

第2節　破損石垣の検討

高松城の現存石垣の中で，ハラミ，ズレ，ヌケ，ワレ等の破損が見られる石垣を抽出し，その状況について検討してみたい。なお，解体中の石垣については十分な調査を行っていないことから検討から除外した。また，発掘等で検出された石垣についても，埋没時以降の破損の進行が見られず，他の石垣と直接比較することが難しいことから除外した。また，間詰石のヌケや軽微なワレ，ヌケ等はいずれの石垣にも見られる現象であることから，石垣が安定している状態のものは含めないものとした。

破損石垣は解体中・発掘等で発見された石垣を除く石垣282面の内，89面に見られ全体の31％を占める。最も多い破損現象は，築石が前や横に移動しているズレの状態であり，66面に見られ，23％の石垣に生じている。石垣中央部や天端石などによく見られる傾向がある。次いで多い現象は，石材が破損した状態のワレが40面で14％を占め，築石の一部が前面に押し出された状態のハラミが38面で13％である。次に多い現象は，築石の石材が1石あるいは数石抜け落ちた状態のヌケであり，34面に見られ12％を占める。また，高松城は江戸期の落雷及び第2次世界大戦の戦災によって建物が焼失しており，その際に石垣面も焼損を受けている。この焼損が見られる石垣は27面（10％）である。この他，破損には至っていないが樹根の石垣面への侵入など樹木の影響を受けていると考えられるものや，目地をモルタルで詰め直したもの等，将来的に破損の可能性があるものもある。

石垣の破損程度をa1･a2･a3の3段階に区分すると，破損程度の最も大きいa1は10面で，全体の4％である。a1石垣は，本丸の天守台を構成する3面，二ノ丸の北部で旧海面外壁の石垣や堀石垣，桜ノ馬場東部の堀石垣に見られる。将来的に石垣の崩落が危惧されるa2石垣は79面で，全体の28％である。本丸の堀石垣や二ノ丸の旧海面外壁の石垣，三ノ丸の旧海面外壁の石垣や内石垣，北ノ丸の旧外面外壁の石垣，桜ノ馬場の北部の堀石垣，その他地区の堀石垣に見られる。破損程度が軽微かまたは破損の見られないa3石垣は193面で，全体の68％である。全地区に分布し，その数も多いが，比較的石垣長さや高さが小さい石垣に多い。

地区別に破損程度の出現割合を見ると，各地区とも半数以上の石垣は良好である。特にその他地区や北ノ丸では良好な石垣が80％近くになっており，これらの地区にはa1石垣は見られず，保存状態の良い石垣が多い地区である。これに対し二ノ丸や桜ノ馬場ではa1・a2石垣の割合が目立ち，特に二ノ丸はa1石垣の割合が他地区に比べ最も多く，破損石垣が比較的多い地区と言える。

次に，a1・a2に分類し，破損の状況等を見てみる。破損程度a1の石垣の破損状況は表12に示しており，ズレやワレ，ハラミが生じている石垣面が多く，ズレは70％の石垣に見られる。また，ワレ，ハラミも半数以上の石垣に見られる。間詰のヌケは80％と高い割合で見られ，構造自体に直接的な影響を及ぼさないとはいえ，破損が進んでいる状態を示していると言える。一方，石材の欠け･剥離，陥没は見られず，欠損や崩落，焼損もかなり少ない。地区別では，本丸ではハラミやワレが目立つのに対し，二ノ丸，桜ノ馬場ではズレが多く見られる。

破損程度a2の石垣では，表13に示したとおりズレが60％と最も多く見られ，次いでハラミが42％であり，ズレが他の種類の出現に比べて目立って多く生じている。また，ハラミの次にはワレが多く見られる。間詰のヌケは半数近くの石垣に見られる。これに対して，陥没や崩落，欠け・剥離はほとんど見られない。
地区別に見ると，本丸はハラミがほとんどの石垣に見られ，ズレよりも多くなっている。二ノ丸では，ハラミとズレがほぼ同様に生じており，ワレ，欠損が点在する。三ノ丸では，ズレがハラミよりもやや多く，また欠損も比較的多く見られる。北ノ丸では，ズレとワレが多く見られ，ハラミは比較的少ない。桜ノ馬場ではズレが多く見られ，次いでハラミとワレが同程度に生じている。その他地区ではハラミ，欠損が見られる。

破損状況については，欠損，ズレ，ハラミ，ワレ，剥離，陥没，崩落，間詰め石のヌケ，焼損，改変といった破損の種類について調査を行った。また，その破損をもたらしたと考えられる主な破損要因について，構造的な要因（s），樹木による影響（t），水位変動の影響（w），その他の要因（n），その他の人工的改変（r）の5つに分類し，破損位置についても上部（1），中部（2），下部（3），隅角部（4），及び石垣面全体（5）の5分類としてアルファベットと数字により表記した。これにより原因別に破損石垣の状況を見たい。

構造的な要因による破損は，使用石材が適切でない場合や，石垣を積み上げていく時の積み方の問題等によって破損が生じたと考えられるものである。基本的には積み方に不具合があり，隣接する石材との合端が合わなくなることで，変形が生じたと考えられるものである。石材がズレ，それが面的に広がったものがハラミと考えられ，部分的に脱落したものが欠損であり，さらに崩れてしまう崩壊へと進むと考えられ，ズレ，ハラミ，欠損，崩壊は，一連の石積の変形過程にあるものと考えられる。また，盛土や裏込の栗石等が適切に配されていても経年変化や雨水の浸透により栗石の目詰まりによるハラミも考えられる。また，ズレや欠損が生じたとき，集中的な荷重が石材にかかり，それが石材のワレに結びつくことが考えられる。欠損は天

端を中心とする石垣上部と石垣下部に集中的に見られる。ズレは石垣中段部と上段部に，ハラミは石垣中段部と下部に比較的多く見られる。また，ワレは中段部に多く見られるが，隅角部や上部にも見られる。隅角部のワレは，重大な破損に結びつく場合がある。また，上部や隅角部の崩壊も若干見られる。この他間詰石のヌケはほぼ全体的に見られるが，中段部がやや多い。

次に，樹木の影響による破損石垣である。高松城内には多くの植栽が見られるが，特に石垣に影響を与えるクロマツ，クスノキ，イチョウ，ハゼノキ，エンジュなどの高木が見られる。特に，多聞櫓台では天端のスペースが狭く，大木が石垣面に近いことから，直接的な影響を及ぼすことになりやすい状態にある。石垣面破損のプロセスは，樹根の伸張により石材を押し出すことや，風による揺れによって，裏込の土砂が揺さぶられ，ゆるんでくることで石材が移動することが考えられる。樹木による影響と考えられる破損は，ズレが上部から中段部にかけて，ハラミが中段部と隅角部にわたって見られる。

また，高松城の内堀の水位は潮の干満によって頻繁に変化している。しかもその流出入の速度は速く，堀に面する石垣下部ではその影響を受けて，少なからず石積の変形が生じていると考えられる石垣が存在する。水面際の間詰が粗く見えるのは，積み方よりも，こうした水位変動の影響のためと考えられる。基本的に間詰石は石垣構造の強度に直接的に影響するものではないが，間詰石のヌケにより空隙が大きくなることは，盛土が流出し，栗石の目詰まりを起こしやすくなり，石垣の破損を誘引するものと考えられる。水位変動による間詰石のヌケは当然ながら水面近くであることから，石垣下部に集中している。

その他の要因とは，戦災や火事による焼損，石垣背土の減少等である。中でも石垣上部の石材が脱落しているものが見られるが，残置していてもズレているものも多い。これらは上部土砂の流出により裏込の支えがなくなったために欠損やズレが生じたものと考えられる。焼損による石材のワレは石垣中段から下部にかけてや，隅角部に多く見られるが，ほぼ全面に見られるものもあり，一様ではない。欠け・剥離も全体的に見られる。

その他軽微な人工改変は，間詰のモルタル詰めや排水管や門扉等の設置，ブロック塀の設置，石材の焼損等である。この石材の焼損は，石材そのものの傷みは見られない軽微なものである。

表 12　破損程度 a1 の石垣の破損種類

地区	No.	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	焼損	軽微な破損		
											モルタル	排水管等	積み直し
本丸	1003			○	○				○				
	1004	○	○	○	○				○		○		
	1005	○		○	○						○		
二ノ丸	2002		○						○		○		
	2005		○		○				○				
	2006		○		○				○	○			
	2015		○	○	○				○			○	○
	2026		○	○				○		○			
桜ノ馬場	5004		○						○			○	○
	5005		○		○				○				
出現数		2	8	5	7	0	0	1	8	2	3	2	2
出現割合		20	80	50	70	0	0	10	80	20	30	20	20

表 13　破損程度 a2 の石垣の破損種類

地　区	No.	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	焼損	軽微な破損		
											モルタル	排水管等	積み直し
本丸	1001			○									
	1007			○					○				○
	1009		○	○	○				○	○			
	1016			○									○
	1018		○					○	○		○		
	1028		○	○	○				○			○	
二ノ丸	2001		○										
	2003	○	○	○					○	○	○		○
	2012			○					○		○		
	2014				○								○
	2016			○						○			
	2021		○	○		○			○	○			○
	2025	○	○	○					○				
	2031		○	○	○				○				○
	2033			○					○				○
	2034		○					○			○	○	○
	2035		○						○			○	○
	2036	○	○		○								
	2037		○						○				
三ノ丸	3001		○	○					○				○
	3005			○									○
	3013			○									○
	3014			○									○
	3015			○									○
	3018		○		○								
	3019		○	○									
	3021			○									○
	3033	○	○	○									
	3035		○										
	3037		○										
	3038	○	○										
	3039		○	○									
	3043		○		○								
	3056	○											
	3073	○	○										
	3074	○	○										○
	3076	○	○										
	3077	○		○									○
	3081								○				
	3082		○		○				○	○			
	3083				○					○			
	3085		○										

	3086	○	○						○				
	3087		○						○				
	3088				○								
	3093			○								○	
北ノ丸	4009		○						○				
	4013	○			○				○				○
	4014		○						○				○
	4015			○	○				○	○			
	4016			○	○	○			○	○			
	4019		○						○				
	4020		○							○	○		
	4021				○	○				○			
	4024		○		○								
桜ノ馬場	5001			○							○	○	○
	5002	○	○						○				
	5006				○								○
	5007		○	○	○				○		○		
	5008		○						○		○		
	5009			○			○				○		
	5010	○		○					○				
	5012		○		○				○				○
	5016			○									
	5018		○										
	5020	○	○						○				
	5022		○										○
	5049		○										
	5050	○	○										
	5051	○	○										
	5053		○						○				
	5054	○							○	○			
	5055	○		○					○				
	5056		○						○				
	5059	○	○										
その他地区	6010			○					○		○		○
	6011	○							○		○		
出現数		21	46	32	18	3	1	2	35	11	11	5	24
出現割合		27	60	42	23	3.9	1.3	2.6	45	14	14	6	31

表 14　構造的要因による破損石垣及び破損種類と破損位置

	s1	s2	s3	s4	s5
欠損	2003,2023,2025,2036,3056,4018	2004	1004,2004,3053,3074,5002	1005	—
ズレ	1009,2001,2031,2035,3043,3076,3082,4021,5007,5018,5020,5035,5045,5046,5059	1013,1014,2001,2002,2003,2006,2015,2021,2025,2031,3018,3019,3035,3074,3087,3088,4009,4014,4018,5002,5008,5018,5022,5033,5049,5050,5056,5059	1004,2004,3053,3074,5002	1062,1004,1028,2005,5004,5046	—
ハラミ	3033,5010,5016	1016,1028,2003,2012,2015,2025,2031,2033,3005,3015,3019,3021,3077,3093,4015,4016,5001,5007,5009,5016,5055,6010	1001,1003,1004,1005,1007,1009,1013,2015,2016,2021,2025,3001,3013,3014,3015,3039,3093,5016	1009,1016	—
ワレ	2036,3010,3018,3088,4002,4016,4024,5025	1014,1028,2005,2014,2015,2031,3024,3036,4006,5007,5012	1005,1010,1028,4008	1003,1004,1005,2005,3043,4006,4013,4021,5005,5006	—
間詰石のヌケ	2035,3087,4017,4019,5007,5008,5012,5019,5056	1010,1013,1018,1026,1028,2002,2003,2004,2005,2008,2012,2015,2021,2025,2029,2031,2032,2033,2035,3004,3010,3017,3081,3082,3084,3086,3089,3090,3092,3099,4003,4005,4007,4009,4010,4011,4012,4013,4014,4015,4017,4042,5002,5010,5020,5021,5032,5044,5052,5053,5054,5056,5057,6002,6003,6004,6005,6006	1026,2005,2020,3058,3075,3084,4005,4017,4041,5004,5005,5032,5057	2005,2008,3097,5004,5005	1009,2006,2017
崩落	2034	—	—	1018	—

表 15　樹木の影響による破損石垣及び破損種類と破損位置

	t1	t2	t3	t4	t5
欠損	5050	—	—	—	—
ズレ	1018,2034,2037,3037,3055,4024,5012,5050,5053	2025,2026,5050,5053	5050	—	—
ハラミ	—	2026,3013,3014	—	2033	—
間詰石のヌケ	2037	—	—	—	—
崩落	2026	2026	2026	—	—

表 16　水位変動の影響による破損石垣及び破損種類と破損位置

	w1	w2	w3	w4	w5
間詰石のヌケ	—	—	1003,1004,1007,2012,3001,6010,6011	—	—

表 17　その他の要因による破損石垣及び破損種類と破損位置

	n1	n2	n3	n4	n5
欠損	2030,3003,3011,3012,3033,3038,3044,3071,3073,3076,3077,3086,4013,5010,5020,5051,5054,5055,5059,6011	—	—	—	—
ズレ	2036,3033,3038,3039,3043,3047,3072,3073,3085,3087,4019,5051,5057,6009	—	—	—	—
ワレ	—	1009,2006,2027,4015,6001,6002,6007	2028,6001	2006	3082,3083
欠け・剥離	3009,4021	2021	2021	4016,4021	—
陥没	—	5009	—	—	—

表 18　その他軽微な人工的改変による破損石垣及び破損種類と破損位置

	r1	r2	r3	r4	r5
焼損	4020,4021,5044,6001,6002,6003	2018,2020,2024,4020,5044,6001,6002,6003,6007,6008,6009	1009,2003,5404,6001,6002,6003,6006	3004	2027,2028
モルタル詰	4020	1004,1005,1018,2024,2027,3097,4031,4032,5001,6007,6008,6010,6011	1004,1005,2012,2020,2022,2024,2027,5001,6007,6008	―	2002,2009,3030,3031,3038,3050,3063,3064,5007,5008,5009
その他	1028,2034,2035,4009,4010,4011,4012,4013,4014,5001,5004	2015,3020,3079	―	3093	3032

第３節　石垣の危険度

石垣の危険度については，第３章で示したように石垣崩落の危険性と利用上の危険性の２つの危険性から判断し，Ａ～Ｄの４段階に区分している。解体中・発掘等で発見された石垣を除く石垣 282 面のうち，崩落や利用上の危険性が高い石垣である危険度Ａの石垣は本丸天守台石垣，二ノ丸廉櫓台石垣及び鉄門石垣，桜ノ馬場北東部など 10 面見られる。今後の修理等の検討を必要とする危険度Ｂの石垣は，55 面見られ，約 20%を占める。危険度Ｂの石垣は，全地区に分布しているが，地区別では三ノ丸地区や桜ノ馬場地区で多く見られる。危険性がほとんどない危険度Ｃ･Ｄ石垣は 217 面で，全体の約 77%を占め，三ノ丸地区に多く見られる。

なお，危険度Ａ～Ｄの区分は，調査時点での石垣の破損状態と利用状態から崩落して災害を与える危険性の程度を目視により観察した結果である。この区分は，今後該当する石垣の崩落への進行のしやすさを示したものではないが，Ａ～Ｄの順に崩落の危険性が高いことを示している。このため，崩落の危険性が最も高い危険度Ａに該当する石垣は，石垣を本来の姿にとどめるために特に注意を払うべき石垣であり，計画的修理を検討する必要がある。危険度Ｂに該当する石垣は，崩落の危険度と利用上の危険度の組み合わせによって３種類に区分しており，個々の石垣の破損状況等と維持管理に対する視点から重点的監視や破損要因の軽減，除去対策を行い，場合によっては修理も視野に入れた保存対策を行う必要がある。危険度Ｃに該当する石垣は，利用上の危険性が低い石垣であり，保存にあたっては，現状の破損状態に留意しながら維持管理を行う必要がある。危険度Ｄに該当する石垣は，破損がほとんど無い良好な石垣であることから，定期的パトロールや雑草等の維持管理を行うものである。

また，破損石垣の今後の変容については明らかになってはいないため，条件によって危険度Ａの石垣よりも先に危険度Ｂの石垣が崩落することも考えられる。こうしたことから，石垣保存の優先順位については，危険度の区分Ａ～Ｄついて一定の考慮を払いつつ，今後のより詳細な石垣破損に対する調査の実施とその成果による検討や高松城跡全体の保存管理のあり方，維持管理に照らし合わせて，その方向性を決めるものとする。

表 19　地区別危険度別石垣面数

危険度	地区						
	本 丸	二ノ丸	三ノ丸	北ノ丸	桜ノ馬場	その他	合計
A	3	5	0	0	2	0	10
B	6	9	23	4	11	2	55
C	0	4	4	1	7	0	16
D	19	22	72	38	41	9	201
合計	28	40	99	43	61	11	282

引用文献・主要参考文献

東信男 1997「讃岐の城郭石垣」『香川考古 第6号』香川考古刊行会

永年會 1932『増補 高松藩記』

胡光 2007「「高松城下図屏風」の歴史的前提」『調査研究報告 第3号』香川県歴史博物館

大嶋和則ほか 1999a『史跡高松城跡（地久櫓跡・三ノ丸跡）史跡高松城跡整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』高松市教育委員会

大嶋和則 2007『史跡高松城跡整備報告書 第1冊 鉄門石垣調査・保存整備工事報告書』高松市・高松市教育委員会

小川賢ほか 2006b『丸亀町商店街A街区第一種市街地再開発事業に係る隔地駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（厩跡）』高松市教育委員会・高松市丸亀町商店街A街区市街地再開発組合

香川県 1987『香川県史 第九巻 資料編 近世史料Ⅰ』

香川県 1989a『香川県史 第三巻 通史編 近世Ⅰ』

香川県 1989b『香川県史 第四巻 通史編 近世Ⅱ』

川畑聰 2003a『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報 平成11～13年度調査』高松市教育委員会

川畑聰 2003b「史跡高松城跡（三の丸，竜櫓台北側）」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成14年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

川畑聰 2004a『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報 平成14・15年度調査』高松市教育委員会

川畑聰ほか 2004b「史跡高松城跡（二の丸，玉藻公園西門料金所整備工事）」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成15年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版局

北山健一郎 1999『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

財団法人松平公益会 1964a『高松藩祖 松平頼重傳』

佐藤竜馬ほか 2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬 2007「考古学の視点から見た「高松城下図屏風」」『調査研究報告 第3号』香川県歴史博物館

第1回全国城跡等石垣整備調査研究会実行委員会 2004『第1回全国城跡等石垣整備調査研究会資料集』

第2回全国城跡等石垣整備調査研究会実行委員会 2005『「城跡石垣」集成 第2回全国城跡等石垣整備調査研究会資料集』

第3回全国城跡等石垣整備調査研究会実行委員会 2006『第3回全国城跡等石垣整備調査研究会資料集』

第4回全国城跡等石垣整備調査研究会実行委員会 2007『第4回全国城跡等石垣整備調査研究会資料集』

高橋学 1992「高松平野の地形環境 －弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に－」『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会

高松市 1957『重要文化財高松城 二ノ丸 月見櫓 續櫓 渡櫓 水手御門 修理工事報告書』

高松市 1967『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』

高松市 1971『史跡高松城保存修理工事報告書』

高松市 1974『史跡高松城跡保存修理工事報告書 石垣修理工事報告』

谷口克広 2000『信長・秀吉と家臣たち』NHK出版

日本の地質『四国地方』編纂委員会 1993「日本の地質8 四国地方」共立出版

古野徳久 2001『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅰ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター

松田朝由 2001「生駒家歴代当主の墓にみる五輪塔の変遷」『香川考古 第8号』香川考古刊行会

松田朝由 2002「豊島型五輪塔の搬出と造立背景に関する歴史的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅹ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

松田朝由 2005「讃岐における石造文化圏について」『石造物研究会 第6回研究会資料 中世讃岐の石の世界 －生産・流通・信仰－』石造物研究会

松本和彦ほか 2003b『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

牟礼町教育委員会 1999『重要有形民俗文化財 牟礼・庵治の石工用具』

森下英治 1995「高松城跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』香川県教育委員会

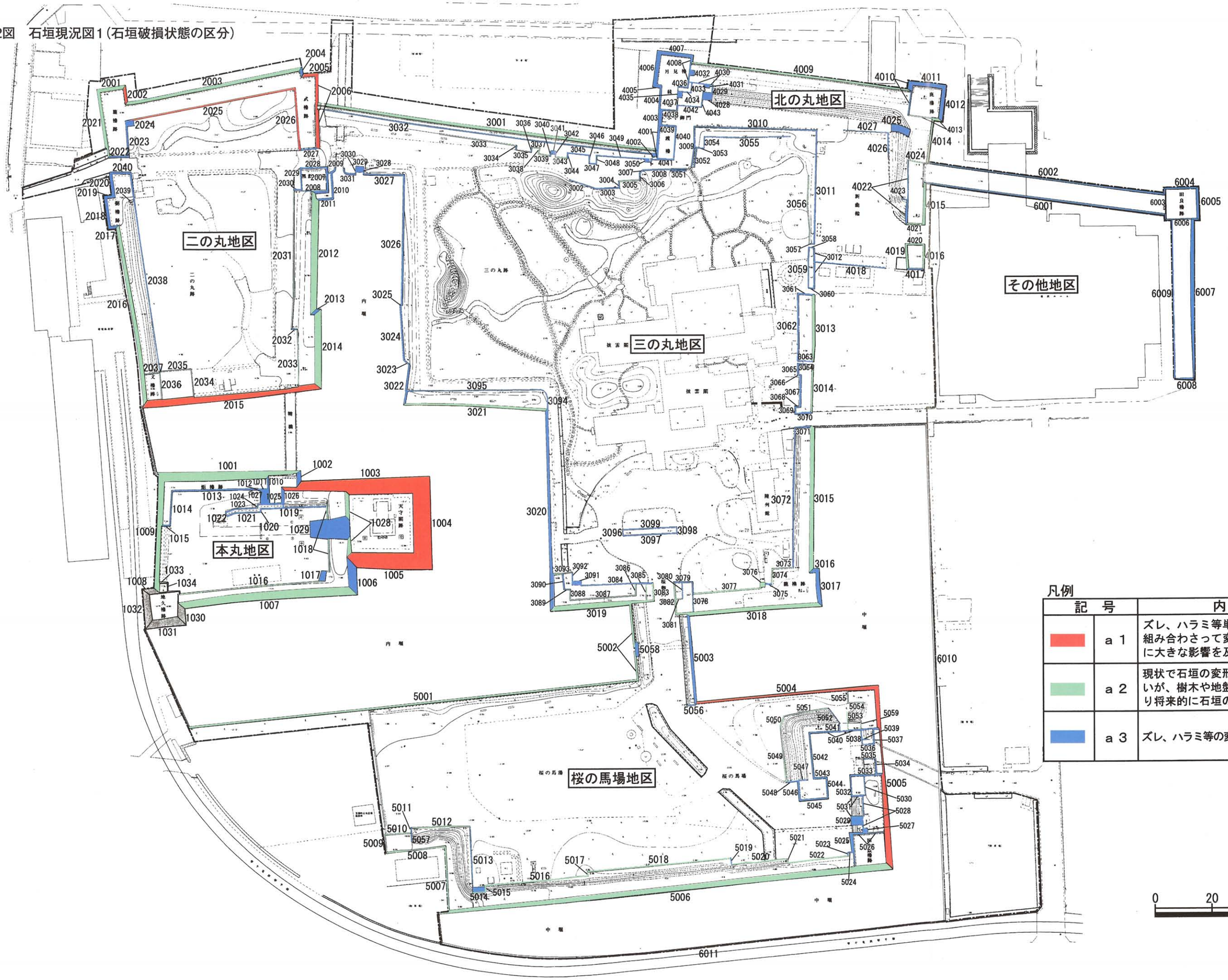
森下友子 1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅳ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

森本浩行 2005『我が国における城郭石垣の形状および構造の歴史的変遷に関する土木史的研究』

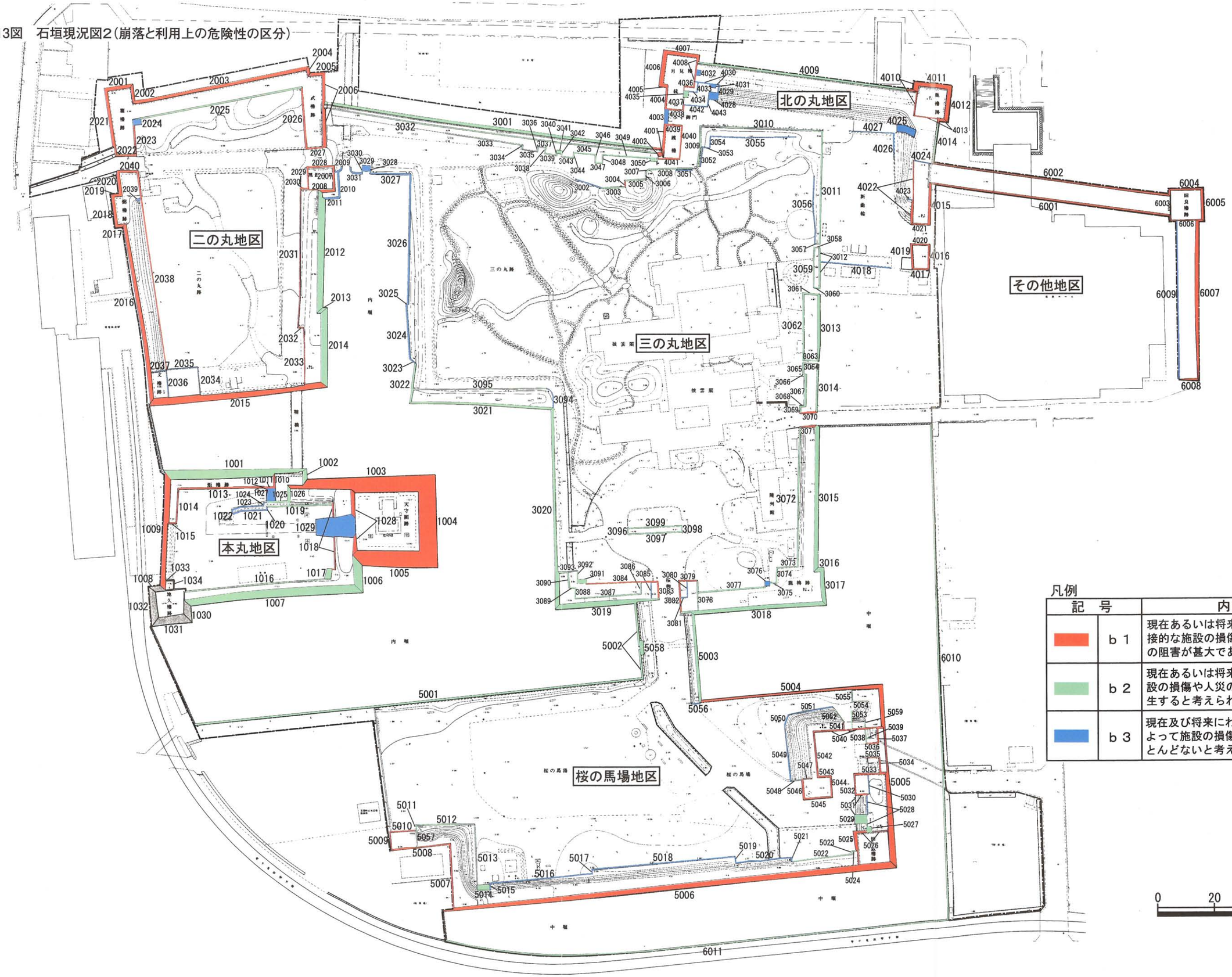
山元敏裕ほか 1991「史跡高松城発掘調査報告書 －玉藻公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－」『高松市文化財調査報告書』高松市教育委員会

渡部明夫ほか 1987『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』香川県教育委員会

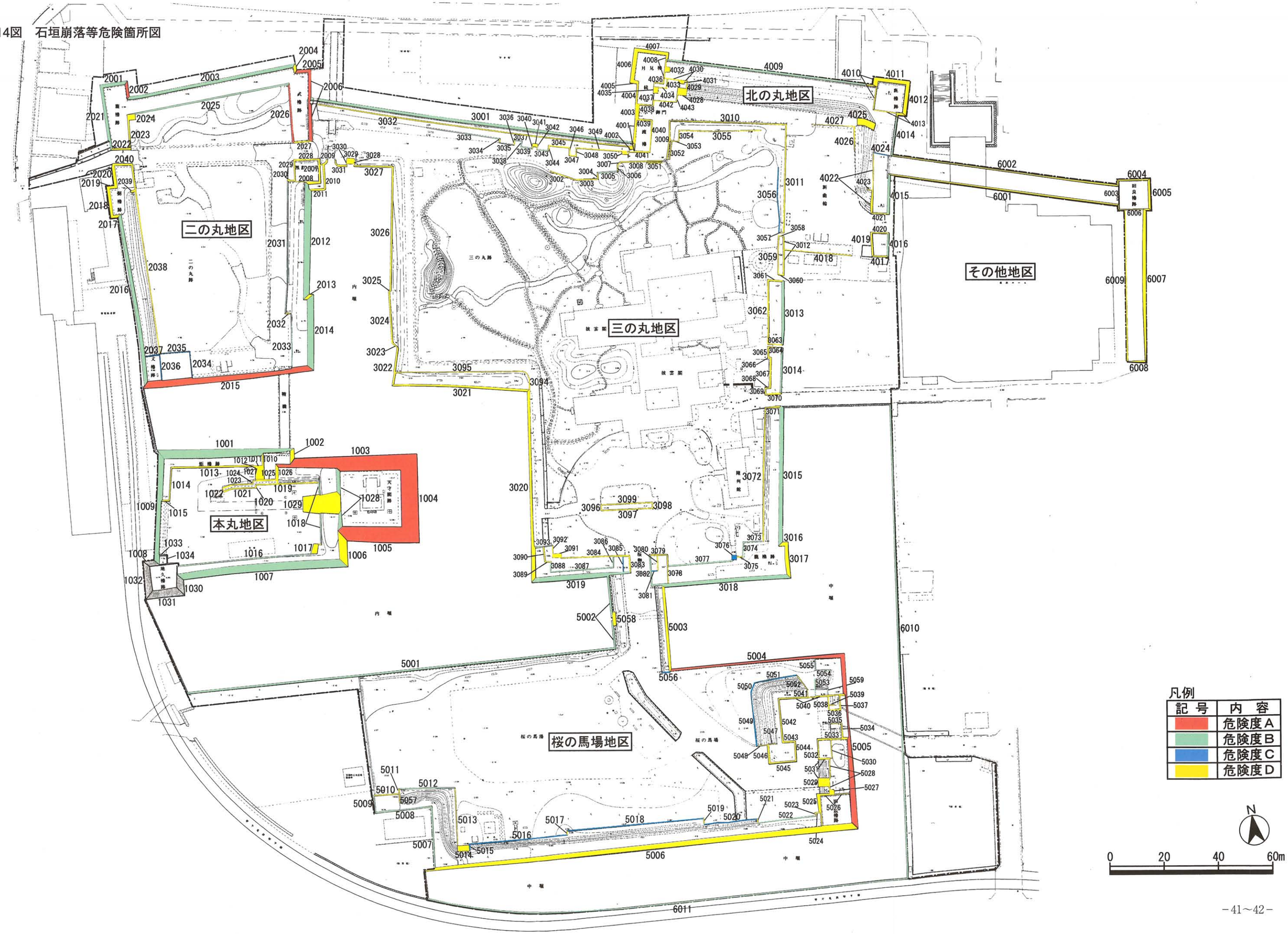
第12図　石垣現況図1（石垣破損状態の区分）



第13図　石垣現況図2（崩落と利用上の危険性の区分）

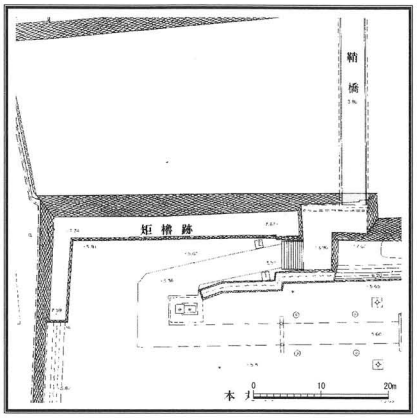


第14図　石垣崩落等危険箇所図



調　査　票

史跡高松城跡　石垣調査

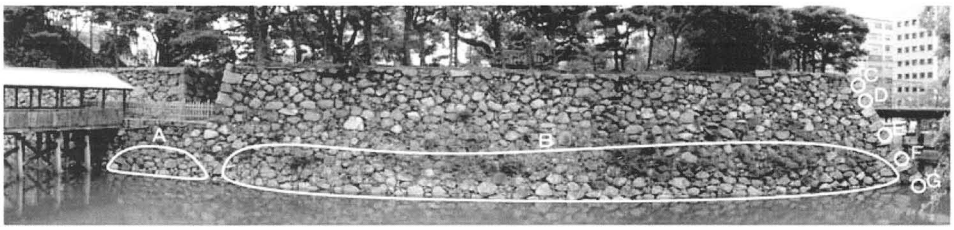
石垣番号	1001	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面、割石(一部)	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	矩櫓、中櫓、鞘橋				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			分銅形、長方形、○、×、○の中に×	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s3								a2	b2	B

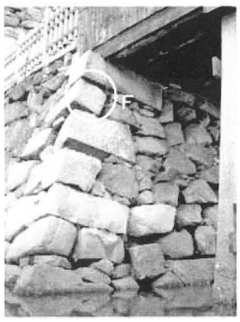
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	9.9/36.3	50.0	4.52/8.75	8.42	7.91	70/80	72/80	79/86	73	73

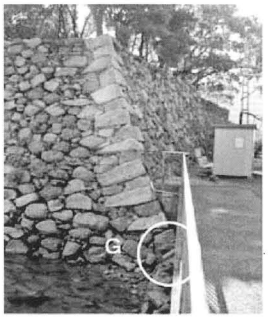
築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．小ハラミ
B．ハラミ
C．刻印□
D．刻印○×
E．刻印T？
F．刻印○
G．一番下は野面一生駒期？
※間詰石水際ヌケ





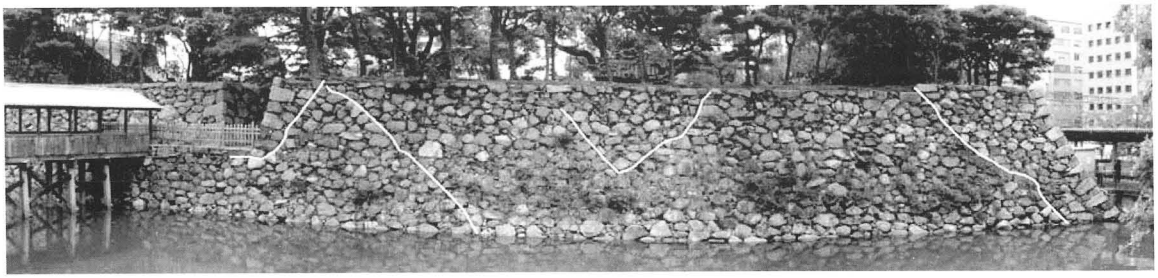
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日 平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸の北面石垣であり、内堀に面する。見学動線の鞘橋から望める。 ・高さは櫓台7.9～8.7mで、虎口部分では4.5mである。全長は天端で約46.2mである。 ・勾配は70～86度と変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積であるが、一部割石を用いた乱積も見られる。両隅角及び橋による切り欠いた隅角部は切石によって積み上げられている。 ・石材は比較的大きめで方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模は大小混在する。 ・基底部の1石を前面に持ち出すアゴ止め石が置かれ、石垣の安定を図っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角2石目に長方形・ち・り、4石目に○・×、6石目に分銅形、8石目に分銅形、12石目に○・×、14石目に上、左隅角2石目に分銅形、切り欠いた隅角部1石目に○・×、3石目に長方形・ち・り、5石目右面に○の中に×、5石目右下に○・×が見られる。
破損状況	・水面近くの石垣下部にハラミや間詰石のヌケなど変形が見られる。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・鞘橋袂の隅角部は勾配が急になっており、橋の架け替え等による積み直しが考えられる。

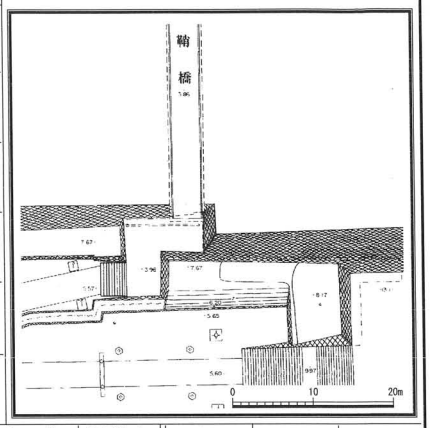
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部近傍下部から左上がりで天端に至る目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	右隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左隅角下部から天端に至る右上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	左隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左隅角近傍天端から下部に至る右下がりの目地	左	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	築造時の偶発的なもの
	右	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
石垣中央部の谷形の目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1002	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面、割石(一部)	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	鞘橋				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		分銅形	

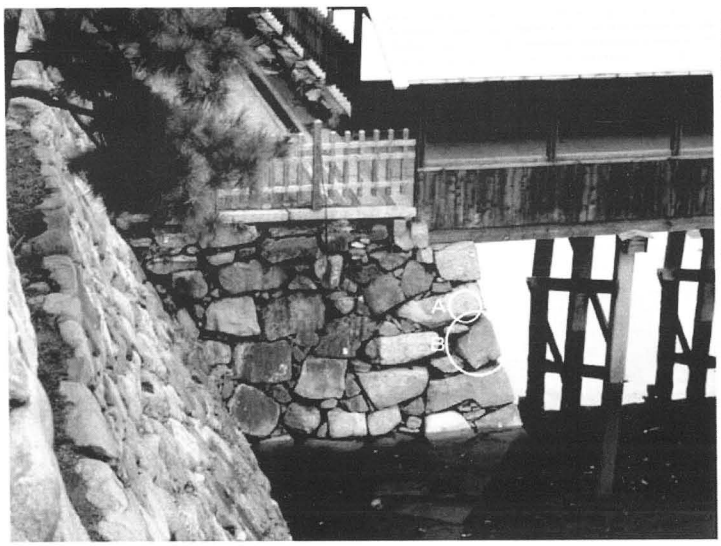


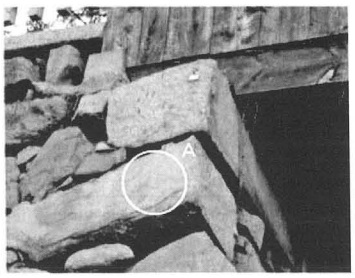
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		s4									a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.2	4.1	-	3.94	-	60	-	70	-	65

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	平成18年度調査	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．刻印分銅
B．動き出している石

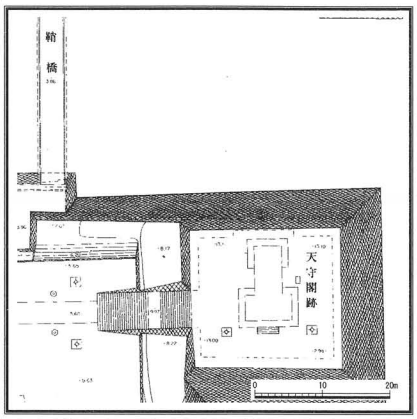
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日 平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の東面石垣であり、鞘橋を受ける橋台を構成する石垣である。 ・高さは中央部で約3.9m、全長は天端で約5.2mである。 ・勾配は65～70度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形の角張った形状で、規模もほぼ揃っている。石垣上部では天端を揃えるため、やや小さな石材を用いている。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角2石目に分銅形が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・右隅角の1石が動き出し、ズレが見られる。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・橋の架け替えなどでの一部積み直しが考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1003	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ上２石	
上部構造物	天守、中川櫓				石材		花崗岩、安山岩（一部）	
転用石	無			刻　印			長方形、（	

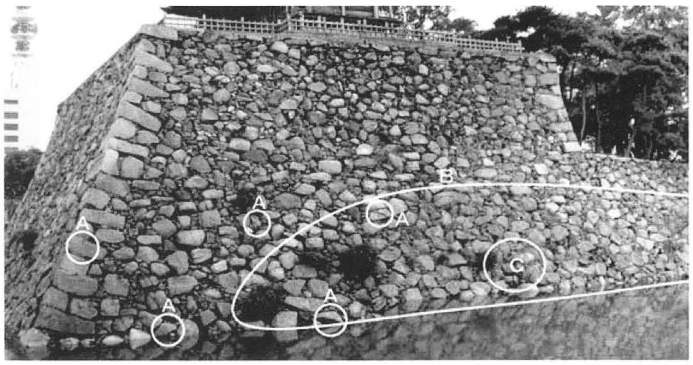


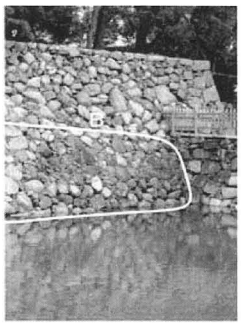
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s3	s4				w3			a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	22.1/21.5	45.0/5.3	13.32/6.49/3.78	13.32/6.2/3.73	13.32/8.51/3.59	55	65/65	60/75	65/70	67/68

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度調査	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．ワレ
B．ハラミ
C．大きなハラミ
D．刻印○
E．刻印□
F．矢穴
※水際間詰ヌケ、ワレ多し

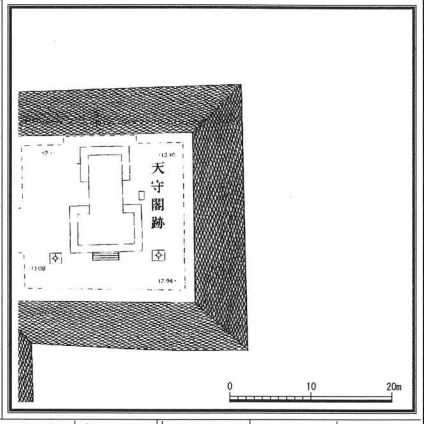
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸北部の北面石垣であり、東側では天守台を構成し、内堀に面する。 ・高さは天守台で約13.3mと高松城跡の石垣の中で最高に近い値である。櫓台部分では6.5～8.5m、虎口部分で3.6～3.8mである。全長は天端で約43.6mである。 ・勾配は天守で55～65度と緩やかである。本丸で60～75度とやや急になるが、城内全体の石垣勾配の中では緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。天守台と虎口の3箇所に見られる隅角部は切石によって積み上げられている。 ・石材は比較的大きめで全体的に丸みのある形状のものが多く、規模は大小混在する。 ・基底部の1石を前面に持ち出すアゴ止め石が置かれ、石垣の安定を図っている。 ・両隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角2石目に（、6石目に長方形が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・水面近くの石垣下部に間詰石のヌケ、石材のワレ、ハラミなどの変形が見られる。 ・天守台の中央部付近は特に大きくはらみ、石垣崩壊の可能性が高い。 ・左隅角の石材にワレやズレなどが見られ、石材強度の低下が考えられ不安定な状態にある。
石垣の変遷	・寛文10年(1670)の天守改築に伴い、改修の可能性がある。 ・下半は築造当時のものが残っている可能性がある。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

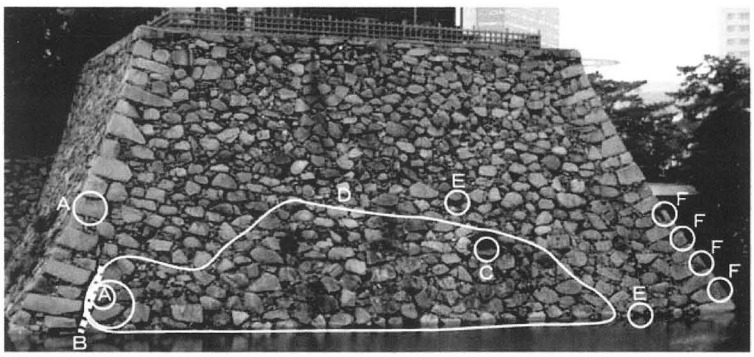
石垣番号	1004	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ	
上部構造物	天守				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

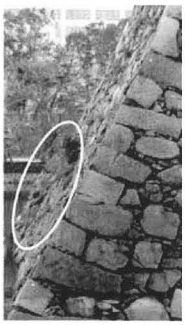
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s3	s4	s3	s4				w3		有	a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	21.1	32.1	13.53	13.6	13.73	55	70	70	70	55

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度調査	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





103側からみたハラミ

A．ワレ
B．大きな空隙
C．ズレ出し
D．大きいハラミ出し
E．ヌケ
F．算木の短辺が内側に入り込む
　(面が揃わず)
下部全体に目地をモルタル詰め
※下半部が大きくハラミ出し
　石材ワレ、ヌケ多し、算木もワレ

ズレ出し部

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日 平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

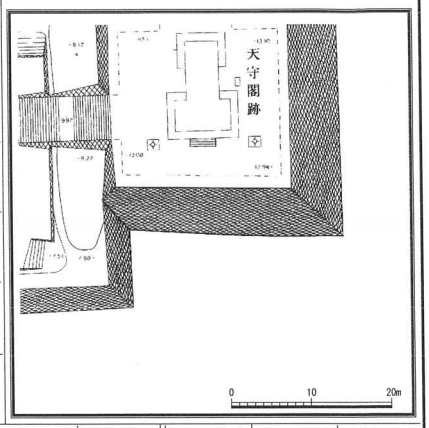
位置・規模等	・本石垣は天守台の東面石垣であり、内堀に面する。他の2面の石垣とともに高松城の石垣を象徴的に表す石垣である。 ・高さは中央部で約13.6mと高松城跡の石垣の中で最高値である。全長は天端で約21.1mである。 ・勾配は70度とやや緩やかであり、隅角部はさらに緩やかになる。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角は切石によって積み上げられている。右隅角の下部は角石の短辺が内側に入り込む。 ・石材は比較的大きめで方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模はほぼ揃っている。 ・基底部の1石を前面に持ち出すアゴ止め石が置かれ、石垣の安定を図っている。 ・両隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・下部1/3はハラミが全面に見られる。左隅角付近に約30cmのズレが見られる。 ・石材のワレも多く石垣の変形が大きく、石垣は安定性に欠ける。 ・全体に面が不揃いである。 ・モルタルにより石垣の破損の進行を止めようとしているが、破損は進行中である。
石垣の変遷	・いくつかの目地が見られ、寛文10年(1670)の天守改築に伴い積み直された可能性がある。 ・石垣下部では生駒期のものが残ることも考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角近傍から右隅角中段に至る谷形の目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左隅角部下部から石垣中段に至る右上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	隅角部分の積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1005	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記	ソリ	
上部構造物	天守				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

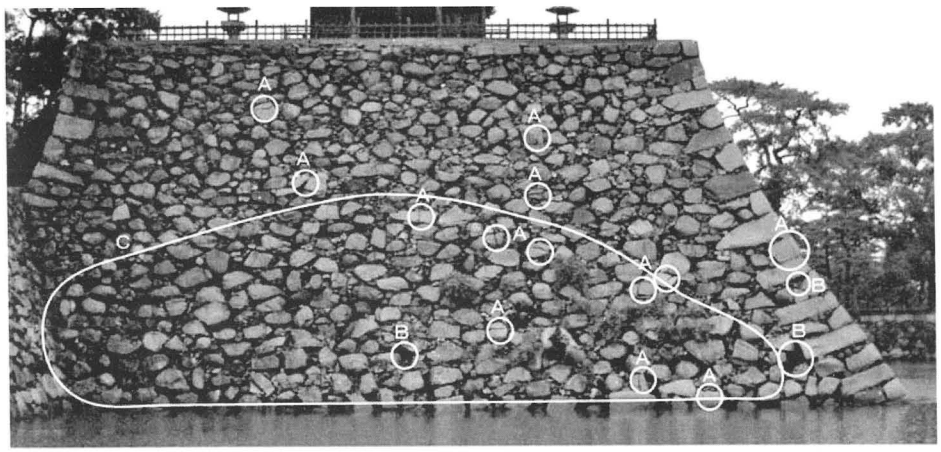


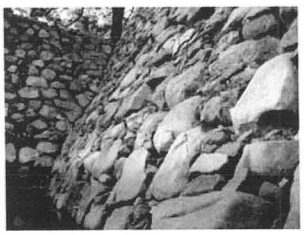
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s4		s3	s4						有	a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	22.15	26.75	11.69	12.56	12.51	50	60	60	60	55

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度調査	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





※下半全体が大きくハラミ出し

側面からみたハラミ

A．ワレ
B．ヌケ
C．ハラミ

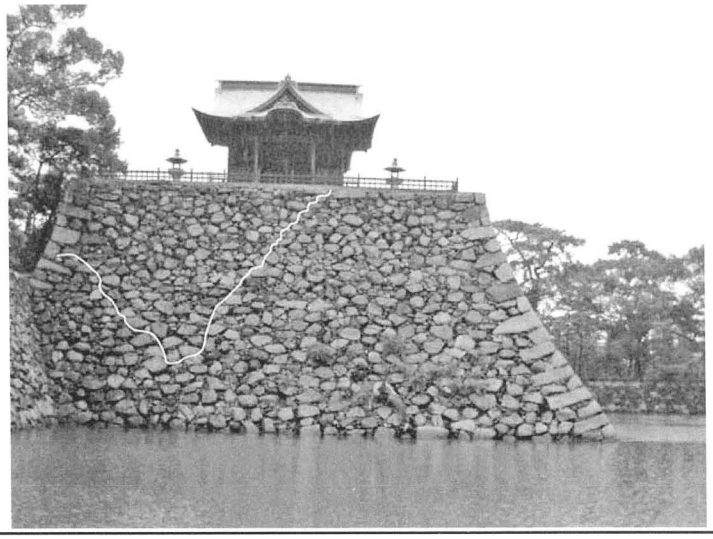
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は天守台の南面石垣であり、内堀に面する。他の2面の石垣とともに高松城を象徴的に表す石垣である。 ・高さは中央部で約12.6mと高松城跡の石垣の中で最高値に近い。全長は天端で約22.2mである。 ・勾配は60度と緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は比較的大きめで方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模はほぼ揃っている。 ・基底部の1石を前面に持ち出すアゴ止め石が置かれ、石垣の安定を図っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石材のワレや間詰石のヌケが中央部から下部にかけて多く見られる。 ・全体的にハラミが生じており、石垣の変形が大きい。 ・隅角石にもワレがあり不安定である。
石垣の変遷	・いくつかの目地が見られ、寛文10年(1670)の天守改築に伴い積み直された可能性がある。 ・石垣下部では生駒期のものが残ることも考えられる。

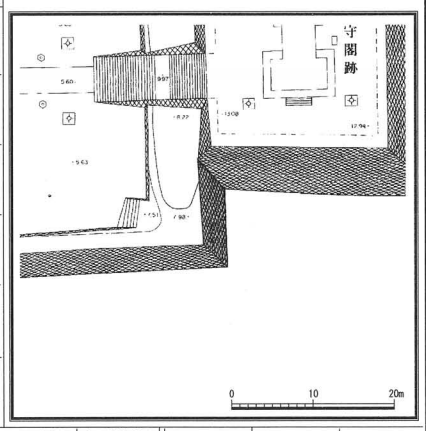
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部中段から右中間	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
天端に至る谷形目地	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1006	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記	ソリ	
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	○、×、分銅形	

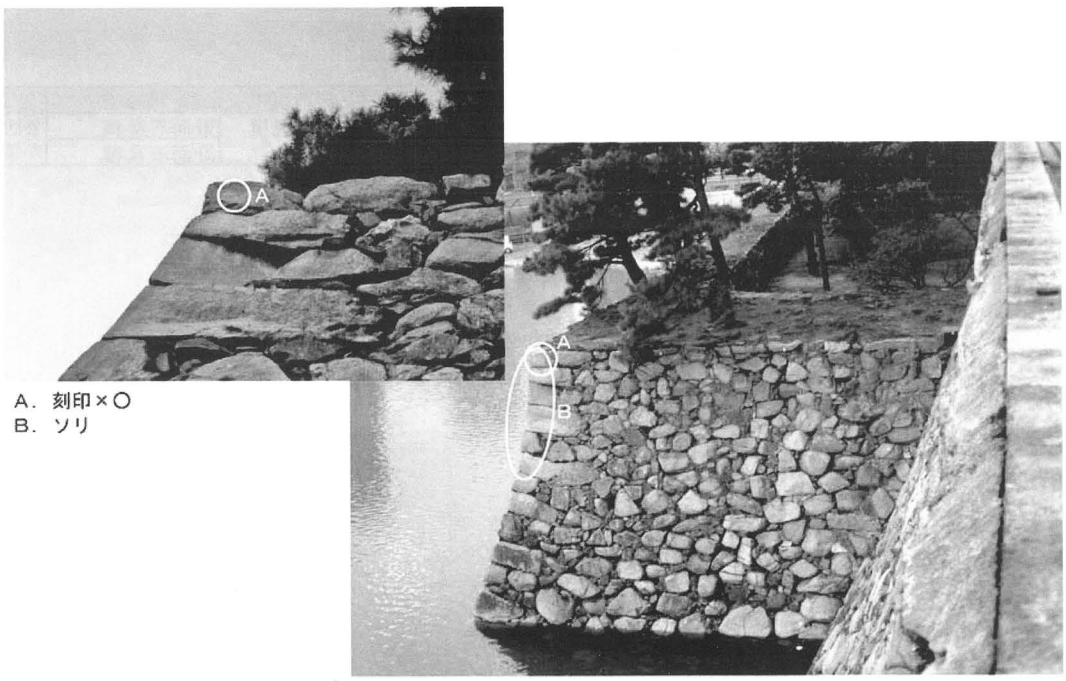


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好										有	a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	10.85	9.85	7.2	6.91	7.34	60	-	70	-	50

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	平成18年度調査	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．刻印×○
B．ソリ

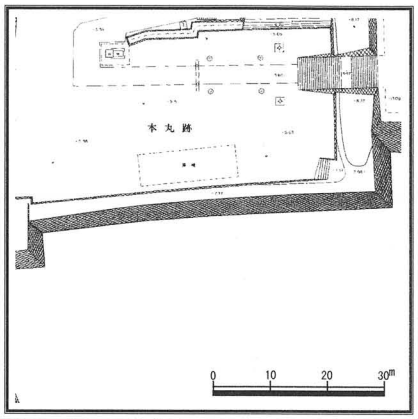
備　考	短い石垣のため、左端勾配・右端勾配省略	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸東部の東面石垣であり、内堀に面する。 ・高さは右隅角で約7.3mであり、天守台に次ぐ高い石垣となっている。全長は天端で約10.9mである。 ・勾配は70度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は比較的大きめで全体的に丸みのある形状のものが多く、規模はほぼ揃っているが、大石材も石垣下部に一部見られる。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角1石目に○・×、3石目に分銅形が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・水面近くの間詰石のヌケがわずかに見られるが、石垣面に目立った変形はなく安定している。 ・右隅角部付近では目地にモルタルが詰められている。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1007	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入（解体中）				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			分銅形、上	

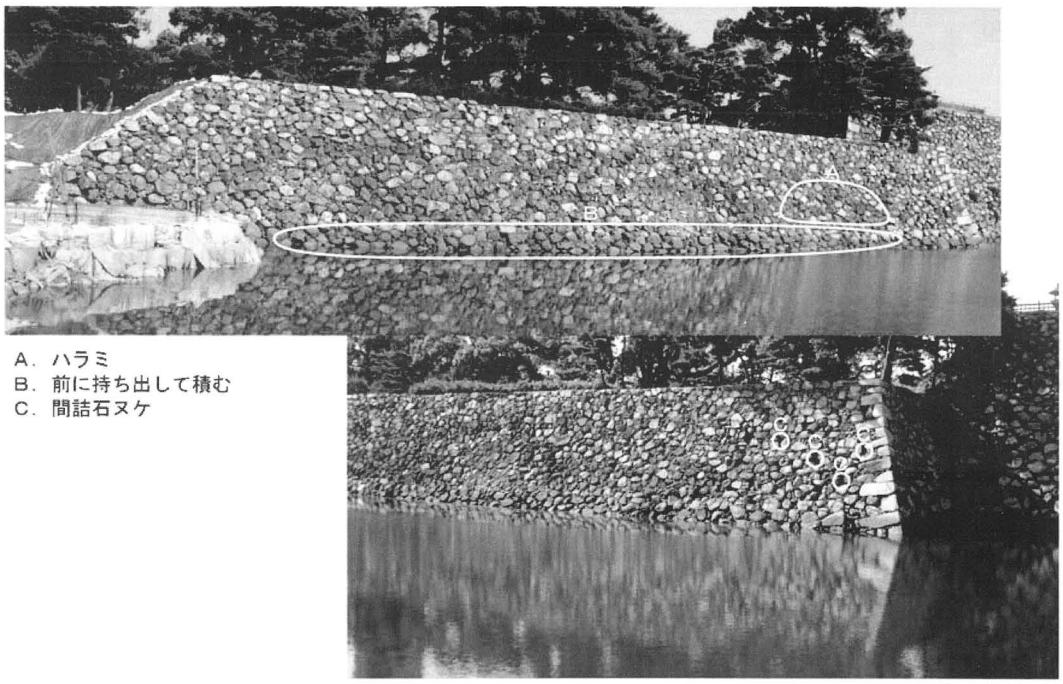


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s3					w3			a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	51.64(解体)	60.5(解体)	8.58(解体)	8.66	8.82	解体	解体	82	81	85

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理	昭和40年度(中央部修理)	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．ハラミ
B．前に持ち出して積む
C．間詰石ヌケ

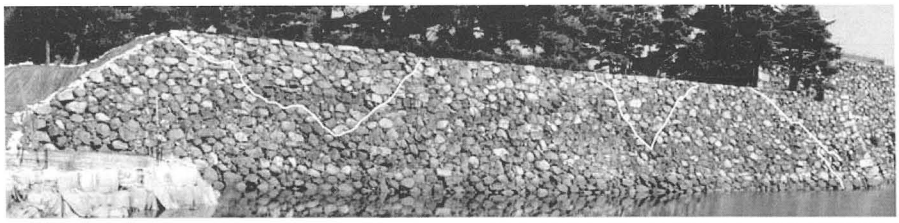
備　考	解体中	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸南部の南面石垣であり、内堀に面する。西端で地久櫓台に取り付く。 ・高さは中央部で約8.7mであり、天守台に次ぐ高い石垣となっている。全長は天端で約51.6mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は比較的大きめで全体的に丸みのある形状のものが多く、規模はほぼ揃っているが、大石材も石垣面に点在して用いられている。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・刻石は右隅角3石目左側石材に分銅形、その約3m左側石材に上が見られる。
破損状況	・長大な石垣面を持ち石垣下部でハラミが連続的に見られる。 ・隅角近傍では間詰石のヌケが多く見られ、やや不安定である。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・昭和40年度に台風によるき損のため中央部が修理されている。

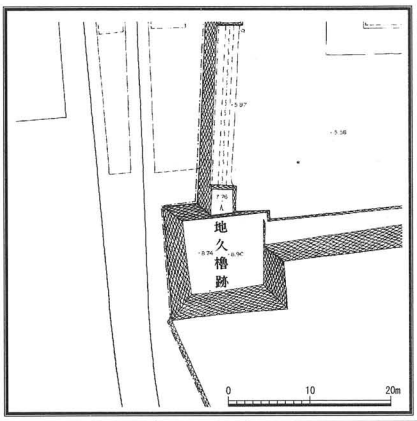
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角近傍下部から左上がりに天端まで至る目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
石垣中央やや右よりの谷形の目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左隅角部近傍から右側天端に至る谷形の目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1008	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	入（解体中）				右	切石	
	右隅角	出（解体中）			その他特記			
上部構造物	地久櫓				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印		長方形、○、×、分銅形、上	

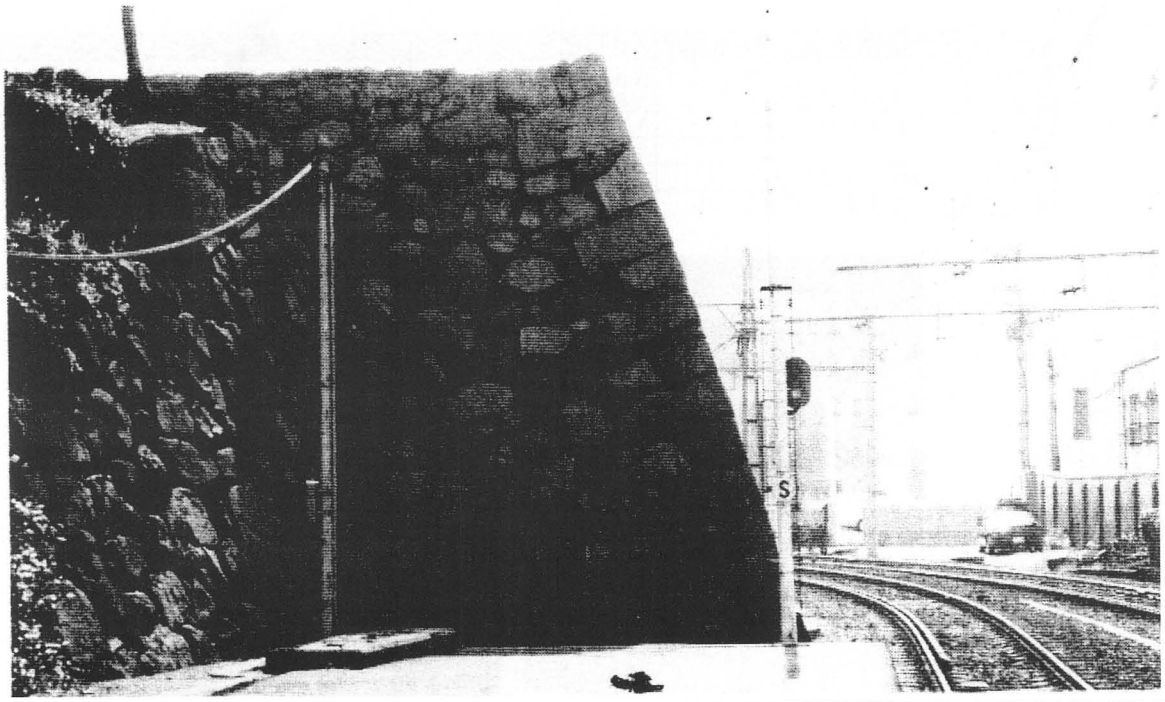


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	10.58	－	3.2	－	7.22	－	－	－	－	75

築造時期	生駒期・松平初期	改修		基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓発掘調査概報(平成11～15年度)』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



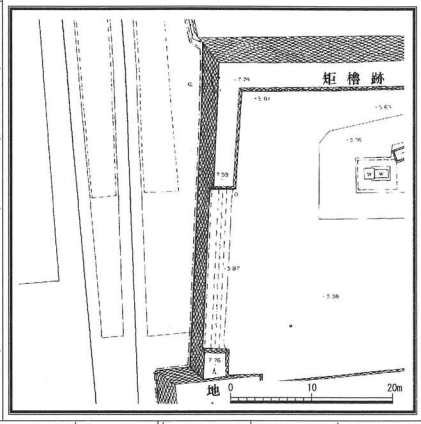
備　考	解体中	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸南東部の地久櫓台を構成する北面石垣で、内堀に面する。 ・高さは右端で約7.2m、全長は天端で約10.6mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は安山岩と花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形の角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等混在する。規模も大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角1石目に分銅形、3石目に分銅形、右隅角3石目に長方形、4石目裏面に上、5石目裏面に上、6石目裏面に上、7石目に上が見られる。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1009	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入（解体中）			その他特記			
上部構造物	矩櫓				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印		分銅形、○、×	

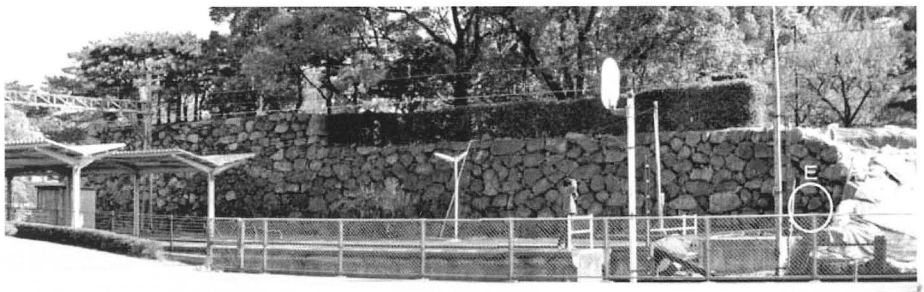


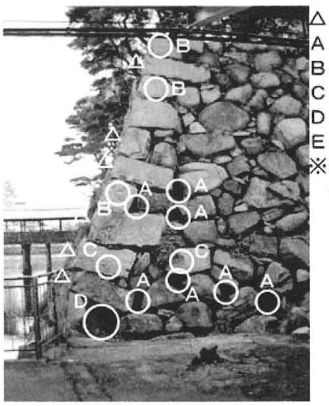
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s1	s34	n2				a3	r5		a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	15.3/20.5(解体)	39.73	5.56/3.73	5.24/3.72	4.95(解体)	73	78	76	68	70

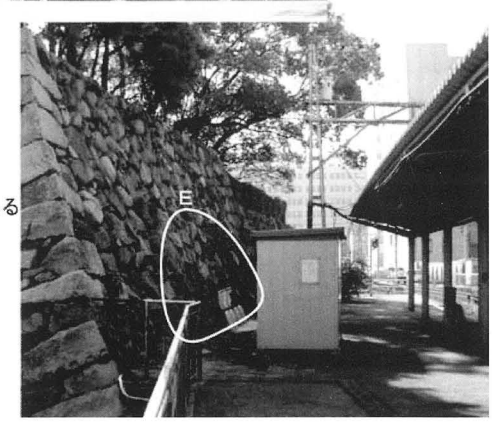
築造時期	生駒期	改修	基底部
修　理		文献資料	
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状





△　矢穴のある石材
A．間詰石のヌケ
B．刻印×○
C．刻印分銅型
D．凹み
E．小ハラミ
※間詰石のヌケが多く、
後で押し込んでいるものもある



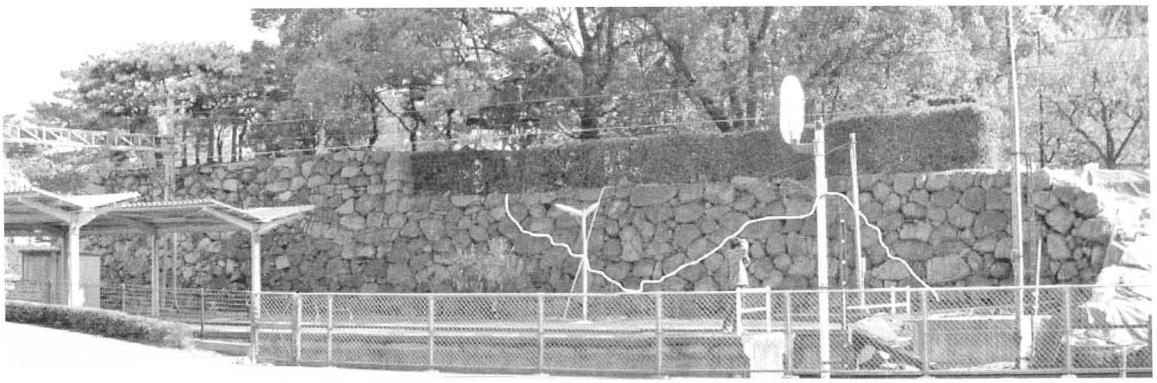
備　考	解体中	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸西部の西面石垣であり、南端で地久櫓台に取り付く。埋め立てられた内堀に面する。 ・琴電のホームに隣接しており、景観や安全の確保上十分な配慮が必要な位置にある。 ・高さは中央部で約5.3mであるが、下半は内堀の埋め立てにより埋没しており、本来はもっと高い。全長は天端で約39.7mである。 ・勾配は76度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は全体的に丸みのある形状のものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っているが、大石材も石垣面に点在して用いられている。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角1石目に○・×、3石目に○・×、5石目に○・×、7石目に○・×、9石目に分銅形、1石目右側石材に分銅形、9石目の右側石材に分銅形が見られる。
破損状況	・石垣下部や右隅角部近傍でハラミが見られる他、上部でズレが見られる。 ・間詰石のヌケが多く見られる他、石材のワレも散見される。 ・石垣全面にわたって、焼損を受けた石材が見られる。
石垣の変遷	・右半分天端部は解体中で、発掘調査から明治以降の積み直しの可能性がある。

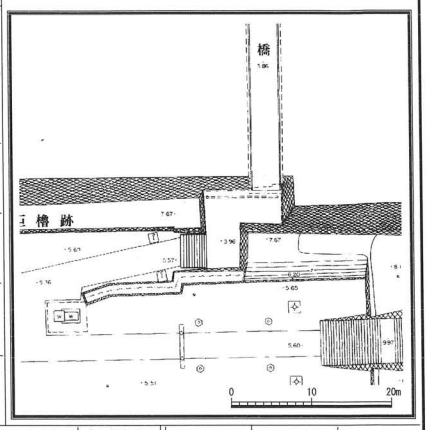
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣中央やや右よりの谷形の目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
右中間天端から右下がりに下部に至る目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	築造時の偶発的なもの
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1010	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石、野面	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	矩櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		○、×	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s3				s2			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.34	5.39	3.6	3.59	3.91	72	82	79	80	70

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査	平成18年度調査	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．ヌケ
B．ワレ
C．表面ハガレ
D．刻印×○
E．刻印○
F．矢穴
G．控えのないうすい石材を用いている
※左隅角は積み替え、改変されている
とみられる

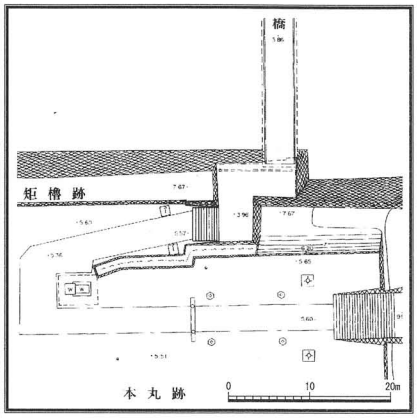
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸虎口の東面石垣であり、矩櫓台を構成する。 ・高さは中央部で約3.6m、全長は天端で約5.3mである。 ・勾配は79～82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積であるが、一部野面石も用いられている。右隅角部は切石を用いて積み上げられている。左隅角は加工精度の低い切石を用いて積み上げられている。 ・石材は丸みのあるものと角張ったものが混在する。規模も大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積であるが、左隅角は比較的小さな石材を用いた算木積で、完成度は低い。 ・中央部の大石材は、扁平で控えが少ない石材を用いている。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角2石目に○・×、4石目に○、左隅角6石目右側石材に○が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケや石材のワレも見られるが、全体的には安定している。 ・中央部の比較的面の大きな石材は扁平で控えが少ない石材を使用しており、ややズレが生じている。
石垣の変遷	・絵図では石垣がさらに南側へ延びるように描かれている。 ・明治34・35年の玉藻廟建築に際し、新たな通路を付け直すために石垣を取り外し、開口したと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1011	地区	本丸	石垣様式	積み方		割石、切石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法		谷積	
方　位	南				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

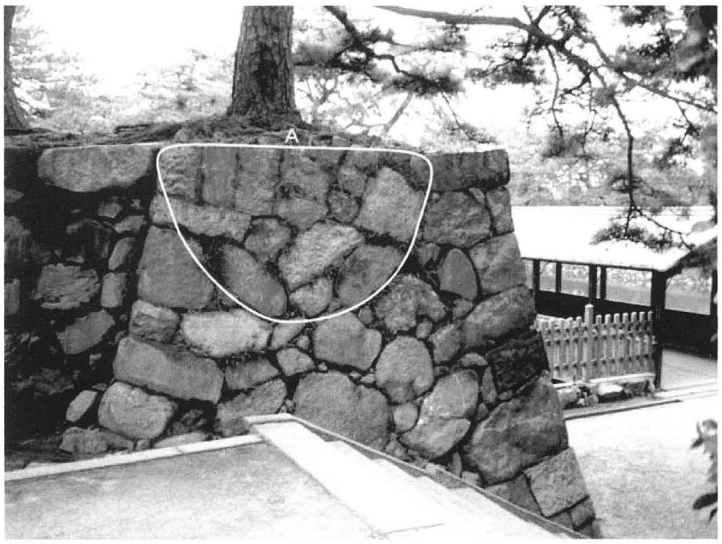


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.01	4.12	2.1	－	3.57	70	76	76	79	72

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．谷積

※この面は全面後世の改変（開口面）と思われる

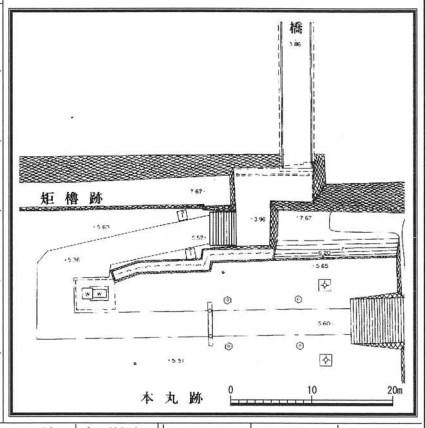
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸虎口の南面石垣である。 ・高さは右隅角部で約3.6m、全長は天端で約3.0mである。 ・勾配は76度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた谷積である。両隅角とも加工精度の低い切石を用いて積み上げられている。 ・石材は丸みのあるものと角張ったものが混在する。規模はほぼ揃っているが、全体的に小石材が用いられている。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・谷積、形状サイズのそろった比較的小さな石材の使用、面を揃える等明治以降の築造と考えられる。 ・『旧高松御城全図』では、現位置より南に門の南側の石垣があったように描かれており、明治34・35年の玉藻廟建築に際し、新たに築造された石垣と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1012	地区	本丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法		
方　位	西				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	0.08	0.27	2.07	－	2.03	73	－	－	－	70

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※隅角部のみ

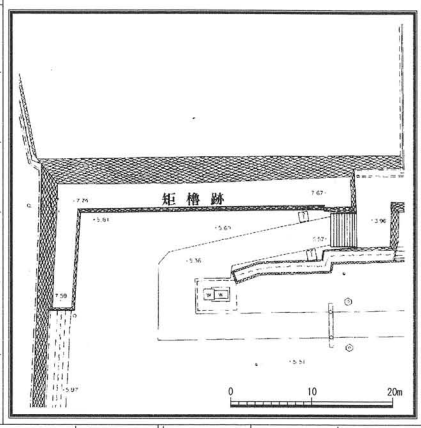
備　考	短い石垣のため中央高・左端勾配・中央勾配・右端勾配省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の矩櫓台の西面石垣の一部を構成する石垣である。 ・本石垣は両隣の石垣の平面的な段差を吸収する全長約30cmの石垣である。
積み方石材等	・隅角のみの石垣である。切石を用いた完成度の低い算木積である。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、現位置より西側で、南へ数m延びる中川櫓の西側石垣が描かれており、現在の石垣面は、明治34・35年の玉藻廟建築に際し、新たに通路を開口するため改変されていると考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1013	地区	本丸	石垣様式	積み方		割石、野面	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法		乱積、谷積(一部)	
方　位	南				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	矩櫓				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		s2	s3					s2			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	30.71	29.93	1.59	1.75	1.94	79	81	81	81	73

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．ズレ
B．間詰石のヌケ
C．谷積
D．小ハラミ
※石材形状、サイズ不揃い

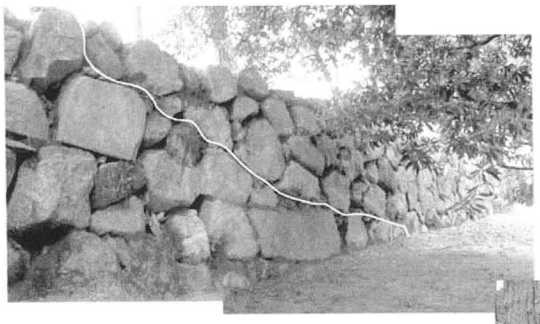
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

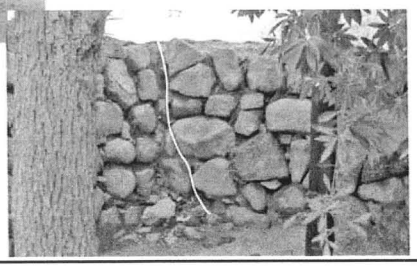
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸北部の矩櫓台の南面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約30.7mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石と野面石を用いた乱積であるが、一部谷積も見られる。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模は40cm程度の平均的な規模のものが多いが、より小ぶりのものも見られる。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中段部にズレ、下部にハラミが見られる。 ・間詰石のヌケも散見される。
石垣の変遷	・大半が改修されていると考えられる。

目地の状況

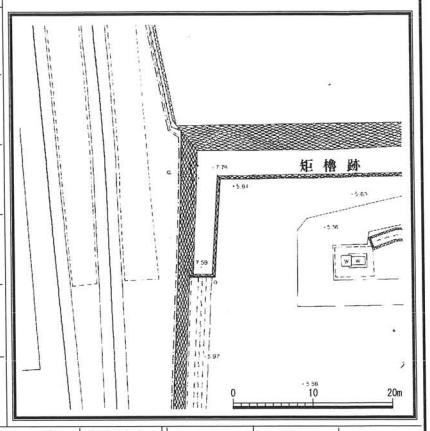
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左中間の天端から下部に至る右下がりの目地	左側	花崗岩	方形割石	左側石材は小ぶり	割石乱積	積み直し
	右側	花崗岩	多角形割石		割石谷積	
左中間の天端から下部に至る右下がりの目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石乱積	





史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1014	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石、野面	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	乱積、谷積(一部)	
方　位	東				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	矩櫓				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

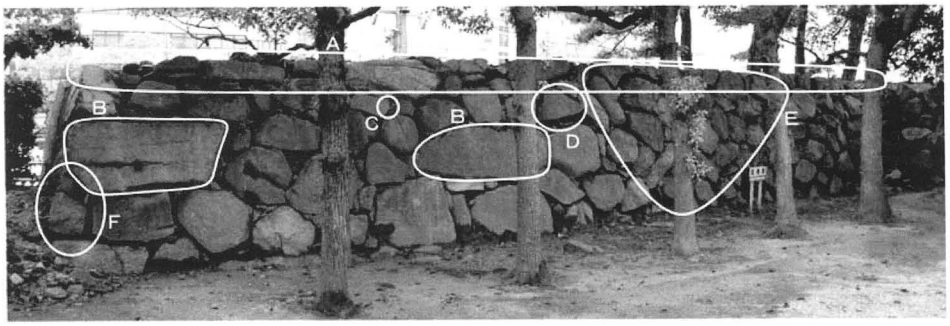


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		s2		s2							a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		12.05	12.21	1.84	1.79	1.85	72	77	75	81	79

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．天端不揃い
B．大石を入れる
C．ワレ
D．ズレ
E．谷積
F．算木積もみられず不自然に終わる
※左端は後世の改変（カット面）部とみられる

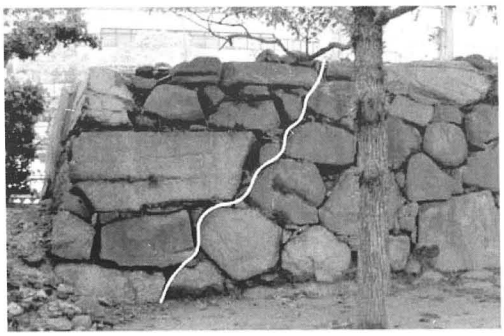
備　考		調査年月日	平成16年12月17日 平成16年12月17日

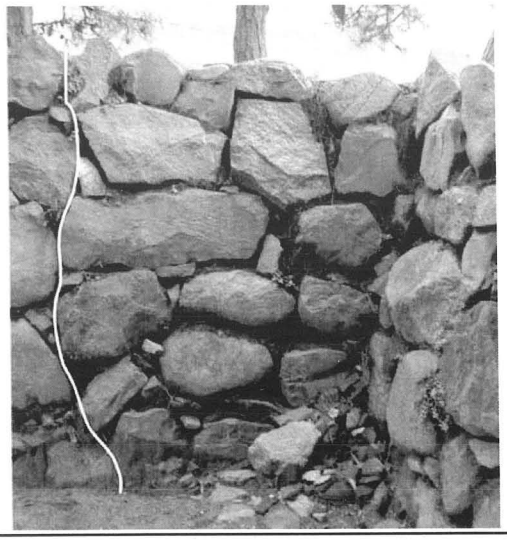
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸西部の矩櫓台の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約12.0mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石と野面石を用いた乱積であるが、一部谷積も見られる。左隅角は加工精度の低い切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模は40cm程度の平均的な規模のものが多いが、大石材より小ぶりのものも見られる。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中段部にズレが見られる他、ハラミが見られる。 ・天端が不揃いである。
石垣の変遷	・本石垣は本来さらに左側に延びていたが、中途で取り外されており、左隅角の積み直しはこの取り外しに伴うものと考えられる。取り外しの時期は明治以降と考えられる。 ・右隅角部近傍に縦目地が見られ、積み直された可能性がある。

目地の状況

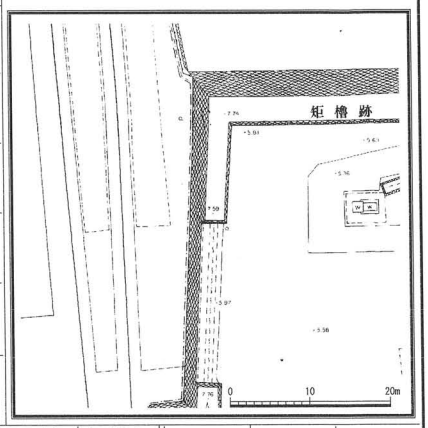
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角近傍の天端から下部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石布積	
左隅角下部から右上がりの天端に至る目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石布積	





史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1015	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	乱積	
方　位	南				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	

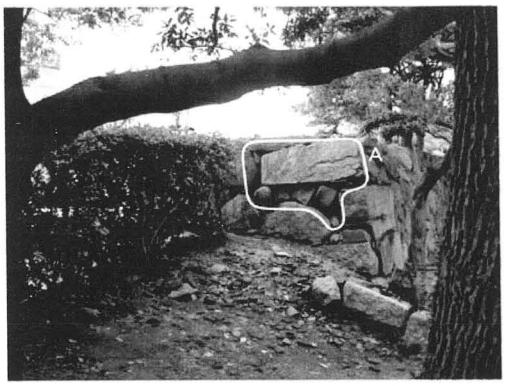


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		2.41	2.96	1.42	1.12	1.37	70	76	77	77	72

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．不自然な積み方

※後世の改変（カット面）とみられる

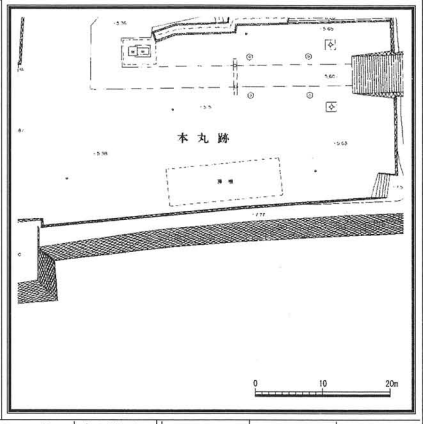
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸西部の南面石垣である。 ・高さは中央部で約1.1m、全長は天端で約2.4mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。上部に大石材、下部に小石材を積み、やや安定性に欠ける積み方である。両隅角とも加工精度の低い切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形ややや丸みのある形状のものが混在し、規模も大小混在する。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・全体に石材がズレた感じであるが、特に破損は見られない。
石垣の変遷	・石垣を途中で切断し、新たに石垣面を作っており、明治以降のものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1016	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法	乱積、谷積(一部)	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入（解体中）			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

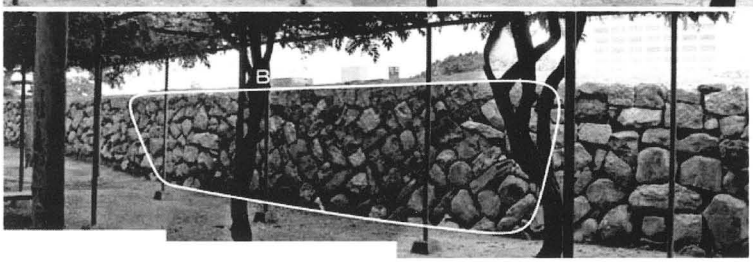


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s24								a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	44.5(解体)	54.25(解体)	0.43/1.84	1.98	解体	75	85	84	解体	解体

築造時期	明治以降	改修	有	基底部	
修　理	昭和40年度(中央部修理)	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．積み直しライン
B．谷積
左角部ハラミ
右角部付近石材小さい
中央部ハラミ

備　考	右隅角解体中	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

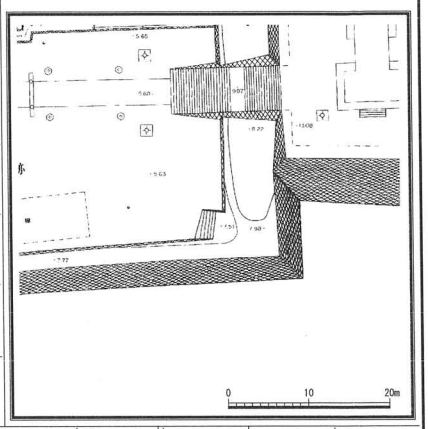
位置・規模等	・本石垣は本丸南部の内石垣であり、西端で地久櫓台に取り付く。 ・高さは中央部で約2.0m、全長は約44.5mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積であるが、一部谷積も見られる。石材の方向がまちまちで、合端がかみ合っておらず、やや乱雑な積み方が見られる。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模は40～50cm程度の標準的なものが多いが、大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・薄いハラミが右隅角近傍、中段部に見られる。
石垣の変遷	・現状の石垣上には多聞櫓が建つほどの幅がないことから、本来もう少し北側に所在した石垣を明治以降に撤去し、新たに築造した石垣と考えられる。 ・谷積の箇所が見られ、明治以降に積み直しが行われていると考えられる。 ・昭和40年度に台風によるき損のため中央部が修理されている。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左中間で天端から下部に至る谷形の目地	中	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石谷積	積み直し
	外	花崗岩	方形割石		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1017	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	石段				石積工法		
方　位	西				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	嘉元2年（1304）銘の石塔				刻　印	無	

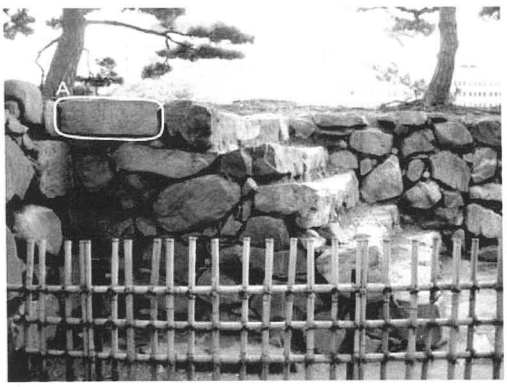


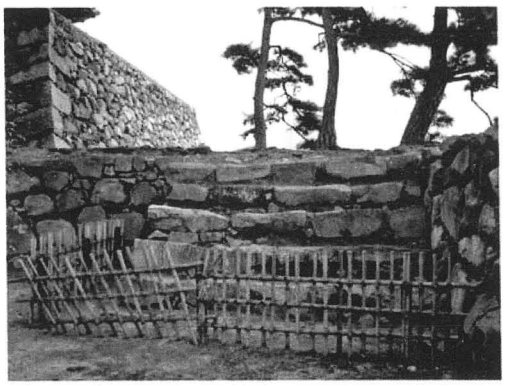
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.58	－	－	1.62	－	86	90	87	75	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．転用石（嘉元二年石塔）
※正面石垣（No.1018）が内側に入り込んでおり、これよりは新しいが、後世のものかは不明。（絵図にはない。）

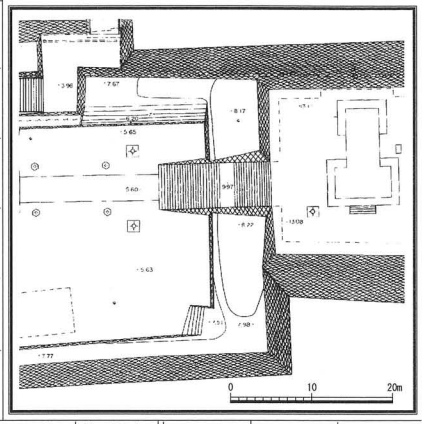
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は東南角に設けられた石段である。側面はやや乱雑な積み方をしている。 ・最上段での高さは約1.6m、幅は約3.6mである。段数は6段。
積み方石材等	・割石を用いた石段で、側面は花崗岩の割石を用いた乱積である。 ・転用石として、嘉元2年(1304)銘の石塔が利用されている。 ・刻石は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・踏み面に不陸が見られる。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、『旧高松御城全図』ではNo.1016石垣が本来もう少し北側に所在したと考えられることから明治以降の石段である可能性が高い。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1018	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面、割石(一部)	石垣位置
石垣部位	内				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	



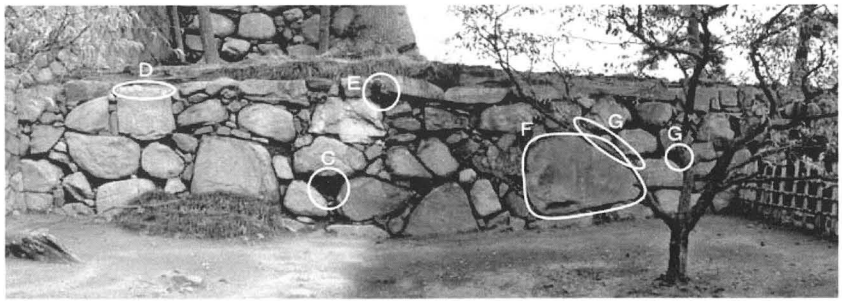
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			t1					s4	s2		有	a2	b1	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	11.82	11.32	1.88	2.08	1.71	86	82	83	83	74
	左	7.84	4.26	0	1.83	2.01	77	80	83	84	86

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．崩落
B．200×135の大石
C．間詰石ヌケ
D．矢穴
E．樹根で両側の天端石がズレ出し
F．170×125の大石
G．間詰に瓦片を入れる



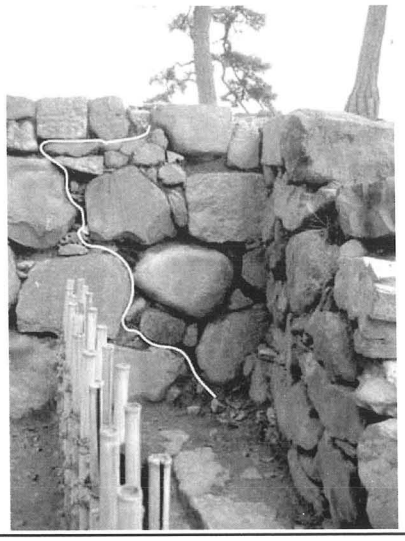
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸東部で天守台西面の下段部を構成する石垣であり、№1029石段によって南(右側)と北(左側)に分断される。 ・№1029石段左側では、高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約7.8mである。勾配は83度とやや急である。 ・№1029石段右側では、高さは中央部で約2.1m、全長は天端で約11.8mである。勾配は83度と左側と同じである。
積み方石材等	・石材は花崗岩の野面石を用いた乱積であるが、左側では一部割石を用いた乱積も見られる。左側左隅角は土塁にすり付けである。他の隅角は入隅である。 ・石材は比較的大きめで方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模は大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・左端部が崩壊している。 ・上部石材にズレが見られる他、間詰石のヌケが見られるが、概ね安定している。
石垣の変遷	・部分的な改修はあるが、大半が築造時のままと考えられる。

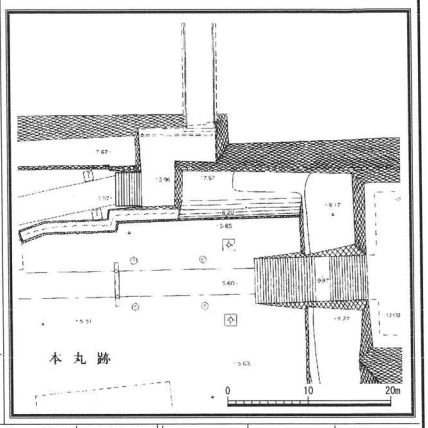
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石布積	積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1019	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)、その他(後世のもの)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	中川櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

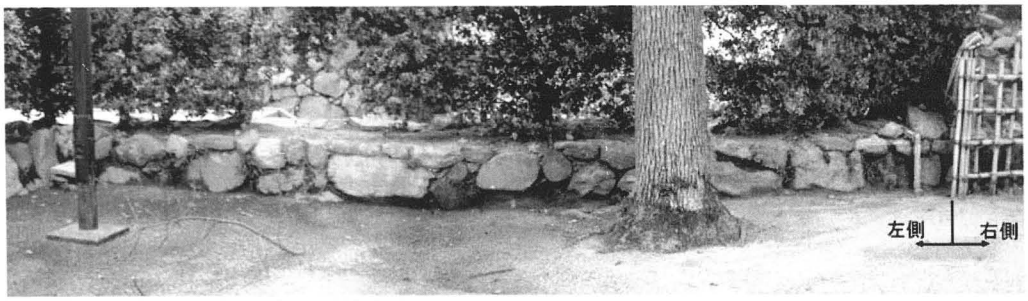


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	22.95	22.95	0.46	0.38	0.16	-	-	83	74	50

築造時期	生駒期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



※左側の石列は新しい時代のものと思われる

※右側の石列はNo.1026から続く本来の内石垣で土留石垣であるがNo.1018より後のもの（No.1018が内側に入り込む）

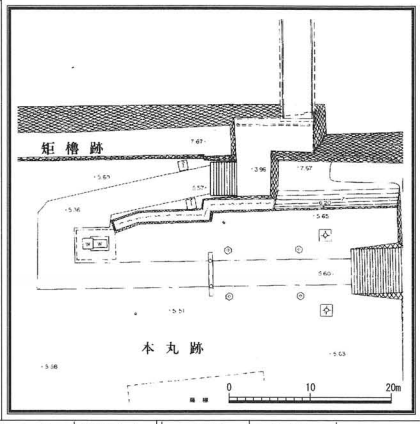
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部に位置する石垣で、右半は中川櫓台の石垣で、左半は縁石の一部を構成する石垣である。 ・高さは中央部で約0.4m、全長は天端で約23.0mである。 ・勾配は50～83度となっているが、一石のみのため不正確である。
積み方石材等	・石材は花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模はやや小ぶりのものが多く見られる。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・明治以降に崩された石垣であり、栗石が散乱している。 ・現存部は破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・右半は本来中川櫓台の石垣であるため、高さ約2mの石垣だったと考えられる。明治以降に崩され、中の栗石が散乱した状態である。 ・『旧高松御城全図』によると左半分が、本丸の開口部であったと考えられる。 ・左半は明治以降の後世に積み足されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1020	地区	本丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法			
方　位	東				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無				刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.26	1.23	0.43	－	0.53	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．No.1019が奥に入っているため、これより後のもの

※後世の植桝か区画界と思われる一石のみの列石状石垣

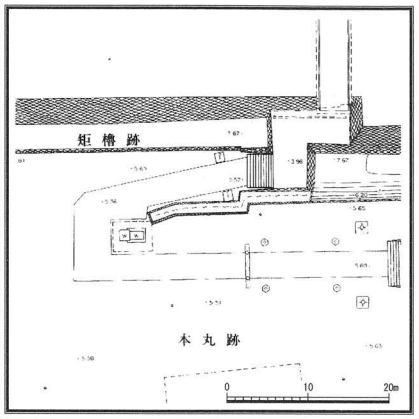
備　考	短い石垣のため中央高省略、一石のみの石列	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の入口部に設けられた一連の縁石状石垣の一部を構成する東面石垣である。 ・高さは約0.5m、全長は約1.3mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた石列である。 ・石材は方形、やや丸みのある形状が混在し、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図に描かれておらず、明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1021	地区	本丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法			
方　位	南				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	12.42	12.42	0.36	0.4	0.42	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．折れ

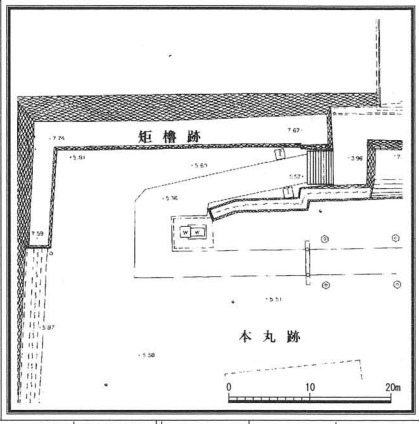
※後世の植桝か区画界と思われる一石のみの列石状石垣

備　考	一石のみの石列	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の入口部に設けられた一連の縁石状石垣の西側へ延び出した部分を構成する南面石垣である。 ・高さは約0.4m、全長は約12.4mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた石列である。 ・石材は方形、やや丸みのある形状のものが混在し、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1022	地区	本丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法		列石	
方　位	西				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.42	1.42	0.36	0.4	0.42	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※後世の植桝か区画界と思われる一石のみの列石状石垣

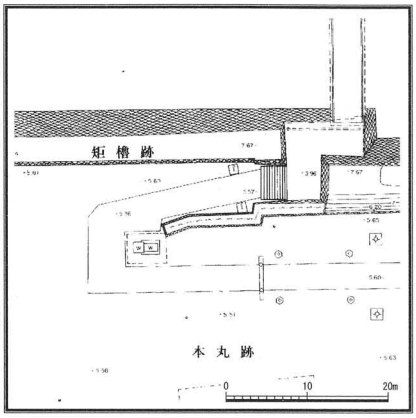
備　考	一石のみの石列	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の入口部に設けられた一連の縁石状石垣の西側へ延び出した部分を構成する西面石垣である。 ・高さは約0.4m、全長は約1.4mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた石列である。 ・石材は方形とやや丸みのある形状が混在し、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1023	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	列石	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

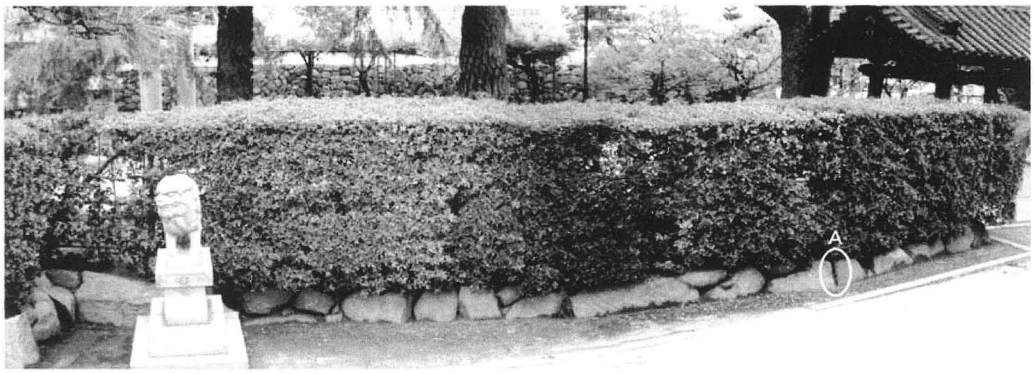


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	11.75	11.34	0.52	0.31	0.32	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．折れ

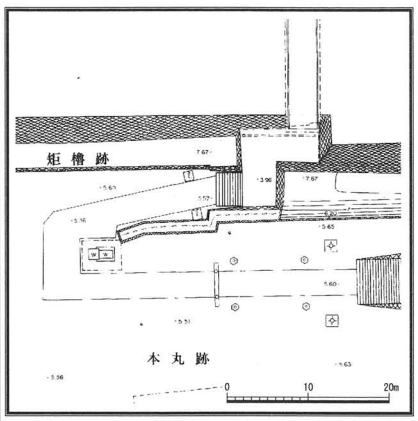
※後世の植桝か区画界と思われる一石のみの列石状石垣

備　考	一石のみの石列	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の入口部に設けられた一連の縁石状石垣の西側へ延び出した部分を構成する北面石垣である。 ・高さは約0.3m、全長は約11.8mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石、切石を用いた石列である。 ・石材は方形の形状のものが多く、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

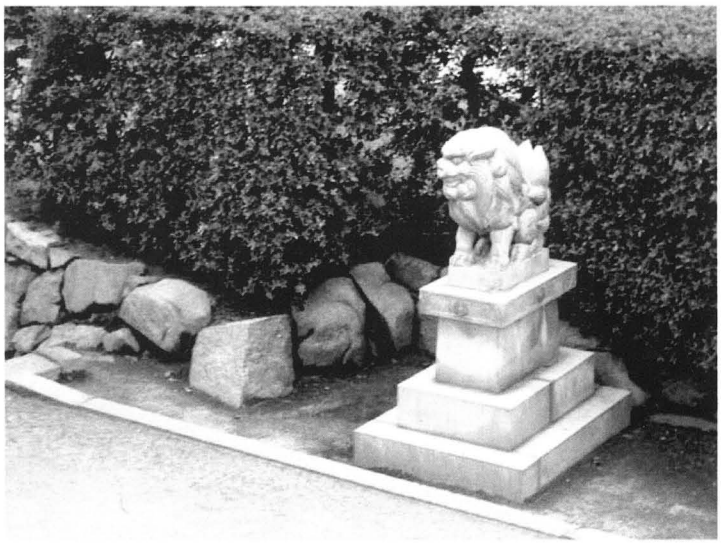
石垣番号	1024	地区	本丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法		列石	
方　位	西				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.24	1.35	0.43	－	0.54	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



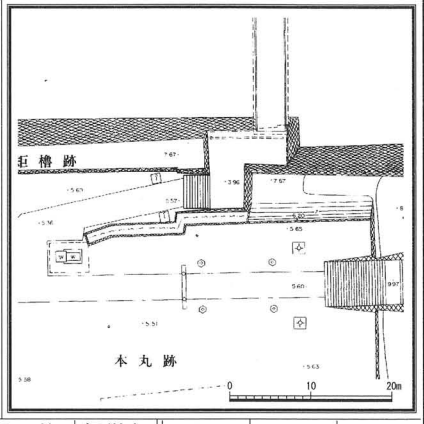
※３石のみの列石状の石垣
石垣というより石を並べただけという感じ

備　考	短い石垣のため中央高省略、一石のみの石列	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の入口部に設けられた一連の縁石状石垣の西面石垣である。 ・高さは約0.5m、全長は約1.2mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた石列である。 ・石材は方形とやや丸みのある形状が混在し、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1025	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	谷積	
方　位	北				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木）右		
	右隅角	すりつけ			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.64	4.19	2.08	2.17	0.45	79	82	80	80	67

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※全面谷積で石材の大きさ、材質もバラバラ
絵図等で本来石垣のある位置ではないので、後世のものと思われる

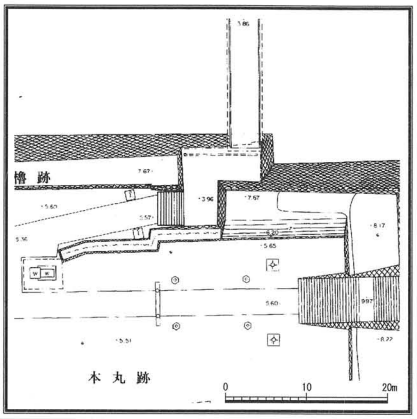
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸北部の入口部に設けられた一連の縁石状石垣の北面石垣である。 ・高さは約2.2m、全長は天端で約8.6mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石や野面石を用いた谷積である。左隅角は入隅、右隅角はすり付けである。 ・石材は方形とやや丸みのある形状のものが混在し、規模も大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・谷積となっていること、隣接石垣より高さが低いこと、絵図と異なることなどから明治以降の築造であると考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると、石垣部分が本丸の開口部であったと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1026	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	中川櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無				刻　印		○、×、ち、長方形、分銅形	

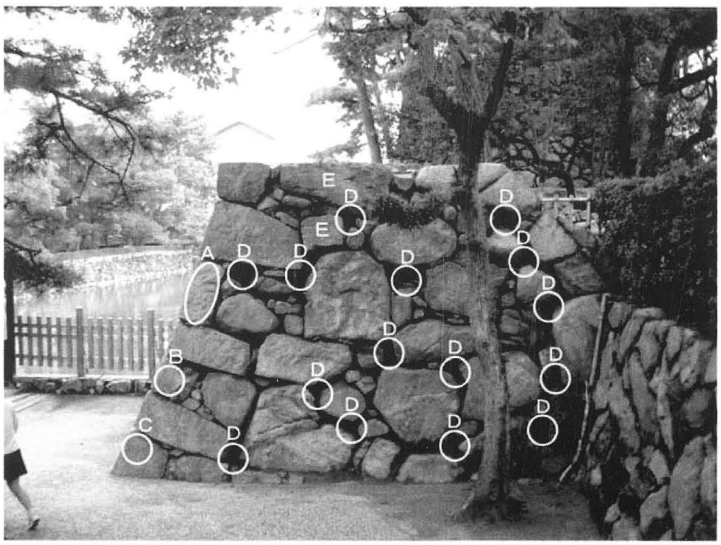


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s23			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.9	5.54	3.83	3.69	3.71/2.24	68	81	81	83	79

築造時期	生駒期・松平初期	改修	基底部
修　理		文献資料	
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



A．刻印○×ち(?)
B．刻印□
C．刻印分銅
D．間詰石ヌケ
E．安山岩

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

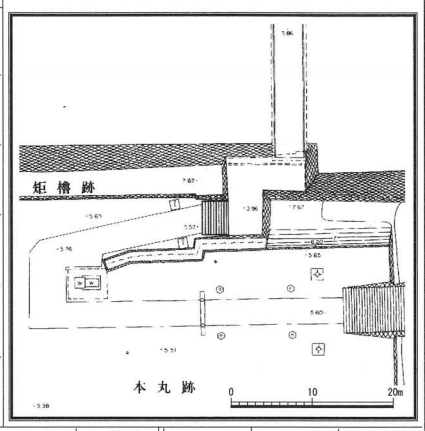
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は本丸北部の虎口を構成する西面石垣である。 ・高さは中央部で約3.7m、全長は天端で約5.9mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は加工精度がそれほど高くない切石を用いて積み上げられている。右隅角は右下がりに天端を地盤にすり付けた、数少ない事例である。 ・石材は方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模はやや大きめのものが多いが、小石材も混在する。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅3石目に○・×・ち、5石目に長方形、7石目に分銅形が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のヌケが多く見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・目立った改修痕跡は見られない。 ・右隅角部の取り外しが行われたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1027	地区	本丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	石段				石積工法		
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

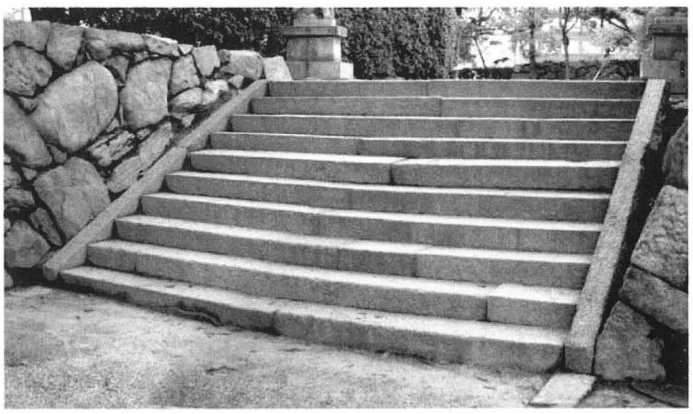


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.78	－	－	－	－	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



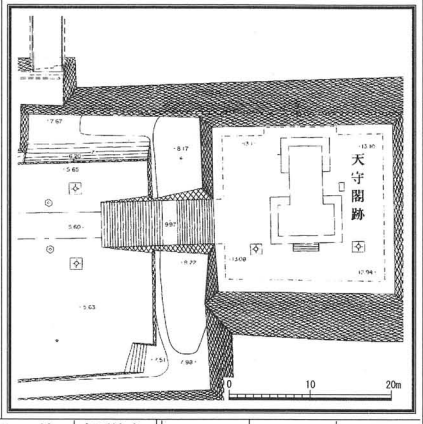
特に問題無し
後世のものか？

備　考	雁木10段、雁木のため勾配なし	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本丸北部の入口部に設けられた石段である。 ・最上段での幅は約3.8mである。段数は10段。
積み方石材等	・踏み面、側面とも切石を用いた石段である。 ・端正な仕上げの石段である。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・明治34・35年の玉藻廟建築に際し、築造された石段と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

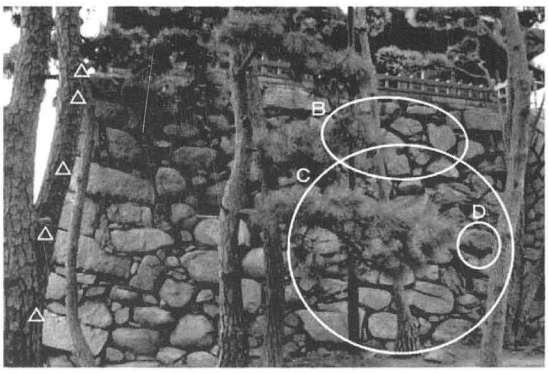
石垣番号	1028	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	内(天守台)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ	
上部構造物	天守				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			長方形、ち、り、分銅形	

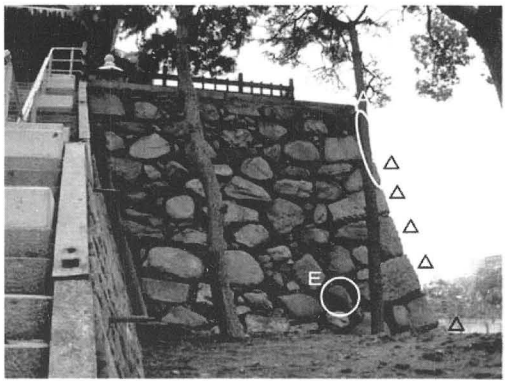
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s4	s2	s23				s2		有	a2	b1	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	6.26	6	4.42	4.62	4.89	65	-	70	-	65
	左	9.06	10.32	5.02	4.83	4.44	67	-	75	-	65

築造時期	生駒期・松平初期		改修		基底部
修　理			文献資料		
発掘調査	平成18年度		その他の調査		
その他記述 1	墨書「柵天守九尺五寸下水」「平基」		その他記述 2		

破損現状





△矢穴のある石
A．ソリ
B．ワレあり
C．うすいハラミ
D．ワレ落ち
E．ズレ
※間詰石のヌケ多い
　野面の大石を多く用いる。正面性を意識したものか。

備　考		調査年月日	平成16年12月17日

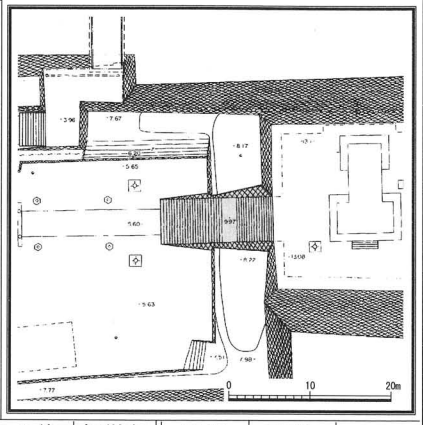
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は天守台の西側石垣で、天守台正面に位置する石垣である。本丸から天守台上へ上がる石段が中央に取り付けられていた。 ・高さは約4.8mであり、本丸から天守台天端まではNo.1018石垣と合わせて約6.8mの比高がある。 ・天端での全長は石段の左側部分が約9.0m、同右側部分が6.3mである。中央の石段部を入れると約20.8mとなり、天守台の西面を形成している。 ・平成18年度に石段を撤去したところ、天守地下1階へ入るための入口部分が検出された。 ・勾配は中央部で右側部分が70度、左側部分が75度とやや緩やかである。両端では65度であり、かなり緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも適切な形状、大きさに加工された切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形のやや丸みのある形状のものが多く、規模はやや大きめのものが多い。 ・天端には扁平な石が配され、上面を揃えている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は穴蔵入口左袖2石目に長方形・ち・り、3石目に分銅形が見られる。 ・穴蔵入口左袖下部に「棚天守九尺五寸下水」「平基」の墨書が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・部分的に石材のズレやワレが見られるが、大きな破損には至っておらず、石垣面は安定している。 ・左側の石垣では、薄いハラミと間詰石のヌケが見られるが大きな破損には至っていない。 ・右側石垣の左端部には、コンクリート製の排水管が設けられ、石段との入隅に沿わして管が設置され、景観上そぐわないものとなっていた。
石垣の変遷	・排水管部の積み直しが明治以降に行われている以外は、特に積み直しは見られない。現存する石垣は、生駒期の石垣かあるいは、松平初期の天守改築に伴って積み直しが行われたものかは不明である。 ・穴蔵入口は、明治34・35年の玉藻廟建築の際に石垣でふさがれた状態であった。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1029	地区	本丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	石段（後世のもの）				石積工法		
方　位	西				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	分銅形、○の中に×	

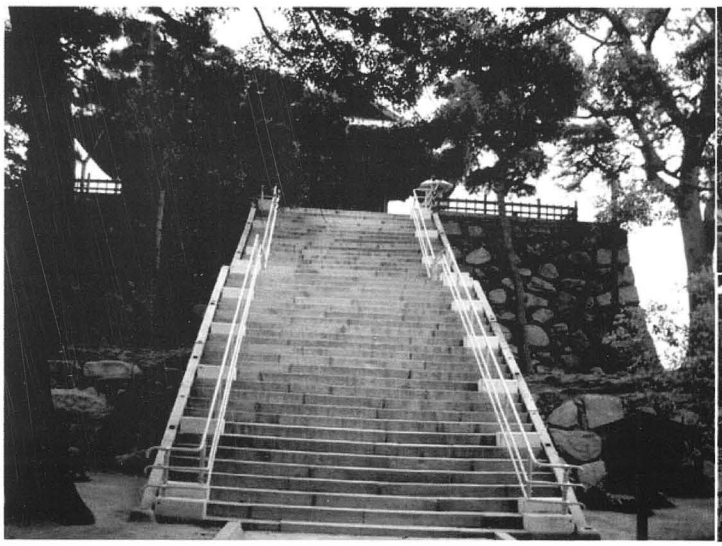


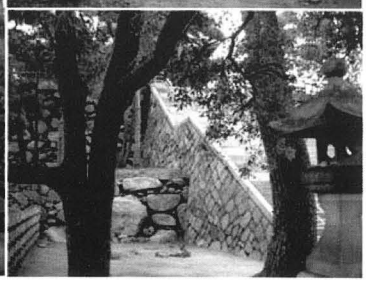
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.5	5.5	－	－	－	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	平成18年度撤去	文献資料			
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1	墨書「杉七」	その他記述 2			

破損現状





※明治35年の玉藻廟建設に伴うものと思われる。石段は花崗岩の切石使用。側面は切石の布積。

備　考		調査年月日	平成16年12月17日